

第7表 住居跡別出土土器破片数

No	住居跡	器種 類別	環 類				甕 類			計
			A	B	C		A	B	C	
					C I	C II				
1	X F 24 住		7		1	27	66	2	1	104
2	X H 09 住		72			32	3	2		109
3	X J 03 住									
4	A C 15 住		2		7	147	216	9		381
5	A D 12 住		7		7	30	13	1		58
6	A D 21 住									
7	A E 12 (I) 住		16 (4)	13	56		16	6	1	108 (4)
8	A E 12 (II) 住									
9	A E 24 住						1	1		2
10	A F 21 住		2			3		1		6
11	A F 24 住		6			10	9	2		27
12	A G 18 (I) 住		23 (1)		19	66	46	43		197 (1)
13	A G 18 (II) 住		73 (2)	2	18	157	327	15		592 (2)
14	B A 18 住		1			2		4		7
15	B C 06 住				3	11				14
16	B C 09 住		2 (1)		1	6	2			11 (1)
17	B E 12 住				2	1				3
18	C H 18 住		1	2		21	28	8		60
	X 区 遺 構 外		9 (2)		3	39				152 (2)
	A 区 "		48 (4)		24	98	181	57		408 (4)
	B 区 "		22 (4)	4	9	66	67	27	2	197 (4)
	不 明		23 (3)	1	20	212	25	72		353 (3)
	計		314	22	170	928	1,000	250	4	2,789

注 () 内の数は内外黒の破片数を表わし、破片数に含まれている。

24住、BE12住の2棟である。しかしA I類土器を伴う遺構でありながらC類土器を共伴し、A類、B類の共伴遺構でもC類土器を伴う事実がある。しかもC類土器の出土頻度が各住居跡とも高く特にAC15住の場合実測に耐える個体数が21個、破片数で154片に達している。またAG18(II)住なども極めて量的に多い数値を見せている。本項で扱うC類土器は一般に赤焼き土器と呼ばれる一群の土器でこれの初現は量的に多くないものの9世紀代^{注4)}から焼かれていることが過去の調査例で確認されている。次に相去遺跡の調査例で第1期に相当する遺構からA I類(内黒、糸切り無調整、外底部ケズリ、内外面ミガキ)の環にB I類(酸化焙焼成、糸切り内外無調整、赤褐色または白褐色)の環の共伴例がある。量的にはA I類大半に対しB I類少量で、これを10世紀代に位置づけている。したがってこの頃にはかなり一般的に赤焼き土器が焼成されるようになったことを示している。11世紀代に入ると赤褐色で硬質の土器生産が主流を占め住居跡では内黒環を少量伴っており、秋田県地方ではこの赤褐色土器の全盛期を経て古代土器の終末を迎えると云われる。以上からみると赤焼き土器は9世紀代に始まり11世紀代に隆盛期を迎え12世紀頃まで

継続したことになる。これを本遺構の出土土器と対比した場合、古手のAⅠ類土器とC類土器の共伴事実をどう解釈するかという新たな問題につき当る。ロクロ成形になる坯で底部及びその周辺に手持ちヘラケズリを受けるものはおよそ10世紀代に編年されており、さらに調整だけでなく器形の上でも体部の立ち上がり丸味をもって立ち上がり器高が平均値で5.35cmと比較的高い数値をみせ内黒土師期の末期的様式に違い。また体部の外面全体に細かいヘラミガキが全面に施こされ作りの丁寧さがみられ、これまた古い様式の特徴をみせている。この共伴事実をもってすれば本遺構の第1期は過去の調査事例に例がなく時期的にはやゝのぼるものと云えそうである。このような共伴例が本遺跡だけにみられる特異なものであるのか、あるいは今後の調査において同様の類例が発見されるのか現時点では云えない。

甕類については比較的小形のものの中形のもので占められ製作にロクロ未使用と使用のものが混在している。ロクロ未使用のものには巻き上げ法により底部は平底で器形の調整にヘラケズリ及びナデを用いているが肩部有段、叩き目等の古手の様式はみえない。ロクロ使用のものでは体部上半から口縁部にかけてのものが一般的で胴部下端は巻き上げ後粗いヘラケズリ手法がとられている。口唇部は「く」の字状に外反して終るものと上下、または上方に換き出すいわゆる縁帯の回るものなどがみられる。このような甕類については製作方法、器形、胎土、焼成などから瞭然とした時間差を読みとることはできない。類例として力石Ⅱ遺跡^(注5)のF-2住居跡出土のものがある。

次に粗掘時点で出土した土器にロクロ未使用の壺形土器の口縁部破片がある。これは金ヶ崎町西根遺跡^(注6)出土のものに寸法、器形とも一致するものである。器形は胴部がやゝ丸味をもち頸部が「く」の字状に屈曲し口縁部が内彎しながら内傾するものと推測される。西根遺跡の出土壺は前期末の年代を与えられている。前期土師器はロクロ未使用土器でその年代はおよそ8世紀末から9世紀初頭頃と考えられている。一方県内における類例として和賀郡備谷地古墳、二戸郡掘野遺跡などがある。出土したただ1点の土器片をもって即断することは些か危険であるが10世紀代に先行する遺構の存在を示唆している。

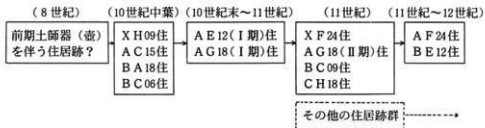
・ 石製品(碁石)

AG18Ⅰ期住出土の碁石は計10個を数え内訳は白石4個、黒石6個である。計測による平均値は直径1.6cm、厚さ0.7cmで、奈良正倉院^(注8)の碁石は直径1.6cmを測り本碁石と一致する。次に囲碁の遊戯文化がいつ頃本地方に流布していたかについて文献資料をもとに考察してみたい。そもそも遊戯文化として碁が招来されたのは平安時代の初期と考えられている。平安時代庚申祭が最初である。次に「大鏡」の天曆3～4年頃の庚申祭に碁や双六がでている。また「栄華物語」にも天元5年(982)正月27日の条に「女房たち、ご、すごろく程いども、いとおかしくて…云々」とあり夜通し歌合せや碁などを楽しんでいたようである。このように中央貴族の間では碁、双六は日常生活の中にすでに定着していたものと解される。しかし陸奥国にこのような文化が導入される時期はどうかについて「奥州後三年記」によれば陸奥鎮守 將軍、清原武則の孫直衛が永保3年(1083)海道小太郎成衡を養子に迎える祝儀の時、真衡は真衡の護持僧、奈良法解「五そうの君」と囲碁に夢中になり、はるばる出羽国から向いた真衡の大祖父吉彦秀武が祝儀の砂

金を盆に捧げていたが見向きもされなかった。やがてこのことが後三年の役の発端の原因と云われる。この中で真衝が「囲碁に夢中になり…、ということから11世紀末頃には当地方にも囲碁の流入がもたらされていたことを証明している。一方相手の奈良法解については護持僧が当時自由に出入りできる格式の寺は北上市の準官寺、極楽寺と大和国長谷別院と考えられる北上市黒岩の長谷寺の二寺だけである。極楽寺の創建は天安元年（875）6月3日文徳天皇勅許により本遺跡の東方3kmに位置する。長谷寺は6km北にのぼり本遺跡はこれら両寺の文化圏の中に包含されている。また遺跡の西丘陵上に往昔大手寺が創建されていたことが石碑に残りかつ西方1kmには千日寺の伝承もある。このように本地域には仏教を仲介とする文化がほぼ一円に及んでいたと考えられる。このことをもって仏教文化と遊技文化としての囲碁を短絡的に結びつけることはできないにしても「奥州後三年記」の文献資料をもとに本遺構出土の碁石はほぼ11世紀頃に比定されるものと思われる。

(3) まとめ

住居跡遺構、出土土器、碁石の夫々について述べたが最後にこれらをもとに本遺構の時間的推移とおおよその年代を想定してみたい。遺構と遺物の共存関係をもとにその推移を図式化するとおおよそ下記のようなことになると思われる。



即ちA E 12 I期住群からB E 12住群まではほとんど連続的に集落の営みがあったものと思われる。ただ8世紀代の集落(集落と云えないかもしれない)の存在が容認されるならば次のX H 09住群の出現まで集落の形成が中断され新たにロクロ使用土師器の新時代の集落が営まれたことになる。

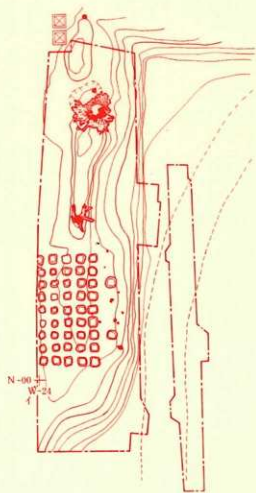
付記

A F 21住居跡出土遺物のうち、「紙」または「布」と思われるものについて工業試験場に依頼した結果、下記の鑑定結果をえた。

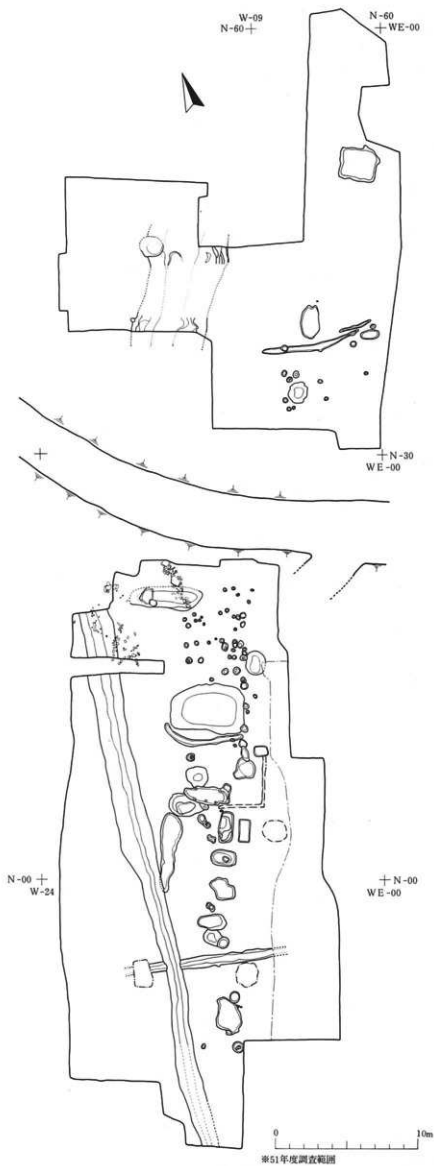
「電子顕微鏡写真の結果からみて、試料は、紙か、布か？という判断は疑わしい。X線回折の結果からは石英が検出されており、これは泥土等を伴って堆積した植物の葉の様な感じを受けるが、これらの観測の結果からだけでは、断定は困難である。又、中にはけい藻のけい殻と思われるものも散見される」したがって、紙、布、葉のいずれとも現段階では云えない。(図版26)

N-30
W-24

ア
+N-30
W-15



●50年成調査範囲



第59図 中・近世遺構配置図

〔3〕 中、近世遺構

(1) AD24溝 (第60図・図版13)

表土除去後第2層シルト質粘土の地山面で本遺構を検出した。BA50から南へ19m、西へ12～15m、北へ19m、西へ19～21mの範囲内に検出。また南北軸から西へ約13度の傾きをもってほぼ直線状に南北に走っている。検出された全長は約38mを測るが南北の延長は調査区外のため未調査に終った。部分的に新規の溝で切られていたが遺存度は極めて良好であった。溝断面形は堀状遺構の箱葉研掘の形状をみせ夫々の実測値は上端巾1.5m～2m、下端巾0.3m～0.5m、深さ1m内外である。埋土は9層からなり最上層は暗褐色のシルトで木炭粒子、土器片(縄文土器、土師器、須恵器)を包含していた。埋土中位層から川原石、凝灰岩の山石、火山性浮石また石器(凹石、石皿)など大小様々の礫が入り組んで検出された。これらは暗褐色の粘土質シルトにのるものである。この敷石状礫群は北端から南30m地点まで連続してみられ、それより南には検出されなかった。最下層は褐色または暗褐色の層で粘質性に富むシルト層である。各層とも遺物の包含がみられるが特に2層から8層にかけて顕著である。断面観察で礫は溝の底面から15cmほど浮いた状態となっている。また礫群に特に規則性は認められなかった。

〔まとめ〕 溝遺構は平安時代の竪穴住居跡のいずれをも切りまた近世遺構である敷石群、一字一石経塚の下層に潜っていることから、鎌倉時代から中世末の間に構築された遺構と理解した。遺構の性格については決定的資料に欠けここでは即断を避けておく。ただ県内に類例を求めると江刺市稲瀬の比叟柵跡(現照岡小学校の北側)にその調査例がある。

(2) XF18堀跡遺構 (第61図・図版13)

BA50から北へ39～45m、西へ9～18mの範囲内に検出した遺構である。耕作土除去後褐色乃至暗褐色のシルト質粘土の上面で遺構を確認した。断面形状は箱葉研で埋土は5層から構成される。埋土の4層上面までは木炭末及びチップ等を包含する。埋土の観察から自然堆積の層相を呈している。一方北側に検出したものは北西隅に円形状の掘り込みが認められたが時間的余有がなく全掘に至らなかった。この掘り込みは埋土の切り会いから掘跡の埋設後4b層を切って掘り込まれた井戸跡と想定される。本遺構は南北両平面ブラシから東西巾約9m、底部巾約1.5m、また検出面からの深さ1.5m内外の規模をもち南北方向に伸びるものである。

〔まとめ〕 本遺構の構築時期、性格等について明瞭な共伴遺物に欠けるが西方に位置する^(注10)白髭館に伴う陸跡の可能性が考えられる。本館は中世まで白髭館と呼ばれ近世には名称を金崎橋と改めている。白髭館は鬼柳氏の一族が居城したと伝えられ、また安政5年の「下鬼柳村絵図」^(注11)によると白髭大明神が祀られている。なお神社の位置はかつての本丸跡と推測されるしその手前にはほぼ東西方向に一条の空堀りが現存する。したがって本遺構は館の外堀的性格のものとも考えられるが限られた調査範囲の中でその全貌を把握することができなかった。よって今後何らかの調査の際に本遺構の性格などが明らかにされるものと思われる。

(3) 御飯屋の堀跡遺構 (第62図・図版15)

御飯屋については口碑、記録などによりその実在が証明されていたがその正確な位置、及び規

模については歴然としたものはなかった。御飯屋跡は近現代において宅地化され、また西方に煉瓦工場と付属建物が建てられ攪乱の著しい場所であった。また、この御飯屋跡地と目される場所に明治5年の学制発布の折、鬼柳学校が建設されるなど再三にわたる破壊を受け地形の変容が著しかった。

(A) 御飯屋の記録 (第63図)

御飯屋については旧鬼柳村の「村治調査録」⁽¹²⁾に次のように記されている。

御飯屋「鬼柳村西裏鉄道線路東側ニアリ往昔南部氏ノ飯屋ニテ參勤交替ノ途次宿泊ヌハ休憩セシ処ナリ、宏大ナル建物ナリシガ、明治初年火災ニカカリテ焼失セリ」と、また安政5年(1858)の「下鬼柳村絵図面」⁽¹³⁾にも御飯屋が記されている。絵図では観音堂の真東に位置し東西と北側を居久根様の立木でとり囲んでいる。南側には柵木がみえ二ヶ所に門を設けている。さらに「鬼柳御飯屋絵図」にその規模、部屋の間取りなど詳細に記されている。これによれば屋敷の規模は南北約30間、東西約27間で建物の周りに土手をめぐらし、土手には萩垣きが組まれている。またこの土手の外形を南側を除き「コ」の字状に掘りがめぐらされていた。

(B) 堀跡遺構

基準点の南12～87m、東9～西12mの範囲内で第2層褐色シルト質土上面で遺構の一部を検出した。堀遺構の調査は南辺に各1ヶ所、西辺に2ヶ所の計4ヶ所を長軸9m、短軸3mの範囲内について夫々精査した。堀の断面形は箱葉掘り埋土は13層に分層される。掘り込み面は褐色シルト層の上面から掘り込まれているが上端付近は後世の攪乱により判然としなかった。検出面での規模は上端巾約5m、下端巾約1m、深さは2mを計測した。堀の南北距離は66mを測り建物跡の南を残し「コ」の字状にめぐっていた。埋土の6～11層内には焼土、炭化物、焼石、壁材の残骸、陶磁器片及び金属器などが混入していた。遺物の出土状況から焼失建物とみて間違いない。堀跡は「御飯屋絵図」に記されたものと規模、形状など一致していた。さらに堀跡遺構以外に建物跡遺構の追跡調査を行ったが後世の攪乱と削平により検出できなかった。

〔出土遺物〕(第64図・図版21・22)

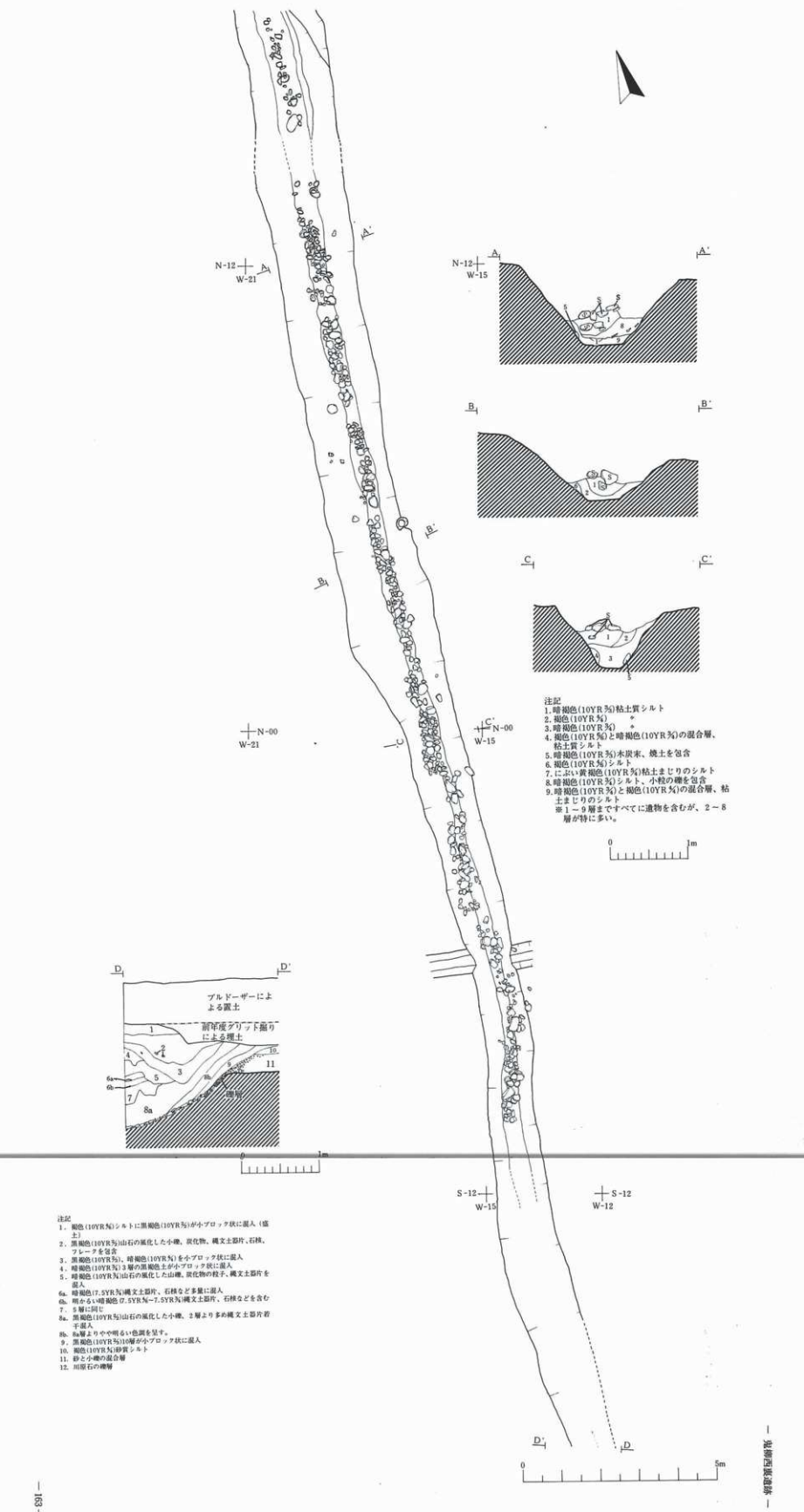
土器類 土器は平安時代の土器を主体に若干の縄文土器片を出土しているが縄文土器については細片のため省略する。平安時代の土器はA類(土師器)B類(須恵器)C類(赤焼き土器)の全てにわたっている。出土状況は表土攪乱層出土のものと、堀跡の埋土内に含まれていたものがある。これらの土器片は全て遺構に伴うものとはみられず流れ込みによったものである。器種には坏、高台付坏、高台付盤、甕などがある。

陶磁器(第66図)

出土した器種は碗、皿、鉢、壺、甕を主体に器種不明のもの若干がある。これらは全て破片で出土した。実測可能なものについては第66図に示すとおりである。出土した陶磁器は近世の所産で窯業地も地方窯の可能性が強いとみられている。

金属器(第65図・図版21)

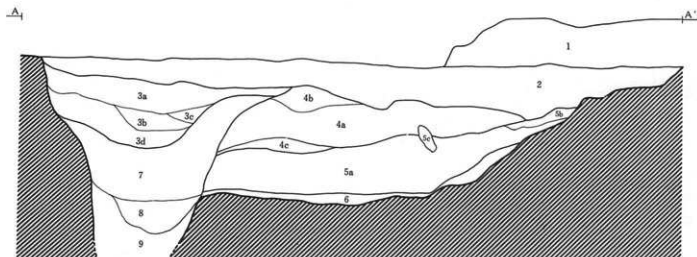
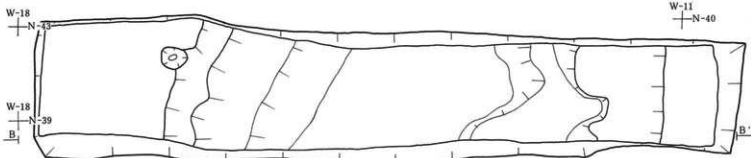
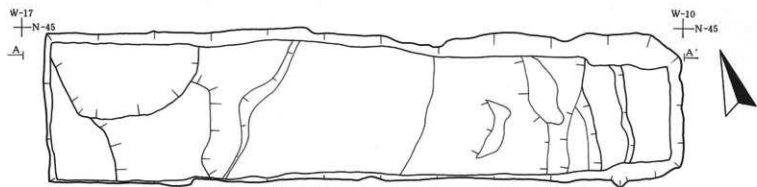
天秤皿2枚が攪乱層から出土している。竿秤の天秤皿で両者はセット関係にはならない。1は薄手の作りで内面中央付近に刻印が認められる。刻印は1.8cm四方の枠の中に「御秤所、正得皿」



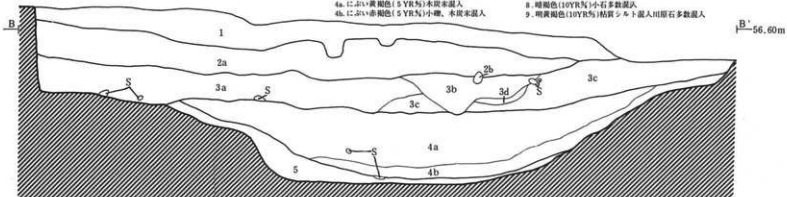
注記
 1. 暗褐色(10YR 3/5)粘土質シルト
 2. 褐色(10YR 4/5)
 3. 暗褐色(10YR 3/5) *
 4. 褐色(10YR 5/5)と暗褐色(10YR 3/5)の混合層、粘土質シルト
 5. 暗褐色(10YR 3/5)木炭末、機土を包含
 6. 褐色(10YR 5/5)シルト
 7. 7. により黄褐色(10YR 5/5)粘土まじりのシルト
 8. 暗褐色(10YR 3/5)シルト、小粒の礫を包含
 9. 暗褐色(10YR 3/5)と褐色(10YR 5/5)の混合層、粘土まじりのシルト
 ※ 1-9層まですべてに遺物を含むが、2-8層が特に多い。

注記
 1. 褐色(10YR 5/5)シルトに黒褐色(10YR 2/5)が小ブロック状に混入(露土)
 2. 黒褐色(10YR 2/5)山石の風化した小礫、炭化物、機土部片、石粒、フレークを包含
 3. 黒褐色(10YR 2/5)、暗褐色(10YR 3/5)を小ブロック状に混入
 4. 暗褐色(10YR 3/5)3層の黒褐色土が小ブロック状に混入
 5. 暗褐色(10YR 3/5)山石の風化した小礫、炭化物の破片、機土部片を混入
 6a. 暗褐色(10YR 3/5)機土部片、石粒などを多量に混入
 6b. 同6aより暗褐色(10YR 3/5)土質が顕著に見す
 7. 多層に同じ
 8a. 暗褐色(10YR 3/5)山石の風化した小礫、2層より多量の機土部片等を混入
 8b. 8a層よりやや明るい色調を見す
 9. 黒褐色(10YR 3/5)層が小ブロック状に混入
 10. 褐色(10YR 5/5)砂質シルト
 11. 砂と小礫の混合層
 12. 河原石の礫層

第60図 A D 24溝断面図



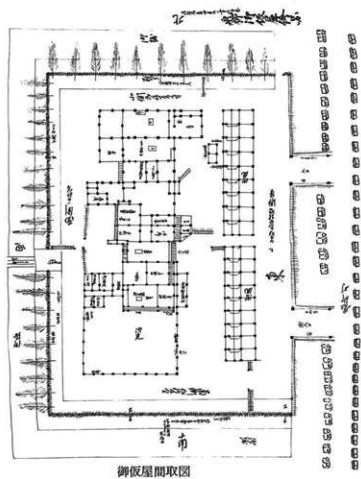
1. 遺土
 2. 褐色(7.5YR5)粘土質シルト、砂子が散らかる、若干の赤褐色土層
 3a. 褐色(10YR5)シルト質粘土、赤褐色、小礫混入
 3b. 褐色(10YR5)シルト質粘土、赤褐色、小礫混入
 3c. 褐色(10YR5)シルト質粘土、赤褐色、小礫混入
 3d. 褐色(10YR5)シルト質粘土、赤褐色、小礫混入
 4a. 赤褐色(5YR5)粘土質、木炭微粉混入、チップ1角
 4b. 赤褐色(5YR5)粘土質、木炭微粉混入、チップ1角
 4c. 赤褐色(5YR5)粘土質、木炭微粉混入、チップ1角
 4d. 赤褐色(5YR5)粘土質、木炭微粉混入、チップ1角
 5. 明褐色(10YR5)粘土質シルト
 6. 明褐色(10YR5)粘土質シルト
 7. 褐色(7.5YR5)に明褐色(7.5YR5)、赤褐色(2.5YR5)をアロク状に混入、赤褐色混入
 8. 明褐色(10YR5)粘土質、小礫混入
 9. 明褐色(10YR5)粘土質、小礫混入



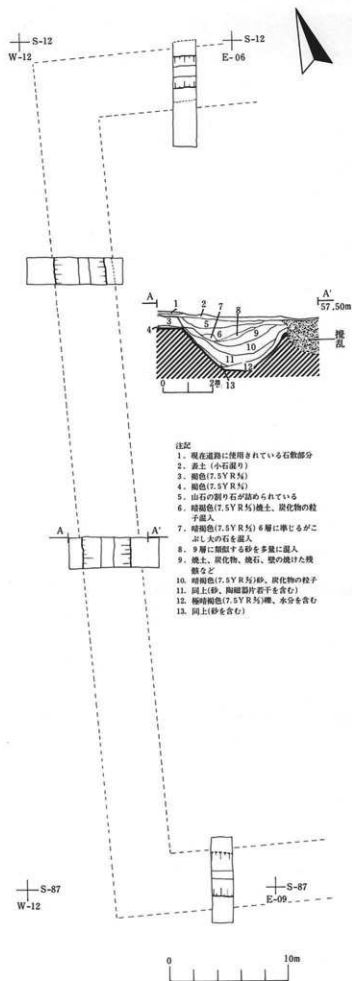
1. 遺土(10YR5)所々に焼土(φ1cm±)木炭混入
 2a. 褐色(10YR5) (φ1cm±)内外の小礫を混入、全面に木炭粉未混入
 2b. 褐色(10YR5)川砂状の均質の土
 2c. 褐色(10YR5)川砂状の均質の土
 2d. 褐色(10YR5)川砂状の均質の土
 3a. 明褐色(10YR5)木炭末をわずかに混入
 3b. 明褐色(10YR5)褐色シルトを含む、赤褐色、チップ等混入
 3c. 明褐色(10YR5)褐色シルトを含む、赤褐色、チップ等混入
 3d. 明褐色(10YR5)褐色シルトを含む、赤褐色、チップ等混入
 4a. 褐色(7.5YR5)粘土質、木炭微粉混入、チップ1角
 4b. 褐色(7.5YR5)粘土質、木炭微粉混入、チップ1角
 4c. 褐色(7.5YR5)粘土質、木炭微粉混入、チップ1角
 4d. 褐色(7.5YR5)粘土質、木炭微粉混入、チップ1角
 5. 赤褐色(5YR5)粘土質シルト
 6. 明褐色(10YR5)粘土質シルト
 7. 褐色(7.5YR5)に明褐色(7.5YR5)、赤褐色(2.5YR5)をアロク状に混入、赤褐色混入
 8. 明褐色(10YR5)粘土質、小礫混入
 9. 明褐色(10YR5)粘土質、小礫混入

第61図 XF18地状遺構断面図

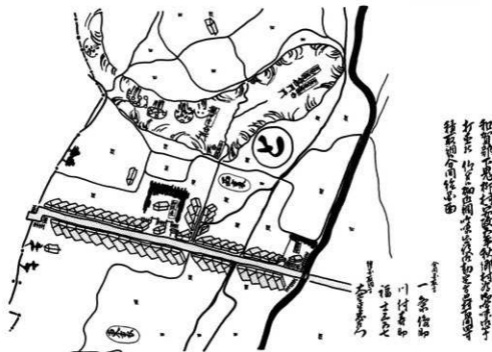




御仮屋間取図



第62図 御仮屋垣跡平面図

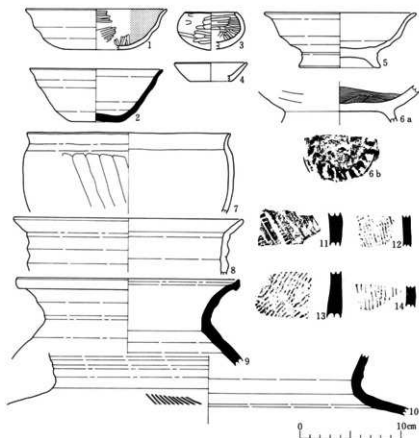


第63図 下鬼柳村絵図（部分）

とあり、枠外の下に「什」の一字がみられる。材質は真鍮である。2も同様の材質であるが厚さ1mm強を測り厚手の作りである。前者は上部に4個の穴を穿っているが後者は2個である。前者の類例は北上市民俗資料館で実見している。その他に銅製かんざし、釘状鉄製品なども出土している。

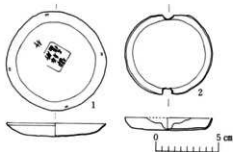
(C) まとめ

南部藩御仮屋についての記録は鬼柳村「村治調査録」以外に創設及び焼失時期は詳らかでない。使用目的については「参勤交替ノ途次宿泊又ハ休憩セシ趣……」の記述から、参勤交替制の施行後の創設になる。参勤交替の制は慶長3年（1603）外様大名の江戸参勤が初めて、寛永12年（1635）三代将軍家光の代に正式に外様大名に参勤交替を命じている。一方藩内の御仮屋については雫石通りに創設されていたことが雫石町史にみえている。同史に「秋田街道には幕府の巡検使や御馬買役人、その他往来する藩の貴賓の宿泊する施設として御仮屋と称する奥州街道の本陣臨陣に該当する建物が用意された。御仮屋については寛文3年（1663）の訴状や元禄4年（1691）の記録によって上と下の二棟が常設されていたことが知られているが開設年代は明らかでない。両御仮屋とも藩支弁の建物で貴賓の他に藩主及び一族の者も利用したものと思われる」御仮屋の創設時期については寛永3年の訴状からみてこれ以前に建設されたことが伺える。したがって参勤交替の正規コースである奥州街道に設けられた鬼柳御仮屋はこれより下ることはないと推測される。以上から1635～1663年の間に両御仮屋は創設されたものと思われる。次に性格については藩主及びその一族、あるいは貴賓または藩役人の休憩所、宿泊所と見て支障ないものと思われる。ただ鬼柳御仮屋は参勤交替の規定コース、伊達藩境という特殊事情が加味され雫石通りのものに



第64図 御飯屋堀跡遺構出土土器実測図

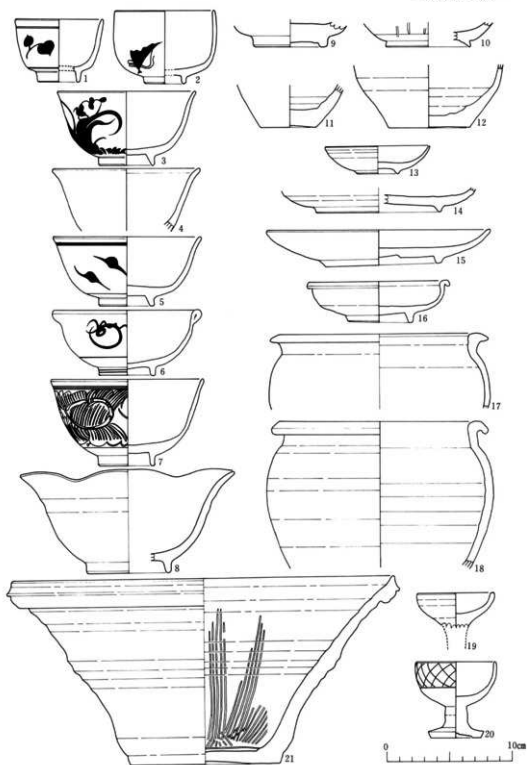
比べ警護面で相異があるものと思われる。既に建物の四囲を土塁が囲み更にその外方に巾 5 m、深さ 2 m の堀をめぐらせていることが如実にそれを物語っている。一方堀の埋土内から当時の大名の生活を示唆する遺物の出土を想定したがそれに該当するものはなかった。その理由として備品類は幕藩体制の崩壊時点で全て盛岡に移管されたものと思われる。なお御飯屋がその本来の機能を失った時点で同建物は鬼柳村の若者宿として再利用されている。若者宿となった明治初年に火災で焼失していることから御飯屋本来の備品の出土のなかったことがうなづかれる。



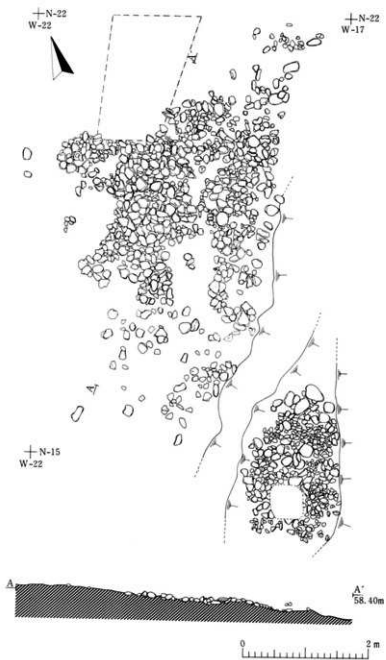
第65図 御飯屋堀跡出土天祥皿

(4) A E 15掘立柱建物跡 (第81図)

A区の東北に検出された遺構である。柱穴は北からビット23、20、7、3、37と22、11の7個である。桁行4間、梁行1間の南北棟と推測される。柱穴内の埋土は暗褐色もしくは褐色が主体をなし単層または3層に分層される。埋土内からの伴出遺物はない。構築時期の決め手となるものはないが一部平安時代の遺構を切っていることからそれ以降の建物跡と理解したい。



第66回 御飯屋堀跡出土陶磁器実測図



第67図 AC22石敷遺構平面断面図

(5) 石敷遺構 (第67図・図版13・21)

一字一石の経塚直下10～20cmの付近に東南方向に向けて礫群の検出をみた。礫は川原石、山石などで規則性はあまりみられないが自然堆積とは考えられない。本遺構に伴う遺物は土器類、陶磁器古銭などであるが土器片は攪乱による流れ込みと判断する。陶磁器類は近世のものである。石敷直上から小皿1枚が出土し「伊万里焼」の鑑定結果を得、^(注18) 時期的には17世紀中葉頃と云われている。古銭は寛永通宝(第87図・図版22)である。以上から本遺構は経塚土壇の下層に位置し伊万里焼の小皿をもって17世紀中頃から経塚造営の間の期間に位置づけられる。なお性格については不明で今後の類例をまて明らかにしたい。

(6) 一字一石経塚

(A) 遺跡の位置と現状

本経塚は東北本線の東に接し、鬼柳町西裏から白髭神社の参道へ通じる踏切の南東に所在する。経塚周辺の地形は南西方向から相去台地が鈎状に突出した崖線下で丘陵との比高は約10m内外を測る。崖東端部は東北本線工事の際に掘削され急崖をなしている。また路線敷と経塚の比高差は約1m前後で東西約3m、南北20mほどのテラス状平坦地を形成する。テラス部の北端はゴミ捨て場となりその南端に接して東北本線複線化工事の際伐採された直径1.5mほどの銀杏の木の切株がある。最近この銀杏の根の切り取り作業中に経石の一部を発見し、経塚であることが確認された。

(B) 調査の経過 (第68図)

調査は経塚を中心に東西約10m、南北約40mにわたって地形測量を行った。経塚主体部は東西及び南北方向に夫々トレンチを入れることにし、経塚土壇が銀杏の根の下に潜り込んでいることからこれの半截と抜根を先行させた。抜根後表土の剥ぎとり作業にかかった。表土(盛土の一部)層は約20～25cmの層厚であった。表土除去後経石が検出された。上層から下層へと経石の掘り上げを進めた。経石の掘り上げ後、埋納土壇の全容を検出し計測を行った。なお経石は墨書の有無別に整理した。

(C) 遺構 (第69図・図版14)

経塚はBA50から北へ17～21m、西へ20～22mの範囲内に構築されたものである。マウンドと周辺の比高は東西線で約40cmを測るが南北線ではその差はなく特に北側は一部攪乱をうけ逆に低くなっている。したがってマウンド自体は銀杏の根の下に埋没しており瞭然としない。マウンドの土層は最上層に極暗褐色の腐植土が層厚20～30cmのり、その下層は約20cmの層厚で暗褐色をベースにした礫の混入層となっている。本層は旧表土への盛土層とみられる。第3層は約15cm内外の層厚を測り、木根の腐植及び川原石を包含するしまりのない土層であり本層を旧表土と確認した。埋納土壇の掘り込み面は第3層の上面から掘り込まれている。土壇本体は3層の下、暗褐色の小礫を包含する層に掘り込まれ土壇底部は褐色の粘土質シルトにまで達している。

(D) 規模と構造

埋納土壇のプランは上端で南北長1.24m、東西長1.04mを測り南北に長軸をもつ長方形を呈している。下端は上端に対して夫々5～10cmほど狭まる。また土壇の深さは掘り込み面から約

50cm前後を測り、墳底部はほぼ平坦であるが、中央部が若干低くなっている。経塚構築頭初はこの上に約30～40cmほどの封土を盛り上げマウンドを形成していたものと思われる。調査時点では銀杏の根が土壌を抱える形で覆っていたが幸い土壌内部への侵入はそれほどみられず遺存状態は良好であった。

(B) 遺物

遺物は全て経石だけで土壌の口いっぱいには納められていた。上層付近のものには墨書は少なく下層に至るほど明瞭なものが多くなる。経石はほとんど川原石が用いられるが1点だけナイフ状の石器(縄文時代)に墨書したものがある。これらの隙は長径数cmのもので大部分が占められ、中には10cm前後の大形のものも散見される。なお墳底部付近では前記のものより大形の川原石に数字から数十文字の墨書のある経石(以下この類のものは便宜上多字石と呼ぶ)20数個出土している。出土した経石は総数24,783個を数え、そのうち墨書の認められるものが(2,548)個である。また読解可能なもの879個、判読や、可能なものと不明のものを合わせると(1,649)個で、墨書の認められるものの中に多字石26個と梵字を23個が含まれている。なお第6表は経石の文字一らん表である。

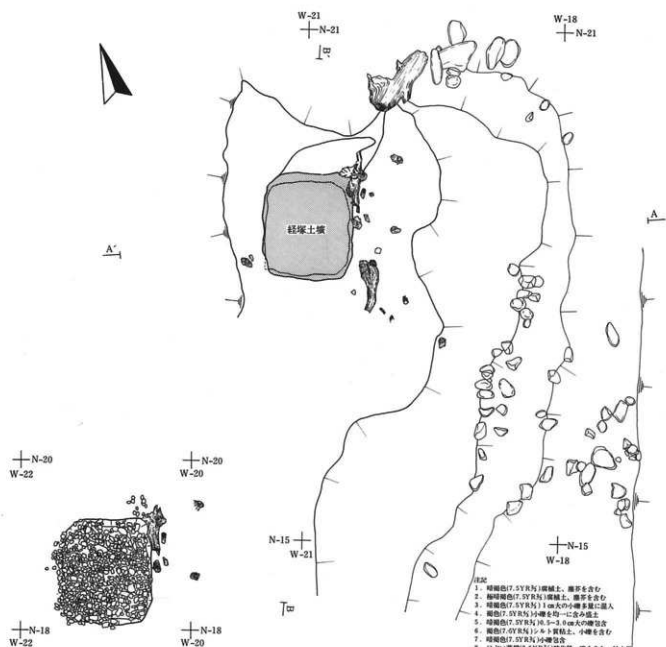
a 経石(一字一石) (第70～75図・図版23～24・第8表～13表)

墨書のある経石2,528個を文字の種類ごとに集計したものが第14表である。これによると墨書文字は445種類となる。さらに文字別に頻度数の高い順にみると「王」75個、「一」60個、「百」55個、「法」47個、「無」44個、「三」42個、「国」39個、「行」38個、「生」33個、「佛」33個、「若」32個、「不」30個、「大」29個、「十」29個、「化」25個、「是」25個、「説」23個、「子」23個、「為」22個、「二」21個などとなる。文字によってはかなりの差がみられることになる。また第75～76図によれば写経に際し同一文字を同一人物が書いたと推測される可能性も伺える。例えば漢数字の「一」はNo.1～7まで例記したがいずれも筆跡に共通性が見られる。次に経石に表われた筆跡別の分類(第76図)によればほぼ10人前後の人々が写経に参加したと思われる。なおこれら経石は一石一字の写経を原則とし、表だけのものと表裏両面に写経したものとの二通りがある。なおこれら経石の材質については岩手大学、村井貞允教授の鑑定で流紋岩、凝灰岩、安山岩等の川原石を主体としているといわれ、和賀川、夏油川に一般的にみられるものである。

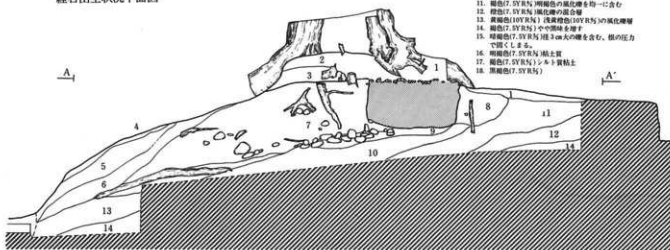
b 経石(多字石) (第15表・図版25)

多字石は総数で26個出土したがこのうち文字不明のものが4個ある。石の形状にはばらつきがあり、扁平、棒状、卵形など様々である。墨書は一行から数行にわたるもの、また字にも大小の差異がみられる。以下、図1～22までを例記すると次のようになる。

- | | | | |
|-----------|---|----------|-------------|
| ① 婆娑□神王 | 卍 | 百千万億劫難相圖 | 我今見聞得受持 |
| 願主 天台沙門亮昌 | | 我今見聞得受持 | 願願如來團一義 |
| ② 奉供養仁王經 | | 願解如來第一義 | ⑤ 扶頭頓 神王 字護 |
| 一石二部 | | 婦命甚深微妙法 | ⑥ 常住妙法心蓮臺 |
| ③ 婆沙□神王 | 卍 | 百千万億劫難相圖 | 本來空圓三身德 |
| ④ 婦命甚深微妙法 | | 南無釋迦牟尼佛圖 | 三十三回 語大布□ |

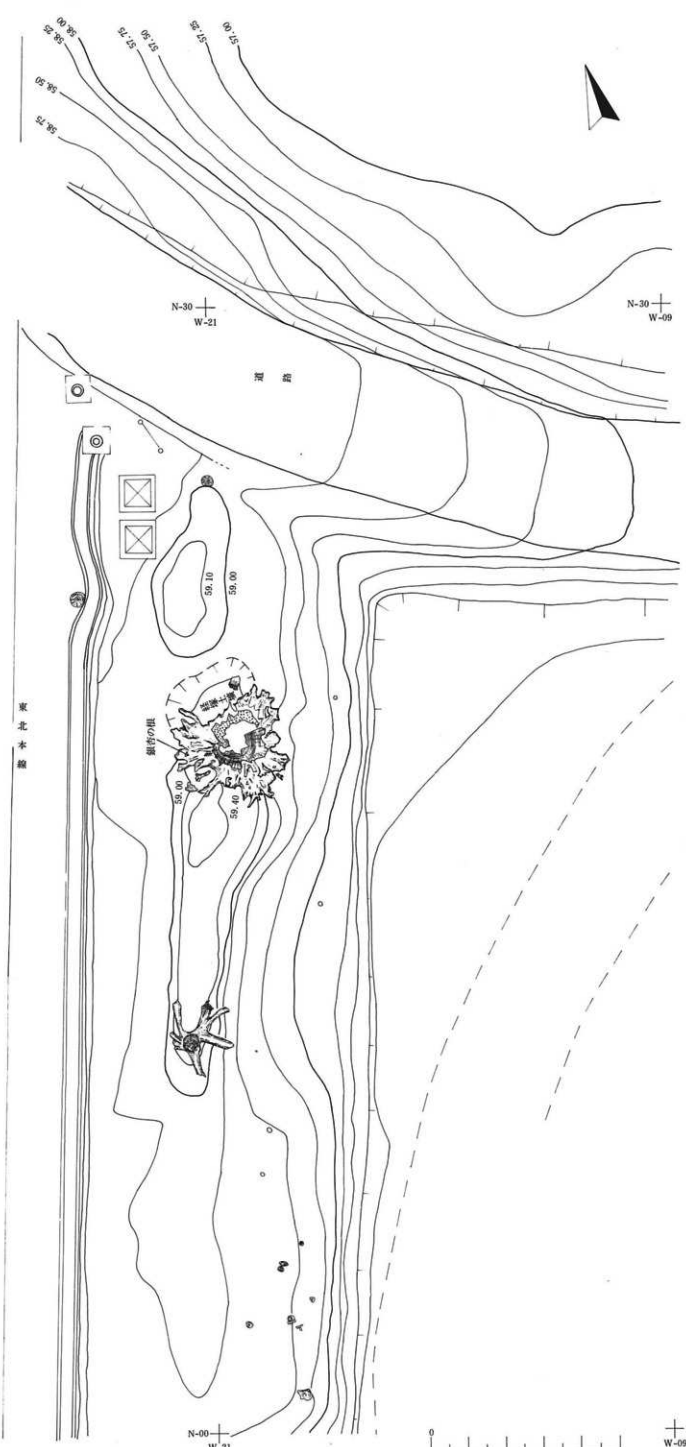


経石出土状況平面図



第69回 経塚断面図

- 注記
1. 経塚(約7.5m角)は、硬質土、礫石を含む。
 2. 経塚(約7.5m角)は、硬質土、礫石を含む。
 3. 経塚(約7.5m角)は、1.0m以内の礫石を多く含む。
 4. 経塚(約7.5m角)は、礫石を多く含む。中心部は硬質土。
 5. 経塚(約7.5m角)は、1.0m以内の礫石を多く含む。
 6. 経塚(約7.5m角)は、1.0m以内の礫石を多く含む。中心部は硬質土。
 7. 経塚(約7.5m角)は、硬質土、礫石を含む。
 8. 1.0m以内の礫石は、硬質土、礫石を含む。
 9. 経塚(約7.5m角)は、硬質土、礫石を含む。
 10. 経塚(約7.5m角)は、硬質土、礫石を含む。
 11. 経塚(約7.5m角)は、硬質土、礫石を含む。
 12. 経塚(約7.5m角)は、硬質土、礫石を含む。
 13. 経塚(約7.5m角)は、硬質土、礫石を含む。
 14. 経塚(約7.5m角)は、硬質土、礫石を含む。
 15. 経塚(約7.5m角)は、硬質土、礫石を含む。経塚の中心部は硬質土である。
 16. 経塚(約7.5m角)は、硬質土、礫石を含む。
 17. 経塚(約7.5m角)は、硬質土、礫石を含む。
 18. 経塚(約7.5m角)は、硬質土、礫石を含む。



第98図 経塚付近地形図



第70区 經石美瀨圖



第71回 經石実測図





第72圖 經石実測図



第73圖 經石實測圖



第74圖 經石實測圖



第75図 經石実測図

- | | | |
|---|----------------------------------|-----------------------------------|
| 婦命本覺心法身 | (漢)阿字十万三世佛 | 般因經 |
| ⑦三十七尊住 \square 圓 | 弥字一切諸菩薩 | ⑩大 $\square\square\square$ |
| 普門應救 \square 三昧 | 陀字八萬諸聖經 | ⑩十方佛 |
| 圓難因果法然具 | 因 \square 圓 \square 經 | ⑩無自正是念 |
| 無 \square 因 \square 因 \square 因 \square | ⑫西峯道行 | 以我今衆生 |
| ⑩ \square 陀 \square 神 \square 王 | ⑬自得常智 | 待今無上是 |
| ⑩ \square 陀 \square 神 \square 王 | ⑭本山 \square 四 $\square\square$ | ⑩無 $\square\square\square\square$ |
| ⑩ \square 陀 \square 神 \square 王 | ⑮ \square 十六善神 | ⑭婆你嚕神王 |
| ⑩ \square 陀 \square 神 \square 王 | (漢)所寺 | ⑭俱鞞嚕神王 |
| ⑩ \square 陀 \square 神 \square 王 | 南無觀迦神 | ⑭眞陀嚕神王 |

※ \square 印は文字不明、または判読不能のもの、 \square 印内の文字は推測による該当文字。

c 埋經碑 (図版14)

本經塚の埋經碑は現在白髭神社の参道に他の石碑群と一緒に移転立されている。本埋經碑は頭前初記經塚の銀杏の根元に造立されていたと伝えられる。凡そ30年ほど前、碑は倒伏し旧所在地



第76図 石書體別実測図



第77図 經石書體別実測図

第 8 表 經石墨書文字一覽表

No.	文 字	No.	文 字	No.	文 字	No.	文 字
1	我	48	復	95	却	142	十
2	六	49	佛	96	不	143	子
3	坐	50	門	97	可	144	為
4	諦	51	緣	98	大	145	三
5	法	52	信	99	鬼	146	師
6	衰	53	等	100	小	147	第
7	三	54	覺 (覺)	101	盡	148	六
8	神	55	十	102	一	149	如
9	一	56	臣	103	陀	150	土
10	於	57	七	104	位	151	三
11	佛	58	百	105	無	152	一
12	二	59	記	106	儀	153	法
13	幻	60	佛	107	二	154	身
14	伺	61	蜜	108	常	155	亦
15	所	62	諸	109	化	156	一
16	種	63	一	110	生	157	善
17	得	64	上	111	待	158	量
18	為	65	離	112	王	159	僧
19	三	66	羅	113	波	160	是
20	化	67	三	114	不	161	三
21	相	68	亦	115	伽	162	十
22	薩	69	三	116	論	163	高
23	證	70	故	117	部	164	空
24	若	71	衍	118	行	165	大
25	風	72	非	119	生	166	空
26	無	73	勝	120	為	167	故
27	頂	74	復	121	星	168	不
28	保	75	來	122	蜜	169	位
29	華?	76	三	123	十	170	善
30	佛	77	大	124	至	171	待
31	神	78	菩	125	上	172	座
32	之	79	雲	126	問	173	土
33	以	80	木	127	第	174	三
34	虛	81	億	128	造	175	空
35	重	82	一	129	日	176	等?
36	比	83	貴	130	當	177	忍
37	若	84	相	131	子	178	復
38	無	85	此	132	生	179	識
39	王	86	三	133	法	180	利
40	義	87	以	134	百	181	生
41	不	88	讚	135	法	182	化
42	王	89	百	136	生	183	衆
43	化	90	行	137	過	184	於
44	虛	91	坐	138	千	185	十
45	法	92	空	139	姓	186	至
46	大	93	是	140	可	187	化
47	害	94	日	141	般	188	三

No	文	字	No	文	字	No	文	字	No	文	字
189	盡		238	而		287	信		336	欲	
190	一		239	土		288	土		337	羅	
191	言		240	故		289	故		338	重	
192	法		241	子		290	害		339	蓋	
193	王		242	人		291	十		340	祐	
194	十		243	月		292	天		341	一	
195	自		244	化		293	高		342	可	
196	入		245	無		294	夷		343	善	
197	比		246	切		295	一		344	大	
198	泊		247	僧		296	佛		345	一	
199	師		248	王		297	用		346	身	
200	虛		249	羅		298	散		347	一	
201	六		250	我		299	二		348	八	
202	變		251	耳		300	也		349	千	
203	量		252	神		301	空		350	而	
204	恒		253	一		302	白		351	是	
205	在		254	天		303	時		352	而	
206	丘		255	法		304	順		353	就	
207	難		256	佛		305	生		354	一	
208	大		257	百		306	薩		355	七	
209	及		258	意		307	是		356	位	
210	黑		259	行		308	正		357	非	
211	五		260	貧		309	善		358	儀	
212	住		261	道		310	子		359	國	
213	佛		262	為		311	二		360	是	
214	復		263	上		312	沒		361	五	
215	云		264	為		313	品		362	入	
216	不		265	九		314	地		363	知	
217	二		266	七		315	生		364	不	
218	是		267	為		316	看	？	365	波	
219	無		268	一		317	持		366	若	
220	二		269	行		318	破		367	死	
221	般		270	死		319	響		368	一	
222	尼		271	濱		320	告		369	日	
223	空		272	昧		321	法		370	是	
224	羅		273	雙		322	法		371	替	？
225	國		274	佛		323	何		372	佛	
226	金		275	世		324	尚		373	法	
227	亡		276	三		325	故	or 抄	374	未	
228	故		277	王		326	亦		375	一	
229	土		278	一		327	心		376	衣	
230	難		279	生		328	福		377	薩	
231	子		280	九		329	國		378	於	
232	日		281	王		330	但		379	王	
233	大		282	下		331	王		380	千	
234	天		283	化		332	切		381	先	
235	也		284	欲		333	本		382	土	
236	持		285	五		334	一		383	山	
237	中		286	開		335	王		384	說	

No	文 字	No	文 字	No	文 字	No	文 字
385	般	434	誦?	483	化	532	佛
386	是	435	一	484	空	533	佛
387	集?	436	明	485	百	534	忍
388	佛	437	生	486	六	535	大
389	位	438	十	487	十	536	王
390	故	439	四	488	大	537	重
391	一	440	書	489	說	538	三
392	三	441	十(千)	490	慧	539	德
393	不	442	上	491	入	540	說
394	二	443	經	492	福	541	王
395	一	444	可	493	果	542	得
396	所	445	下	494	名	543	壞
397	鬼	446	難	495	不	544	言
398	一	447	智	496	一	545	二
399	衆	448	際	497	王	546	種
400	者	449	故	498	即	547	時
401	生	450	王	499	陀	548	禮
402	一	451	所	500	法	549	明
403	行	452	時	501	生	550	如
404	信	453	為	502	一	551	行
405	經	454	切	503	行	552	行
406	制	455	羅	504	天	553	故
407	大	456	得	505	薩	554	覺
408	塚	457	一	506	須	555	神
409	七	458	佛	507	子	556	入
410	國	459	法	508	般	557	千
411	功	460	到	509	弘	558	入
412	切	461	說	510	精 <small>(精)</small>	559	考
413	慧	462	無	511	色	560	果
414	王	463	法	512	心	561	家
415	一	464	而	513	子	562	說
416	一	465	王	514	味	563	百
417	道	466	高	515	生	564	子
418	丘	467	像	516	蜜	565	班
419	書	468	乃	517	達	566	此
420	衆	469	世	518	十	567	所
421	千	470	子	519	國	568	字
422	波	471	佛	520	神	569	訖
423	說	472	土	521	薩	570	頂
424	子	473	而	522	十	571	星
425	子	474	得	523	性	572	法
426	子	475	一	524	子	573	如
427	生	476	大	525	修	574	佛
428	證	477	不	526	行	575	人
429	若	478	名	527	化	576	言
430	法	479	梵子	528	坐	577	一
431	當	480	才 梵子	529	忍	578	比
432	大	481	不	530	持	579	王
433	度	482	才 梵子	531	若	580	受

No	文 字	No	文 字	No	文 字	No	文 字
581	於	630	過(両)	679	受(両)	728	若(両)
582	人	631	忍(両)	680	𠄎梵字or(口?) <small>(井)</small>	729	佛(〃)
583	法	632	諦(両)	681	𠄎梵字(片)	730	都(〃)
584	行	633	坐(両)	682	道(片)	731	一(〃)
585	親	634	名(両)	683	煩(片)	732	三(〃)
586	奴	635	化(両)	684	𠄎梵字(片)	733	大(〃)
587	五	636	行(両)	685	𠄎梵字(片)	734	十(〃)
588	化	637	去(両)	686	不(片)	735	王(〃)
589	巧	638	不(両)	687	𠄎梵字(片)	736	根(〃)
590	中	639	佛(西)	688	𠄎梵字(片)	737	別(〃)
591	生	640	第(西)	689	𠄎梵字(片)	738	座(〃)
592	王	641	月(両)	690	受(両)	739	無(〃)
593	王	642	品(両)	691	當(〃)	740	何(〃)
594	三	643	中(両)	692	人(〃)	741	界(〃)
595	散	644	百(両)	693	夏(〃)	742	説(〃)
596	西	645	諦(両)	694	自(〃)	743	存(〃)
597	受	646	萬(両)	695	是(〃)	744	空(〃)
598	是	647	己(両)	696	不(〃)	745	義(〃)
599	門	648	三(両)	697	世(〃)	746	世(〃)
600	一	649	北(両)	698	二(〃)	747	三(〃)
601	他	650	所(両)	699	三(〃)	748	一(〃)
602	來	651	河(両)	700	得(〃)	749	在(〃)
603	説	652	滅	701	一(〃)	750	神(〃)
604	般	653	恒(両)	702	行(〃)	751	界(〃)
605	仁	654	味(両)	703	不(〃)	752	唯(〃)
606	初	655	經(両)	704	時(〃)	753	非(〃)
607	若	656	上(両)	705	受(〃)	754	功(〃)
608	尼	657	亦(両)	706	空(〃)	755	人(〃)
609	法	658	沙(両)	707	佛(〃)	756	大(〃)
610	人	659	住(両)	708	千(〃)	757	衆(〃)
611	波	660	生(両)	709	地(〃)	758	王(〃)
612	現?	661	復(両)	710	往(〃)	759	内(〃)
613	若	662	是(両)	711	見(〃)	760	句(〃)
614	及	663	諦(両)	712	中(〃)	761	方(〃)
615	形	664	佛(両)	713	中(〃)	762	國(〃)
616	波	665	我(両)	714	班(〃)	763	時(〃)
617	果	666	共(両)	715	亦(〃)	764	一(〃)
618	王	667	破(両)	716	亦(〃)	765	圓(〃)
619	部	668	羅(両)	717	放(〃)	766	入(〃)
620	土	669	長(両)	718	薩(〃)	767	也(〃)
621	即	670	身	719	大(〃)	768	求(〃)
622	王	671	王(両)	720	法(〃)	769	色(〃)
623	若	672	一(両)	721	王(〃)	770	土(〃)
624	飯 <small>(両面同字の誤書あり)</small>	673	是(両)	722	億(〃)	771	衆(〃)
625	集(両)	674	億(両)	723	波(〃)	772	本(〃)
626	百(両)	675	所(両)	724	者(〃)	773	義(〃)
627	大(両)	676	四(両)	725	王(〃)	774	斯(〃)
628	讀(両)	677	太(両)	726	住(〃)	775	欲(〃)
629	諦(両)	678	大(両)	727	心(〃)	776	記(〃)

No	文 字	No	文 字	No	文 字	No	文 字
777	何(兩)	826	韻(兩)	875	伽(兩)	924	過
778	七(ノ)	827	二(ノ)	876	從(ノ)	925	地
779	於(ノ)	828	理(ノ)	877	癡(ノ)	926	衆
780	一(ノ)	829	入(ノ)	878	欲(ノ)	927	味
781	惡(ノ)	830	皆(ノ)	879	丘(ノ)	928	由
782	如(ノ)	831	佛(ノ)	880		929	
783	生(ノ)	832	十(ノ)	881		930	土
784	心(ノ)	833	亦(ノ)	882		931	二
785	者(ノ)	834	上(ノ)	883		932	般
786	大(ノ)	835	行(ノ)	884		933	百
787	善(ノ)	836	法(ノ)	885		934	說
788	得(ノ)	837	各(ノ)	886	九	935	不
789	者(ノ)	838	衆(ノ)	887		936	北
790	得(ノ)	839	習(ノ)	888	習	937	空
791	共(ノ)	840	明(ノ)	889		938	億
792	解(ノ)	841	三(ノ)	890	無	939	
793	行(ノ)	842	忍(ノ)	891	謬	940	萬
794	持(ノ)	843	二(ノ)	892	一	941	陀?
795	心(ノ)	844	心(ノ)	893	四	942	佛
796	謬(ノ)	845	百(ノ)	894	界	943	
797	波(ノ)	846	一(ノ)	895	明	944	然
798	百(ノ)	847	弟(ノ)	896	度	945	
799	是(ノ)	848	衆(ノ)	897	用	946	善
800	二(ノ)	849	時(ノ)	898	王	947	王
801	至(ノ)	850	用(ノ)	899		948	国
802	日(ノ)	851	法(ノ)	900	三	949	中
803	業(ノ)	852	亦(ノ)	901	為	950	心
804	道(ノ)	853	亦(ノ)	902		951	呆
805	銅(ノ)	854	散(ノ)	903	改	952	持
806	一(ノ)	855	四(ノ)	904		953	王
807	日(ノ)	856	禁(ノ)	905	法	954	非
808	惡(ノ)	857	法(ノ)	906	王	955	為
809	常(ノ)	858	三(ノ)	907	謬	956	第
810	囚(ノ)	859	土(ノ)	908	日	957	
811	衆(ノ)	860	北(ノ)	909	一	958	常
812	三(ノ)	861	而(ノ)	910	得	959	東
813	吼(ノ)	862	告(ノ)	911	復?	960	羅
814	衛(ノ)	863	假(ノ)	912	燒	961	中
815	中(ノ)	864	心(ノ)	913	頂	962	王
816	一(ノ)	865	衆(ノ)	914	煩	963	天
817	王(ノ)	866	頂(ノ)	915	諸	964	盡
818	王(ノ)	867	幼(ノ)	916	說	965	三?
819	道(ノ)	868	化(ノ)	917	修	966	若
820	照(ノ)	869	為(ノ)	918	足	967	
821	切(ノ)	870	十(ノ)	919	欲	968	般
822	牛(ノ)	871	立(ノ)	920	盡	969	聰
823	三(ノ)	872	欲(ノ)	921	空	970	伏
824	舌(ノ)	873	常(ノ)	922		971	經
825	地(ノ)	874	也(ノ)	923	華?	972	而

No	文 字	No	文 字	No	文 字	No	文 字
973	修	1022	信	1071	果	1120	說
974	灌	1023	用	1072	即	1121	生
975	師	1024	初	1073	中	1122	二
976	三	1025		1074	說	1123	善
977	無	1026	攝?	1075	薩	1124	所
978		1027	萬	1076	無	1125	自
979	見	1028	講?	1077		1126	亦
980	用	1029	衆	1078	相	1127	十
981		1030	不	1079	法	1128	盡
982	月	1031		1080	行	1129	
983	就	1032		1081	光	1130	善
984	王	1033	相	1082		1131	
985	宝	1034	即	1083	十	1132	
986	漢	1035	不	1084		1133	聖
987		1036	未	1085		1134	王
988	何	1037	通	1086	為	1135	此
989	諸	1038	有	1087		1136	大
990	王	1039	離	1088	得	1137	
991	王	1040	時	1089	緣	1138	佛
992	壹	1041	量	1090	子	1139	若
993	足	1042		1091	法	1140	念
994	慧	1043	一	1092	本	1141	中
995	故	1044	無	1093	故	1142	國
996	忍	1045		1094	國	1143	祇
997	百	1046	羅	1095	部	1144	無
998	王	1047		1096	師	1145	已
999	無	1048	染	1097	恒	1146	不
1000	義	1049	是?	1098	禪	1147	神
1001	現	1050	不	1099	解	1148	故
1002	品	1051	密	1100	下	1149	諦
1003	行	1052		1101	百	1150	
1004		1053	金	1102	入	1151	彼
1005	剛	1054	勸	1103		1152	相
1006		1055	地	1104	生	1153	逆
1007	一	1056	百	1105	己	1154	經
1008	住	1057	流	1106	行	1155	脩
1009	匿	1058	心	1107	衆	1156	
1010	在	1059	智	1108		1157	倒
1011		1060	相	1109	百	1158	
1012	得	1061	中	1110	完	1159	思
1013	法	1062		1111	可	1160	難
1014	若	1063	時	1112	入	1161	行
1015	別	1064	二	1113	三	1162	心
1016	國	1065	大	1114	衆	1163	有
1017		1066	得	1115		1164	
1018	三	1067	王	1116	薩	1165	共
1019	仁	1068	若	1117	生	1166	求
1020	億	1069	悲	1118	量	1167	百
1021	法	1070	百	1119	法	1168	說

No	文	字	No	文	字	No	文	字	No	文	字
1169	百		1218	荒		1267	無		1316	鼠	
1170	切?		1219	行		1268			1317	三	
1171	昔		1220			1269			1318	善	室
1172	蜜		1221	鬼		1270	盡		1319	為?	
1173	子?		1222	相		1271	雨		1320		
1174	諸		1223	薩		1272	不		1321	界	
1175			1224	星		1273			1322	說	
1176	日		1225			1274			1323	百	
1177	散		1226	三		1275	句		1324	汝	
1178			1227	制		1276	事		1325	國	
1179	無		1228			1277	我		1326	水	
1180	地		1229	未		1278			1327	子	
1181			1230	地		1279			1328	何	
1182	燒		1231	觀		1280	得		1329		
1183	百		1232	故?		1281	文		1330		
1184			1233	善		1282	生		1331	無	
1185	德		1234			1283	如?		1332	上	
1186	改		1235	立		1284	乃		1333	祇	
1187	僧		1236	特		1285	星		1334	羅	
1188	爾		1237	修		1286	衆		1335		
1189			1238			1287			1336	心	
1190			1239	佛		1288	壽?		1337		
1191	般		1240	大		1289	無		1338	誦	
1192	長		1241	四		1290			1339	讀	
1193	念		1242			1291	法		1340	各?	
1194	義		1243			1292	王		1341		
1195	覺		1244			1293	於		1342	男	
1196			1245	應		1294			1343		
1197	三		1246			1295	劫		1344		
1198			1247	吾		1296	月		1345		
1199	罪		1248			1297	輪		1346	二	
1200	受		1249	常		1298	王		1347		
1201	億		1250	得		1299			1348		
1202	說		1251			1300	時?		1349		
1203	寶	王	1252	汝?		1301	故?		1350	行	
1204	雲		1253	國		1302	切		1351		
1205	流		1254	何		1303	來		1352	常	
1206	能		1255	劫		1304	亦		1353	文	
1207	果?		1256	突		1305	度		1354	語	
1208	王		1257	滅		1306	此		1355		
1209	若		1258	百		1307	百		1356	國	
1210	所		1259	般		1308	觀		1357	佛	
1211	星		1260	天		1309	無		1358	死?	
1212	十		1261	法		1310	蜜		1359	百	
1213	國		1262	王		1311	返		1360	婆?	
1214	觀		1263			1312	時		1361		
1215	登		1264	提		1313	化		1362	家	
1216	各		1265	佛		1314	三		1363		
1217	人		1266	爾		1315	有		1364		

No	文 字	No	文 字	No	文 字	No	文 字
1365	萬	1414	品	1463	脫	1512	讓
1366	雙	1415	衆	1464	法？	1513	千
1367		1416	間	1465	尼	1514	切
1368	講	1417	薩	1466	行	1515	第
1369	薩	1418	王	1467	滅	1516	若
1370		1419	共	1468	王	1517	存
1371	法	1420	入	1469	性	1518	億
1372	倒	1421		1470	行	1519	得
1373	佛	1422	忍	1471	難	1520	三
1374	諸	1423	七	1472	生	1521	百
1375	如？	1424	星	1473	善	1522	釋
1376	中	1425	或	1474	法	1523	法
1377		1426	先	1475	全	1524	初
1378	祇	1427	是	1476		1525	毛
1379	各	1428		1477	六	1526	
1380	若	1429	道	1478		1527	
1381	或	1430		1479	風	1528	無
1382	一	1431	就	1480	現	1529	却
1383	法	1432	於	1481	有	1530	火
1384		1433	男	1482	土	1531	於
1385	諸	1434		1483		1532	蜜
1386		1435	見	1484	從	1533	
1387	石	1436	一	1485	善	1534	德
1388		1437	切	1486	量	1535	切
1389	中	1438	去	1487	滅	1536	而
1390	王	1439	求	1488	若	1537	法
1391	斯	1440		1489		1538	知
1392	恒	1441		1490		1539	吾
1393	第	1442		1491		1540	燒
1394	滅	1443		1492	十	1541	講
1395		1444		1493		1542	於
1396	蜜	1445	座	1494	各	1543	力
1397	般	1446	離	1495	化	1544	無
1398	是	1447	雙	1496	時	1545	付
1399	見	1448		1497	化？	1546	奴
1400	大	1449	阿？	1498	登	1547	婆
1401	羅	1450	薩	1499	共	1548	會
1402	百	1451	刀	1500	得？	1549	劫
1403	作	1452	樹 欄	1501	千	1550	經
1404	月	1453	說	1502		1551	
1405	若	1454	泳	1503	實	1552	果？
1406	各	1455	各	1504	羅	1553	無
1407	性	1456	卷	1505		1554	二
1408	光	1457	五	1506	不	1555	王
1409	三	1458	講	1507	論	1556	
1410	首	1459		1508	月	1557	王
1411	菩	1460		1509	國	1558	吞
1412	逆	1461	過	1510	以	1559	應
1413		1462		1511	百	1560	河

No	文 字	No	文 字	No	文 字	No	文 字
1561	二	1610	法	1659		1708	逆
1562	主	1611	無？	1660	知	1709	善
1563	復	1612		1661	一	1710	假
1564	華	1613	與	1662	能	1711	我
1565	作？	1614	聞？	1663	不	1712	
1566		1615	業	1664	無	1713	佛
1567	其	1616	議	1665	為	1714	敷
1568	是	1617	宿	1666	分	1715	切
1569	受	1618	化？	1667	複	1716	道
1570	法	1619	行	1668		1717	座
1571	初	1620	人	1669	上	1718	脩
1572	變	1621	替？	1670	戎	1719	比
1573	少	1622	讚	1671	受	1720	脩
1574	光	1623	國	1672	時	1721	相
1575	尼	1624	初？	1673		1722	
1576	姓	1625	偽	1674	宿	1723	相
1577		1626	灰	1675	五	1724	為
1578	量	1627	子	1676	百	1725	扶
1579	為	1628	波？	1677		1726	百
1580	次	1629	聖	1678	正 五	1727	
1581	行	1630	始	1679		1728	真
1582		1631		1680	五	1729	丘
1583	蜜	1632	心	1681	禪	1730	王？
1584	難	1633	成	1682	住	1731	臺
1585		1634	故	1683	劫	1732	若
1586	定	1635	處	1684	見	1733	量
1587	生	1636	乃	1685	炎	1734	是
1588	薩	1637	不	1686		1735	地
1589		1638	入	1687	鐵	1736	日
1590	諸	1639	觀	1688	善	1737	三
1591	住？	1640		1689	此	1738	汝
1592	住	1641	故	1690	百	1739	法
1593	若	1642	比	1691	行	1740	衆 漢
1594	定	1643	大	1692	覺	1741	般
1595		1644		1693	者	1742	各
1596	正	1645		1694	而	1743	
1597	外	1646	常	1695		1744	弟
1598	般	1647	存	1696		1745	作
1599	滅	1648		1697	無	1746	處？
1600	十	1649	天	1698		1747	國
1601	誦	1650	億	1699	緣	1748	
1602	波	1651	化	1700	護	1749	福
1603	法	1652	時	1701		1750	即
1604	習	1653	諸	1702	河	1751	任
1605		1654		1703	上	1752	星
1606	天	1655	不	1704	脩	1753	
1607	自	1656	得	1705	我	1754	若
1608	若	1657	波	1706	名	1755	知
1609	智	1658	體	1707	會	1756	

№	文 字	№	文 字	№	文 字	№	文 字
1757	無	1806	國	1855	大	1904	道
1758	法	1807	諸	1856	會	1905	眠？
1759	檢	1808	經	1857	為	1906	
1760	百	1809	明	1858	衆	1907	量
1761	雙	1810		1859	斯	1908	𠄎 (梵字)
1762	無	1811	衆	1860	諸	1909	無
1763	條	1812	明	1861	出、𠄎 (梵字)	1910	何
1764	上	1813	憂	1862	能	1911	而
1765	以	1814	國	1863	生	1912	法
1766	王	1815	華	1864	出	1913	國
1767	華	1816	十	1865	萬	1914	
1768		1817	者？	1866	十	1915	三
1769		1818	合	1867	諸	1916	權？
1770		1819	大	1868	次	1917	
1771	天	1820		1869	應	1918	為
1772	汝	1821	薩	1870	時	1919	住
1773	誦	1822	存	1871	國	1920	
1774	請	1823	王	1872	昧	1921	三
1775	足	1824	頭	1873	王	1922	經
1776	諸	1825		1874	𠄎 (梵字)	1923	𠄎 (梵字)
1777	講	1826	行	1875	各	1924	箭 (修)
1778		1827	復	1876	自	1925	法
1779	但	1828		1877	蜜	1926	十
1780		1829		1878	善	1927	善
1781	堅	1830	宝	1879	昧	1928	名
1782	地	1831	四	1880	百	1929	癡
1783	道	1832	無	1881	心	1930	佛
1784	比	1833	次	1882	二	1931	力
1785	等	1834	師	1883		1932	世
1786	眼	1835	阿	1884	塵	1933	
1787	百	1836		1885	灌	1934	欲
1788	灰	1837	難	1886	比	1935	善
1789	還	1838	切	1887	王	1936	無？
1790	亦	1839	空	1888	成	1937	
1791	邊	1840	傳	1889	大	1938	光
1792	覺	1841		1890	亂	1939	不
1793	國	1842	千	1891	來	1940	說？
1794	衆	1843	人	1892	王	1941	逆
1795		1844	道	1893	那	1942	行
1796	蜜	1845		1894	經	1943	國
1797	諸	1846	王	1895	舍	1944	家
1798	行	1847	內	1896	時	1945	伏
1799	大	1848	諸	1897	天	1946	佛
1800	億	1849	大	1898	諸	1947	佛
1801	誤	1850	波	1899	王	1948	轉
1802	復	1851	百	1900	子	1949	𠄎 (梵字)
1803	說	1852	假	1901	若	1950	雲
1804	法	1853	亦 次	1902	持	1951	𠄎 (梵字)
1805	國	1854	生 王	1903	國	1952	

No	文 字	No	文 字	No	文 文	No	文 字
1953	𠄎 (梵字)	2002	者	2051	佛	2100	諸
1954	間	2003	國	2052	間?	2101	以
1955		2004	吼	2053	請?	2102	常
1956	道	2005	滅	2054	說	2103	乃
1957	國	2006		2055	名	2104	便
1958	空 未	2007	滅	2056	皆	2105	講
1959	凡?	2008	天	2057	白	2106	十
1960	億	2009	道	2058	諸	2107	允
1961	三	2010	及	2059	色?	2108	去
1962	光	2011	白	2060	六	2109	王
1963	我	2012		2061	國	2110	兩
1964	性	2013	住	2062	囉	2111	為?
1965	假 (仮)	2014	三	2063	明	2112	化
1966	波	2015	及	2064	時	2113	下
1967	二、刀?	2016	受	2065	燃	2114	十
1968	王? 子	2017	是	2066	具?	2115	
1969	行	2018	滅	2067	登?	2116	子?
1970		2019	慧	2068	轉?	2117	河
1971	者	2020	般	2069	者	2118	萬
1972	蠶	2021	響	2070	人	2119	國
1973	說	2022	一	2071	依	2120	德
1974	滅	2023	名	2072	頂	2121	華
1975	界?	2024		2073	化	2122	他
1976	為	2025	化	2074	未	2123	欲
1977	三	2026	祇	2075	中	2124	亦
1978	切	2027	臣	2076	羅	2125	百
1979		2028		2077	囚 國	2126	提?
1980	波	2029		2078	五	2127	為
1981	出	2030	羣 (群)	2079	天	2128	兩
1982	百	2031	億	2080	住?	2129	自
1983	行	2032		2081	滅	2130	空?
1984	然	2033	無	2082	王	2131	生
1985	得	2034	世	2083	間	2132	一
1986	智	2035	一	2084	就	2133	何
1987		2036	尊	2085	江	2134	喜
1988	五	2037	行	2086	字	2135	
1989	等	2038	世	2087	千	2136	怪
1990		2039	切	2088	使	2137	行
1991	合	2040	子	2089	復	2138	若
1992	人	2041	生	2090	士	2139	生
1993	頂	2042	一	2091	散	2140	中
1994	護	2043	華	2092	作	2141	忍
1995	四	2044	與	2093	少	2142	七?
1996	上	2045	般	2094	百	2143	所
1997		2046	時	2095	方	2144	王?
1998	器 (器)	2047	法	2096	各	2145	
1999	終	2048		2097		2146	意
2000		2049	死	2098	法	2147	王
2001	薩	2050	安	2099	羅	2148	百

No	文 字	No	文 字	No	文 字	No	文 字
2149	空	2198	薩	2247	臣	2296	於？
2150	相？	2199	五	2248	若	2297	之
2151	時	2200	方	2249	不	2298	如？
2152	塚	2201	百	2250		2299	
2153	王	2202	無	2251	門	2300	果
2154	國	2203	十	2252	如	2301	登
2155	法	2204	飯	2253	神、待？	2302	是
2156	無？	2205	入	2254	百	2303	十
2157	觀	2206	答？	2255	行	2304	波？
2158	汝	2207	不	2256	習	2305	俱
2159	用	2208	如、方？	2257	化	2306	蜜
2160	𠄎 (梵字)	2209	常、行	2258	入	2307	彌
2161	佛	2210	一	2259	行	2308	願
2162		2211	功	2260	尼	2309	
2163	若	2212	無	2261	彌	2310	
2164	王	2213	西	2262	釐	2311	此
2165	六	2214	己	2263		2312	(𠄎 (梵字)
2166	耶	2215		2264		2313	比？
2167	世	2216	日	2265	一	2314	
2168		2217	大	2266	婆	2315	
2169	時	2218	忍	2267	奴、如	2316	
2170	恒？	2219	受、寶	2268	上	2317	生
2171		2220	者	2269	來	2318	一
2172		2221	一	2270	河	2319	百
2173	化	2222	庶	2271	王	2320	牟
2174	中	2223	百	2272	達	2321	王
2175	禪	2224	惱	2273	三	2322	部
2176	化	2225	未	2274	是	2323	賢
2177	說	2226	此	2275	虛	2324	名
2178	師	2227	五	2276	薩	2325	生
2179	諸	2228	是	2277	化	2326	
2180	目	2229	受	2278	聰？	2327	金
2181	甘 (身, 耳)？	2230	羅	2279	意	2328	住
2182	善？	2231	神	2280	如 (丸)	2329	
2183	退	2232	諸	2281	王	2330	二
2184	書	2233	薩	2282	說	2331	菩
2185	大	2234	蜜	2283	何？	2332	羅
2186	八	2235	空	2284	王	2333	生
2187		2236	地	2285	忍	2334	生
2188	德	2237	花？	2286	三	2335	經
2189	不？	2238		2287	地	2336	
2190	十	2239	國	2288	說	2337	處
2191	集 (樂)	2240	上？	2289		2338	師
2192	界	2241		2290	菩	2339	十
2193	王	2242	國	2291	若	2340	道
2194	入	2243	六	2292	諦	2341	生
2195	力	2244	頂	2293	國	2342	瓦
2196	仁	2245	剛？	2294	師	2343	迦
2197	衣	2246	無	2295	念	2344	子

No	文 字	No	文 字	No	文 字	No	文 字
2345	摩	2390	方	2435	王	2480	七
2346	在	2391	一? 日	2436	菩	2481	匂 (梵字)
2347	界	2392	若	2437	不	2482	乏 (梵字)
2348	空	2393	方	2438	心	2483	自
2349	般	2394		2439	學	2484	量
2350	四	2395	何	2440	亦	2485	能
2351	人	2396	行	2441	千	2486	他
2352	衆	2397	界	2442	中	2487	萬
2353	雜	2398	一	2443	性	2488	王
2354	諸 波	2399	百	2444	蓋	2489	不
2355	土	2400	為	2445	刀	2490	人
2356		2401	入?	2446	所	2491	國
2357	如	2402	是	2447	世	2492	思?
2358	薩	2403	管	2448	天	2493	可
2359		2404	故	2449	切?	2494	即
2360	為	2405	十	2450	文	2495	等
2361	立	2406	諦	2451	未	2496	無?
2362	切	2407	在	2452	剛	2497	定
2363		2408	得	2453	再	2498	佛
2364	慧	2409	門	2454	等	2499	寶
2365	菩	2410	長	2455	七	2500	劫
2366	形	2411	切	2456	因	2501	意
2367	欲	2412	法	2457	忍	2502	所
2368	日	2413	六	2458	四	2503	入
2369	音	2414	退	2459	等	2504	河
2370	生	2415	子	2460	諸	2505	前
2371		2416	蜜	2461	無	2506	以
2372		2417	子	2462	羅	2507	自
2373	功	2418	三	2463	盡	2508	羅
2374	名	2419	阿	2464	罪	2509	不
2375		2420	百	2465	切	2510	王
2376		2421	神	2466	尼	2511	薩
2377		2422	請	2467	一	2512	十
2378	作	2423	提	2468	三	2513	中
2379	一	2424	波	2469	阿	2514	仁
2380	法	2425		2470	登	2515	衆
2381		2426	王	2471	百	2516	無
2382	比	2427	無	2472	班	2517	化
2383	行	2428	慧	2473	主	2518	劫
2384	波	2429	牟	2474	鬼?	2519	善
2385	上	2430	讀	2475	侵	2520	慧
2386	福	2431	王	2476	中	2521	土
2387	行	2432	功	2477	常	2522	國
2388	行	2433	思	2478	又 (梵字)		
2389	國	2434	法	2479	代 (梵字)		

※欠字は読解不能のもの

第9表 経石墨書文字別一覽表

1	一																						
2	二	七	八	九	十	刀	入	人	力	乃													
3	三	千	之	大	上	土	子	小	及	亡	也	下	山	己	凡	士							
4	幻	化	王	木	日	曰	不	云	天	中	月	切	心	仁	太	内	方	牛	五	文	六	毛	
5	以	比	可	生	丘	尼	世	用	白	正	本	未	功	奴	巧	他	去	北	句	囚	四	由	
6	出	右	目	弘	幼	立	石	付	主	外	令	瓦	衣	先	名	色	字	西	存	舌	各	百	
7	此	行	至	如	亦	自	在	而	耳	死	地	汝	灰	注	名	色	字	西	存	舌	各	百	
8	伏	有	光	成	合	安	因	夷	向	全	次	任	没	告	何	但	考	初	形	沙	見	別	求
9	我	坐	臣	却	位	身	忍	利	言	住	没	告	何	但	考	初	形	沙	見	別	求		
10	伽	改	足	完	劫	男	作	吾	吞	扶	決	具	佛	弟									
11	返	花	法	於	所	門	行	非	來	空	佗	波	泊	金	往	味	知	者	制	明	到	果	
12	性	受	河	長	放	東	宝	念	抵	彼	兩	事	城	阿	泳	其	姓	定	炎	舍	邪	依	
13	使	怪	供	卷																			
14	若	度	突	味	伽	神	相	風	急	保	重	信	故	是	待	星	恆	持	品	祐	即	班	
15	界	思	荒	室	首	耶	便	俱	音	前	侵												
16	皆	逆	棚	退	害	記	鬼	般	師	高	時	破	書	修	迄	夏	根	座	剛	匿	流	倒	
17	能	特	真																				
18	脩	造	家	通	得	頂	虛	善	常	部	問	第	黒	國	貧	欲	現	唯	悪	理	習	假	
19	從	勸	脫	婆	宿	處	眼	終	惱	捨	都	傳											
20	為	無	復	等	勝	雲	貴	量	衆	開	散	願	善	就	智	須	飯	萬	斯	燒	然	壺	
21	悲	登	提	河	堅	尊	問	喜	答	跋	塚	集											
22	會	過	道	達	當	僧	意	福	蓋	滅	煩	義	圓	解	業	照	禁	楽	聖	罪	漢		
23	羣	經	與																				
24	銅	漢	蜜	説	際	精	徳	臺	爾	經	壽	通	謂	語	間	敷	應	歸	聡	管	像		
25	靈	億	縁	盡	論	變	慧	輪	實	俄	訖	器	摩	請	諸	儀							
26	壞	禪	諦	親	訟	樹	憂	頭	燃	賢	餘	學	應	術	還								
27	禮	聴	講	難	檢	轉	彌																
28	薩	離	雙	離																			
29	難	證	觀	寶	癡	願																	
30	羅	讓	釋	覺	響	願																	
31	護	攝																					
32	灌	讀																					
33	權																						
34	觀																						

注 アラビア数字は字の画数を表わす

第10表 多字石計測一覧表

No	ラベルNo	長 径 (cm)	短 径 (cm)	厚 さ (cm)	重 さ (g)	形 状
1	3001	12.65	3.90	2.50	202.5	扁平、棒状
2	3002	12.10	7.65	2.50	34.20	扁平
3	3003	12.10	7.40	2.80	288.0	〃
4	3004	10.70	6.65	1.50	164.0	〃
5	3005	11.95	8.20	1.45	250.50	〃
6	3006	26.00	5.15	4.60	635.0	四角柱状
7	3007	15.25	6.10	3.30	508.0	扁平
8	3008	12.90	4.50	3.20	253.0	三角柱状
9	3009	11.30	4.20	2.25	131.0	扁平
10	3010	10.55	5.60	2.45	251.0	〃
11	3011	9.90	4.05	2.10	127.0	〃
12	3012	14.50	6.70	1.70	382.0	〃
13	3013	13.35	3.50	2.30	168.0	棒状
14	3014	11.25	3.10	1.95	149.5	扁平、棒状
15	3015	10.10	4.65	2.80	225.0	棒状
16	3016	11.00	5.60	1.80	213.5	扁平
17	3017	14.55	4.50	4.10	426.5	棒状
18	3018	8.10	4.90	3.60	227.0	卵形
19	3019	10.20	5.55	1.80	226.0	扁平
20	3020	17.90	4.05	3.95	502.0	角柱状
21	3021	9.85	6.20	1.60	186.5	扁平
22	3022	9.50	3.30	2.40	117.0	棒状
23	3023	11.00	4.05	1.15	119.5	三角柱状
24	3024	11.70	6.50	2.18	233.0	棒状
25	3025	10.50	6.05	1.70	208.5	扁平
26	3026	8.80	6.15	2.40	182.0	〃

から3mほどずり落ちていた。これを鬼柳町の佐藤忠二、佐藤丑藏両氏によって旧所在地に復した。しかし東北新幹線の路線ルート内にあるため昭和50年10月12日現在地に移転した。埋経碑は自然石で現在はコンクリートの台座に建立されている。したがって碑石の下端は若干埋め込まれているものと思われる。台座上の寸法は高さ90cm、厚さ36cm、下部の巾55cm、中央部の巾50cm、上部の巾48cmで頂上部がやや先細りの感をうける。碑面は自然面であるが割合平坦である。碑文は表面だけに記され下記のごとくである。

寛延二年 願主
 梵字 仁王經 一字 塔
 一石
 八月二十一日 亮正 (原文は年号が右、月日は左の縦書)

梵字は刷毛書きで梵字4字を合成して1字としたもので「チクマン」である。本地佛は般若菩薩

礎と云われる。また文字は陰刻で深業研彫りである。業研彫りの様式は鎌倉期から見えるが江戸時代に至ると浅業研から深業研に変わり本県内のもは一般に浅業研が特色とされる。

(F) 考察とまとめ

鬼柳西裏経塚について、現況、遺構、出土遺物、経碑等々について記した。ここではこれらの事実をふまえて経塚の起源と目的、本経塚造営のねらい、造営時期、造営の背景などに視点をおき考察を加えたい。

a 経塚の起源と目的

経塚はいうまでもなく書写した仏教經典を主代として地中に壤を掘り埋納した遺跡のことである。ふつうは經典埋納後、封土で覆うものであるが中にはその上に経碑を造立することもある。

経塚の起源については諸説があり明らかとなっていないが、一般には「平安時代中期に当って天台宗と関係をもって創ったもの」⁽¹⁹⁾または「平安時代中期に慈覚大師(円仁)が唐から伝えた」⁽²⁰⁾などがありいずれも平安時代中期を経塚造営の起源としてとらえている。経塚の造営は平安時代から江戸時代にかけて盛んに行われているが全国的にみると平安時代後期に最盛期を迎えている。一方造営の目的は未法思想とのかかわりから仏法滅書をおそれて始ったと考えられ後世の弥勒再生を期して經典の保存をはかろうとしたのが初期の目的であった。しかし時代の下降に伴い、そのねらいが薄れ極楽往生、自他の現世利益、追善供養、逆修供養の面のみが強調され本来的な仏法護持から自己本位に変わり功德業視されるに至った。

次に經典の写経についてはそれぞれ紙に書写されるのが一般的であり、近世前の経塚出土の經典もその程んどが紙本経である。しかし土中への埋納という特殊性から材質に差異がみられその種類には、瓦経、銅板経、滑石経、貝殻経、礫石経等多岐に及ぶ。平安時代に吉野の金峯山山頂に営まれた経塚造営は時代とともに本来の思想からかけはなれたものであり特に礫石経に至ると經典の一字一字が個々の石に書写されるに及び經典を弥勒再生の世まで残すという考えから離反し、写経と埋納の形式のみが踏習されたと云える。

b 一字一石経塚

一字一石経塚の初見は長寛3年(1165)新潟県南魚沼郡六日町余川⁽²¹⁾のものを嚆矢とし、碑石を伴ったものは永永2年(1265)愛媛県伊予市宮下⁽²²⁾のものが古い。東北地方では弘安6年(1283)宮城県宮城郡利府町道安寺出土⁽²³⁾のものが記年銘のあるものとして最古である。以上から一字一石経塚はほぼ12世紀の中葉に、つまり平安時代末頃から営まれたと云える。また東北地方と中央との差がほとんどなく同時期に全国的な流布をみたと言っても過言でない。

岩手県内では宮古市和見に所在する五部大経(華嚴経、大集経、大品般若経、法華経、涅槃経)の経碑が遺存し記年銘は永和2年(1376)で最とも古い。したがって県内でも一字一石経塚は南北朝時代に既に造営されていたことになる。このような一字一石経塚の発掘調査例は全国的にも少なく県内では数例にとどまる。その中で正式な調査は昭和48年県教委で行った南館遺跡⁽²⁴⁾がある。南館経塚は本例と異なりマウンドを葺石状に覆ったもので特異な形態をもつ。本経塚は江戸時代の一般的な形式である土壌を窄ち写経石を埋納し封土で覆ったものである。地理的に近接しているが形式面に相異がみられる。なお第11表は過去の調査例をもとに作成した岩手県内の経塚遺

跡一らんである。

e 経塚の遺立時期

時期決定の資料として遺存するものに下記のものがある。

①埋経碑 ②一字一石経 ③多字石 ④銀杏の切株 ⑤石敷遺構と小皿、の5点である。調査時点において、④の年代観について昭和50年7月10日付「岩手日報」は「佐藤忠二さんが年輪を数えたところ推定樹令600年だったと話しているが……。」と述べ、この年代をもって経塚造営を約600年前としさらに同紙は「……この石（多字石③「為金剛儀現 菩提」）が時宗の開祖で全国を行脚して念仏踊りを民衆にすすめ遊行上人捨聖と称した僧一遍が約600年前奥州を訪れた時に残したのでは、という推測もあり……。」また一遍聖人については「北上市史」第2巻に「一遍が弘安3年（1280）の遊行のとき、信州善光寺から白川関を経て奥州江刺郡へ来て祖父通信の墳墓をたずね……。」とあり約700年前になる。したがって本経塚の造営と銀杏がセットをなすものであれば今を去る約700年前の鎌倉時代の造営となり、県内最古の宮古市和見のものより約100年前の造営になるといえる。そこで埋経土壌を覆う銀杏の樹令600年説をめくり、樹令の推計を行った。調査時点では切株の中心部分は空洞化しさらに北側半分は既に巧み果てていた。したがって残存する南側半分の年輪間隔を精査した結果、平均値を6mmと測定した。直径1.5mをもって算出すると約250年の数値となる。これについて東北林業試験場の村井三郎先生から次のような教示をえた。「銀杏樹は古木で樹令600年以上に達するものがまあまりその頃は直径5m内外の大樹となるのが普通とされる。銀杏は他の樹木に比べ成長速度の早いもので年間成長は年輪で平均6mm前後が妥当とされる。ただ数百年を経たものは年輪間隔が4mm前後におちる。したがって直径1.5m内外のものは200～300年前後とみて間違いない」ということから経塚上の銀杏は樹令約250年前後をみてほぼ間違いないものである。

第2に埋経碑と一字一石経が同一時期に埋納造立がなされたかどうかについてである。埋経碑は年号を寛延2年と記しているが埋納経石には年号書写のものが発見されていない。しかし多字石③の中に「奉供養仁王経、願主天台沙門亮昌」の墨書が認められる。これに対応するのが埋経碑の願主「亮正」である。「昌」「正」の一字の相異が同一人物であるか否かに疑問が持たれたが、これについては「音仮借」^[26]といい読みが同じであれば同一人物とみなしてまちがないという司東真雄氏の教示を得た。したがって本経塚と経碑は本来セットで造立されたことが明白となった。

第3は⑤とのかかわりである。経塚土壌の底部はシルト質土に達しているが、このシルト質の下15～20cmの層内に石敷遺構が存在してこの遺構に伴って「伊万里焼」の小皿1枚が出土している。小皿は17世紀中葉の製作になるものという鑑定結果を得ている。つまり石敷遺構の上に乗る経塚土壌は17世紀中葉以降の造営にならなければならない。

第4は経塚と銀杏の関係について、遠野市小友町山谷観音堂経塚の例を引用する。元禄十三年（1700）別当、高橋弥左エ門の手記によれば「御堂西方さわら木往古より白山と申来候処、去年御堂建立に付、役所地形引広げ掃除仕候へば、今年元禄13庚辰年三月見出候は、右さわらの木根は一字一石之御経塚に御座候、数万の小石に文字一つ宛御座候、後人為心得如此に候。右さわらの木ふとさ地際にて一丈五尺廻りにて其木根之内一石一字の小石共御座候。御経塚の印に植置申

と相見得申候」とある。既にこのころ経塚造営に伴ない記念樹的な植樹を行う慣習例のあったことが伺える。以上遺存資料5点をもとに考察してきたが、本経塚の造営年代は寛延2年ととらえて妥当であり、鎌倉時代まで上げることは他の関連資料からみても無理があり、また一遍聖人とかかわりも当然考えられない。最後の引用文にみられるごとく本経塚の場合も寛延2年の経塚造営にあたり経塚の目印、または造営記念として銀杏を植樹したものであろう。その銀杏が200有余年の年月の中で埋経土壌を覆ったものと推測される。

d 造立の目的

本経塚造営の目的については多字石④がそれを示唆している。墨書は「為金剛儀現 菩提」で金剛儀現は僧名であり「金剛儀現」という僧侶の菩提を弔う為に本経塚を造営したことになる。次に金剛儀現と称する僧が何寺の住職でいつ時代の人物かについて不明である。一方、菩提供養の願主は天台沙門亮昌で「仁王経」を写経し極楽往生を祈願している。以下供養と写経について若干の考察を行ってみたい。既に経碑の碑文に「奉供養仁王経」とあり埋納された経石がはたして仁王経を写経したものであるかどうか、また多字石等にみられる墨書も仁王経なるものであるのか否か等々の解明こそ、本経塚の造営目的を一層明瞭にするものと思われる。

一字一石の経石が果して仁王経の経文と一致するか否かについて、「仁王護国般若波羅密多経序品第一」の前文9行をもとに該当経石を当て原典の復元を試みてみた。以下のものがそれであり□は該当文字の見当たらないものである。

仁王護国般若波羅密多経序品第一

如是我聞。一時。佛住王舍國闍維山。與大比丘衆千八百人俱。皆阿羅漢。諸漏已盡。無復煩惱。心善解脫。慧善解脫。九智十智所作已辦。三假實觀。三空門觀。有為功德無為功德。皆圓滿成就。復有比丘尼衆八百人俱。皆阿羅漢。復有無量無數菩薩摩訶薩。實智堅等。闍維國國方便善巧。闍維大行願以四攝法。闍維有願。四無量心普覆一切三摩闍維。得五……。

字数は150字でこのうち経石の欠落しているものが20字あり、原典復元率が86.7%となる。このことから一字一石経は仁王経の経文を写経したとみて誤りないものと考えられる。

次に多字石の墨書はどうかについてみてみたい。④は「無量義経」^(注28)の開経である。またNa 6、7は「蓮華三昧経」^(注29)の頌といわれ8行からなっている。

- | | |
|----------|----------|
| ①娉本覺心法身 | ⑤普門應數諸三昧 |
| ②常住妙法心運臺 | ⑥遠離因果法然具 |
| ③本來空色三身徳 | ⑦無辺徳海本円満 |
| ④三十七尊住心城 | ⑧還我頂礼心諸佛 |

Na 1、3、5、8～10、15、20～22はNa 15に代表される護法善神^(注30)、既に「十六善神」の名で「陀羅尼集経」^(注31)にてでくる下記の諸神王である。

- | | |
|---------|---------|
| ①提頭頼吒神王 | ⑤呌囉嚩嚩神王 |
| ②禁毘神王 | ⑥鈍徒毘神王 |
| ③跋折嚩神王 | ⑦阿囉嚩神王 |
| ④迦毘嚩神王 | ⑧婆囉嚩神王 |

- | | |
|--------|---------|
| ⑩印陀嚩神王 | ⑬眞陀嚩神王 |
| ⑪婆嬋嚩神王 | ⑭跋叱從嚩神王 |
| ⑫摩休嚩神王 | ⑮毘迦嚩神王 |
| ⑬鳩尾嚩神王 | ⑯俱鞞嚩神王 |

No11の裏面は東磐井郡藤沢町増沢に所在する岩瀨近江守の墓碑名と同じで、時宗二世「他阿聖人」^(注32)
^(注33)の法語といわれている。

以上の多字石は本経塚の造営目的についてある程度の資料を提供してくれた。既に結論を要約すると「金剛儀現」の菩提供養にあたり仁王経を中心経文とし「無量義経」「蓮華三昧経」「陀羅尼集経」など導師の供養の意案にしたがって書かれた本尊に代る経文を写経し、併せて十六善神に菩提の守護を願う埋経であったと考え大過ないものと思われる。

e 本経塚と背景

白髭神社の参道入口付近に往古「秀明院」と呼ばれる寺が口碑に残っている。これを安政5年の「和賀郡下鬼柳村絵図」でみると、白髭神社参道入口の左崖中段に記されている。口碑によると秀明院は文政3年(1820)火災で焼失したと伝えられ、また秀明院は花巻市愛宕山八幡寺の末寺とも云われている。八幡寺については「和賀、稗貫郷村誌」^(注34)に「南部利直の時、編倉にあった万福寺を花巻に移し、慶長16年(1611)八幡寺と改称、軍事要害の地であるから和賀、稗貫両郡の鎮守として軍神愛宕を勧請した…(途中略)…明治初年になって排仏毀釈の神仏混交を禁ぜられ天台、真言宗は大概廃され、高松寺、八幡寺、妙泉寺、成島寺も廃寺となった……。」この「和賀、稗貫郷村誌」にいう八幡寺と秀明院が本寺、末寺の関係にあることが容認されるならば、南部、伊達両藩の藩境に鎮守の先鋒として秀明院を開基したこともある程度認められる。以上をもとに推測すると八幡寺の創建が1611年であり、秀明院の開基はこれ以降となる。また焼失年代が1820年と云われることから寺院の存続期間は長くて200年弱となる。秀明院、八幡寺に関する寺伝は今のところ見当らず、わずかに上記郷村誌を頼る他にない。一方絵図をもとに現経塚位置をみると、秀明院跡と目される地点からの想定で、その境内の一部か、参道付近と解される。近世における経塚造営の地理的位置の特色として、寺院、神社の境内、交通の要路、眺望のきく場所などが選定される。この一般例からみても秀明院とのかかわりが深くなる。

f 経塚造営の関係者(第76・77図)

本経塚の造営に携わった人々は造営の目的でふれたごとく、天台宗の沙門「亮昌」が導師となり中心的役割を果たしたことは既に述べた通りである。また、亮昌は天台宗の修験僧と考えられるがそれを立証する資料に欠ける。一方写経に関与した人々であるが、墨書の筆跡をもとに類別するとほぼ10種類ほどとなり、10人前後の参加とみられる。なお、墨書文字の観察から「百姓文字」は見当らず修験僧の手になったものである。

g まとめ

- ・鬼柳西裏経塚は埋経碑を伴った一字一石経塚である。
- ・経塚出土の遺物は礫石経のみである。
- ・遺物埋納土壌は約1m四方、深さ0.5mほどである。

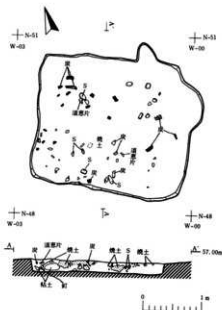
- ・経塚の造営時期は江戸時代中期の寛延2年である。
- ・経塚の造営目的は「金剛儀現」の菩提を供養したものであり、供養に当り「仁王経」を主体に他の經典も写経し埋納した。

第11表 岩手県内経塚遺跡一覧表

No.	経塚名	遺物	所在地	付記
1	医王寺経塚	灰軸三筋壺	西磐井郡花泉町高倉	平安末期
2	経塚		西磐井郡花泉町花泉阿惣沢	
3	金鶏山経塚	古常滑灰軸壺	西磐井郡平泉町	毛越寺所蔵
4	経塚	常滑破片	一関市山目泥田廃寺跡付近	
5	下西風遺跡(経塚)		西磐井郡平泉町長島字下西風20	
6	経塚	壺	江刺市岩谷堂益沢院	
7	経塚	一字一石経	胆沢郡金ヶ崎町関田	一字一石経
8	館城遺跡(経塚)	一字一石経	胆沢郡衣川村下衣川字館城	
9	蝦夷塚1号墳	一字一石経	北上市鬼柳大字下鬼柳字宿坂	
10	経塚山経塚		北上市稲瀬町	
11	水押Ⅰ経塚	陶製壺	北上市口内町字岩井	
12	水押Ⅱ経塚	土師質磁骨器	北上市口内町字岩井	
13	横町廃寺跡経塚		北上市立花町横町	
14	丹内神社経塚	古瀬戸瓶子	和賀郡東和町字谷内	県指定
15	経塚	経筒	和賀郡東和町成島毘沙門堂境内	
16	山谷観音経塚	経筒、一字一石経	遠野市小友	天正12年在銘経筒
17	岩根神社経塚	古常滑壺	花巻市岩根神社	自然軸あり
18	座主館経塚	一字一石?	紫波郡紫波町不動熊野堂跡	
19	新山神社経塚	古常滑壺、古鏡	紫波郡紫波町片寄	
20	宮手朴田経塚		紫波郡紫波町宮手字朴田	
21	白山経塚		紫波郡紫波町赤沢田中	
22	永井経塚	刀子	紫波郡都南村永井字経塚	
23	油壺経塚	壺	紫波郡都南村上場沢字油壺	
24	狄森		紫波郡矢巾町不動大字白沢狄森	
25	経塚	素焼壺(破片)	紫波郡都南村飯岡字上羽場	
26	狐野原一字一石経塚	一字一石経	盛岡市志家八幡片原裏(俗称狐野原地内)	
27	経塚		宮古市和見	五部大経 石碑
28	ちょう塚遺跡		岩手郡西根町田頭5～74	
29	耕雲寺経塚		岩手郡葛巻町葛巻字小田	
30	虚空蔵遺跡		岩手郡磐石町御明神第6地割虚空蔵	
31	経塚		岩手郡玉山村東葉寺向い	
32	経塚		二戸郡浄法寺町御山字御山久保(散逸)	
33	殿坂経塚		二戸郡安代町大字山字花館	
34	曲田経塚	一字一石経	二戸郡安代町大字荒谷字上の山	
35	土ふまずの丘	一字一石経	二戸郡浄法寺町八葉山天台寺	

・経塚の造営を記念または目印として、マウンド付近に銀杏の植樹をおこなった。

(7) X C 09掘込み土壌 (第78図・図版15)



第78図 X C 09掘込み土壌平面図

B A 50から北へ48～51 m、西へ0～3 mの範囲内、地山シルト面で検出した。

〔平面形〕東西約2.5 m、南北約2.3 mのほぼ正方形を呈しているが北壁の一部は外方へ張り出している。

〔壁、床面〕壁の遺存度は割合よく壁高約20cm内外を計測し、立ち上がりはきつい。床面は若干の凹凸が見られるものの概ね平坦である。

〔その他〕ピット、かまど、周溝等の付帯施設は検出できなかった。

〔埋土〕単層で黒褐色土を基調とし、炭化材、木炭末、土器片、陶磁器片、焼土ブロック、礎鉄片などを混入し、特に焼土がブロック状をなして狭んでいた。

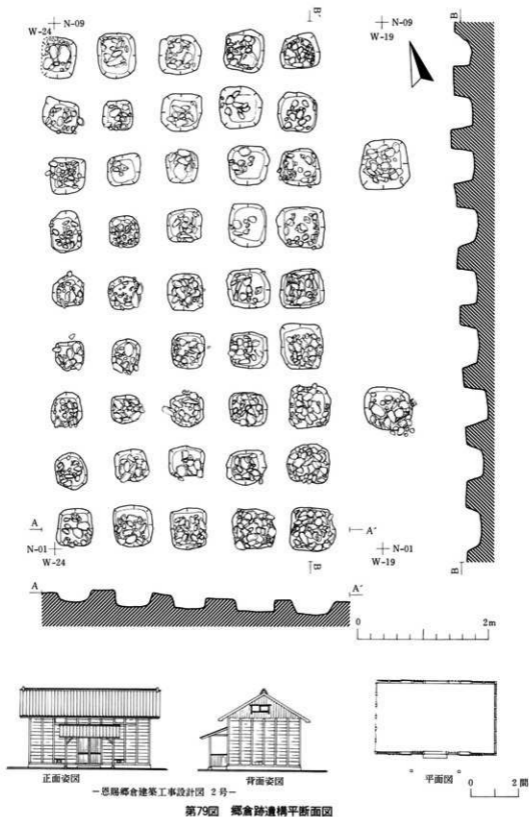
〔出土遺物〕(第65図・2、5、7)

土器、陶磁器、鉄器、炭化材等を主体に出土し、土器類はA類、B類の坏及び甕の破片である。陶磁器類はいずれも近現代のもので窯業地は不明である。その他として煉瓦の破片、炭化材、焼土ブロックなど種々雑多で特に焼土塊の中には壁材とみられる稲藁の炭化痕を残すものがあつた。

以上から本遺構は近世の建物遺構で焼失家屋の可能性が高い。

(8) 郷倉跡 (第79図・図版15)

経塚の南約10 mの位置に根石群を検出した。根石群は東西に5列、南北に9列で南北線から東へ0.6 m隔てて2個が並ぶ。根石は方形状の土壌に埋設されたもので土壌の規模は1辺約60 cmで深さは検出面下約20～30 cmである。根石は川原石がほとんどで長径20 cm前後を大形とし、小は数cmまで数十個づつ詰め込まれている。柱間寸法は3尺の等間隔で配列され、建物は南北棟で桁行4間、梁行2間の倉庫様の建物跡と想定した。幸い地区住民から、かつて郷倉のあつたことを聞き



— 恩賜郷舎建築工事設計図 2号 —

第79図 郷舎跡遺構断面図

本遺構が恩賜の郷倉跡遺構であることを確認した。郷倉の建設時期は地区により若干のずれがあるものの県内では昭和9～10年頃に創設されている。たまたま郷倉の設計図を入手するに及び判断の正しさが証明された。遺構図では梁行2間であるが建築時においては3間が正しく、西側の根石2列が消滅していた。消滅理由は、東北本線複線化工事の際に掘削され消滅したものである。なお第78図下段の「恩賜郷倉建築工事設計図」は2号の設計図で参考資料として掲げた。

(9) ビット類及び溝 (第80～83図・図版15)

(A) ビット

本遺跡の調査は南北30m毎にブロック分けを行い、北からX区、B区、C区の順に名称を付した。このうちC区を除き83個に及ぶ大小様々のビットを検出した。ビットは規模、形状などから次のような分類を試みた。なお第12表はビット計測一らん表である。

A類—長径1m以上のもの

B類—長径0.5～1m未満のもの

C類—長径0.5m未満のもの

さらにこれらを形状の相異から4細分した。

1類—円形状のもの

2類—楕円形状のもの

3類—方形状のもの

4類—不定形状のもの

以上の分類基準に従って集約したものが第12表である。これによると最も多いのがC類でA、B類はほぼ同数である。また形状別では1類の円形ビットが全体の約72%を占める。C₁類は柱穴の可能性も強いがいずれも柱筋が通らず不明である。またA₂類は廃棄物の投棄を目的とした土壌とみられ、A₃類の中には野菜等の貯蔵穴とみられるものも含まれる。一般に性格不明のビットと群として把握する以外ない。

(B) 溝

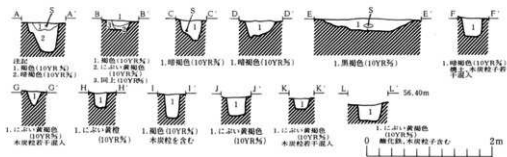
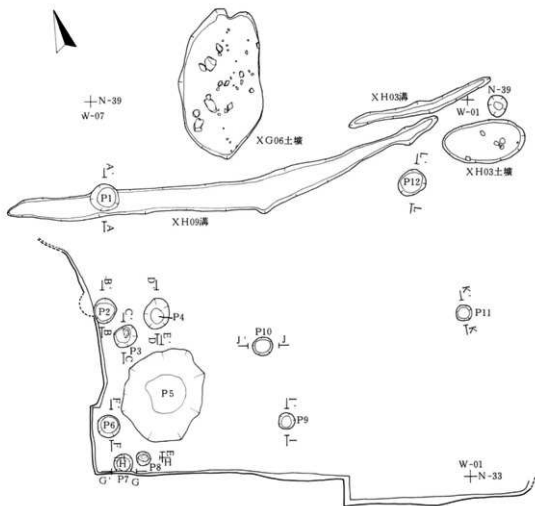
遺跡全体で6条の溝を検出した。ここではAD24溝を除く他の5条についてだけ記す。X区2条、A区2条、B区1条でいずれも小形で浅い。BB18溝は底部付近に川原石が不規則に検出されたが他の溝と同様に性格は不明である。

10 遺構外遺物

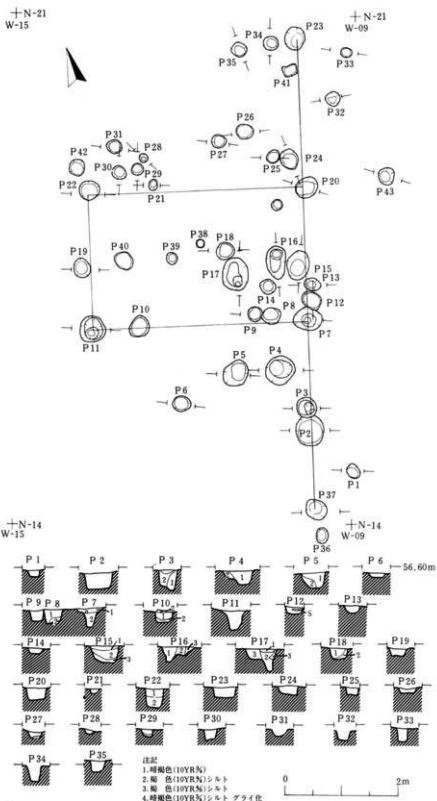
本遺跡は再三にわたる土木工事で自然堆積層の攪乱、削平が著しく、したがって遺物は必ずしも自然層序内に包含されることはなく表層に浮上、または下層に埋没するなどしている。本来的には大部分のものが遺構に伴うことを原則としながらも以上の要因から遺構外遺物とならざるをえないものが数的に多かった。ここでこのような遺構に伴わない遺物について記すことにする。

X区 (第84図)

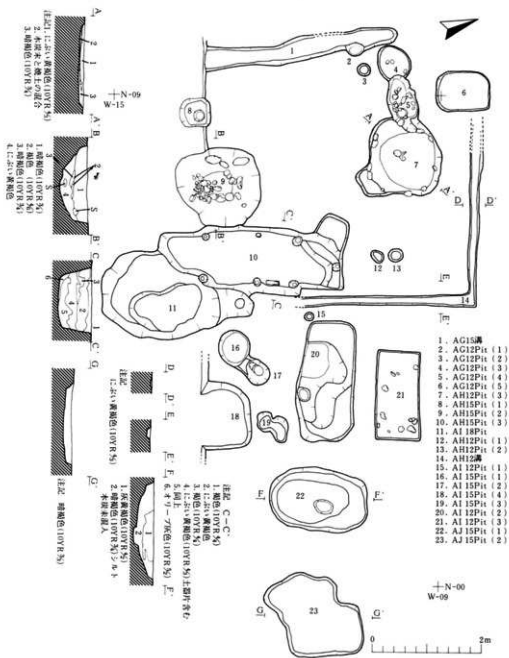
坏 1～3はCIIa₂に含まれるやゝ小形の坏でロクロ成形、胎土は良質であるが焼成はあまい。4は体部がやゝふくらみをもって外傾し口縁部の外反はみられない。器厚は厚手で、体部外面に



第80図 X区ピット、溝断面図



第81図 A区ピット群平断面図



第82図 A区ピット群平断面図

斜方向のヘラケズリ調整が認められる。器形は浅形で皿状に近い。

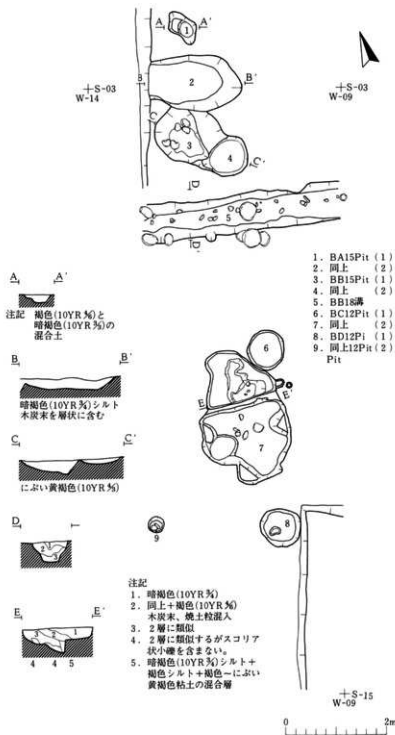
甕 5 はロクロ未使用の内黒甕で、口縁部直下にヘラケズリ痕を残す。長胴甕の破片と推測される。6、7もロクロ未使用の甕で口縁部に若干の相異がみられる。小形で器高の低い甕と思われる。8はB類に属するもので、外面は格子目状の叩き痕がみられ、内面にはヘラ状工具によるケズリが明瞭である。胎土、焼成とも良好でくすべ色を呈している。

古銭 (第87図)

3、11、18の3点で3は古寛永である。11はビット5の埋土内出土のものである。

A区 (第86図)

坏 1 は でロクロ成形、底部の技法は欠損し不明である。体部のふくらみが強く口縁部は丸くおさまる。内外全面にヘラミガキ調整がなされ黒色処理を行って



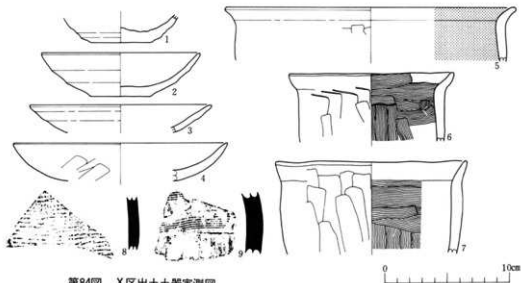
第83図 B区ビット群平面断面図

いる。2は内黒帯でA1a類に分類される。器形は丸味をもち口縁部は欠損し不明である。内外面に粗いヘラケズリ調整がみられ器厚の厚い形の土器である。3～5はB類の坏で色調は灰褐色を呈し焼成は還元焰による。内外無調整で4の底部は回転糸切りである。6～9はC類土器で7は硬質の須恵系土器の範疇に含まれ他は土師質土器の類である。8は内外面無調整の坏で体部の外傾度が強く口縁部が外反する。形状から皿形に近い。

壺 10、11はA類の中形甕の破片でいずれもロクロ未使用のものである。10は口縁部が極端に短かくわずかに外反している。外面調整は粗く巾広のヘラケズリで内面は横方向のナデがみられる。11は底部から胴部にかけての破片で外面にヘラケズリ痕が認められる。両者とも焼成はあまく、脆弱。12、13はB類に属するもので、12は長頸瓶、13は甕の胴部破片である。12は肩部付近に自然釉の剥落が認められる。13は大形甕で胴部外面に平行叩き目痕、内面にあて板痕がみられる。胎土、焼成とも良好で灰褐色を呈している。14～20はB類の壺の破片を拓本にしたものである。内面調整で14、18に青海波文を、19に菊花状のあて板痕がみられる。

陶磁器 (第66図)

器種は碗、皿、鉢、高台などである。時期的には江戸時代末期頃から近代に及ぶものとされ地方生産の色が濃い。9は器種不明の底部破片でAG12グリットの粗掘り中に出土した青磁である。

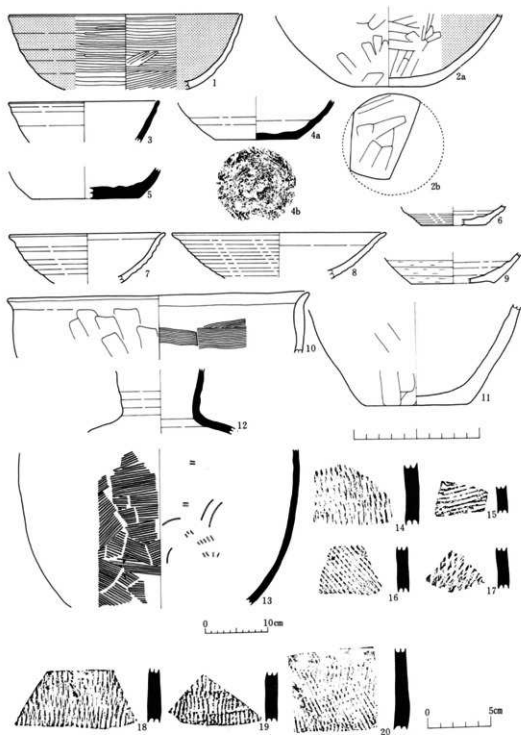


第84図 X区出土土器実測図

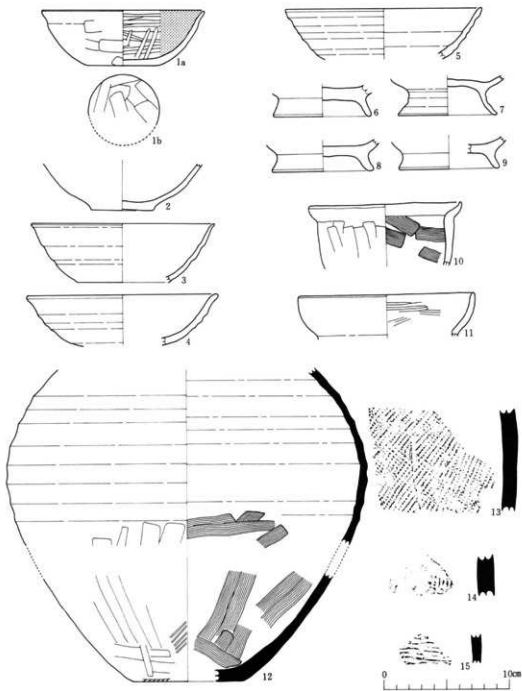
胎土は薄灰色を呈し、内外面とも「うぐいす」色の施釉がみられ釉の厚さは0.5～1.0mmほどで厚い。

古銭 (第87図・図版22)

2、4、5、7、12～15、17、19、21～24の計15枚が出土した。このうち2は寛永銭である。18は(文政期太字)銅四文銭で昭和5年(1768)に鑄銭を開始、文政期に吹き増しされたものである。4は(明和期亀戸銭)、大中小様があり大様は狭穿、小様は潤縁で白黄色を呈し、本例は小様に含まれるものである。21～24は現代貨幣である。



第85图 A区出土土器实测图



第86图 B区出土土器实测图

第12表 ビット一覧表

区	ビット(No)	規			類別	出土遺物	付記
		長さ(cm)	径(cm)	深さ(m)			
X	1	0.46	0.44	0.5	C ₁	縄文土器片 坏A類 甕A類破片 甕B類破片	長径20cm大の川原石及び小礫を埋土及び堆底部に検出 堆底部に礫を多く混入 赤褐色の焼土、木炭末を混入 埋土内に木炭末を混入 埋土は単層で層中に木炭末混入 埋土中に木炭末混入 長径10cm大の礫を堆底部に検出 中段層に川原石(長径15cm)を混入 炭、焼土を若干混入 木炭粒子混入 埋土内に小礫を混入 埋土中に若干の木炭末を混入 上層に小礫を混入 底部に小礫 埋土上位層に平板な石(長径20cm弱)が水平に出土 小礫を混入 堆底部に礫を混入 第2層に木根の腐朽 A類土器片① 埋土中位層に若干の木炭末混入 堆底部に礫 堆底部に礫 木炭末、焼土を混入 検出面下約80cmで鋸屑の層を検出層厚2~3cm木炭粒子 埋土内に長径15cm大の礫 木炭末を混入 堆底部に大小の小礫を混入 木炭末、礫を混入 近層における野原用貯蔵穴(穴ぐら)層の礫の5層を6層の間に炭化物層があり、この層付近に礫が塊状をなす 堆底部に川原石10数個検出 堆底部に長径10cm弱の礫 腐朽した木炭片が塊状に検出する 長径20cm弱の川原石5個を堆底部に検出、木炭末を少量混入 堆底部に川原石数個検出 長径10cm内外の礫を堆底部に検出
	2	0.4	0.36	0.2	C ₁		
	3	0.4	0.32	0.4	C ₁		
	4	0.5	0.4	0.3	C ₁		
	5	1.55	1.25	0.2	A ₁		
	6	0.35	0.35	0.3	C ₁		
	7	0.3	0.3	0.25	C ₁		
	8	0.25	0.2	0.25	C ₁		
	9	0.3	0.25	0.4	C ₁		
	10	0.3	0.3	0.3	C ₁		
	11	0.25	0.25	0.2	C ₁		
	12	0.46	0.4	0.28	C ₁		
	13	1.3	0.7	0.11	A ₂		
	14	0.35	0.32	0.7	C ₁		
	15	2.4	1.3	0.3	A ₂		
A	1	0.3	0.2	0.15	C ₁	A類土器片① 埋土中位層に若干の木炭末混入 堆底部に礫 第2層に木根の腐朽 A類土器片① 埋土中位層に若干の木炭末混入 堆底部に礫 堆底部に礫 木炭末、焼土を混入 検出面下約80cmで鋸屑の層を検出層厚2~3cm木炭粒子 埋土内に長径15cm大の礫 木炭末を混入 堆底部に大小の小礫を混入 木炭末、礫を混入 近層における野原用貯蔵穴(穴ぐら)層の礫の5層を6層の間に炭化物層があり、この層付近に礫が塊状をなす 堆底部に川原石10数個検出 堆底部に長径10cm弱の礫 腐朽した木炭片が塊状に検出する 長径20cm弱の川原石5個を堆底部に検出、木炭末を少量混入 堆底部に川原石数個検出 長径10cm内外の礫を堆底部に検出	
	2	0.6	0.5	0.3	B ₁		
	3	0.35	0.35	0.4	C ₁		
	4	0.55	0.5	0.3	B ₁		
	5	0.5	0.45	0.25	B ₁		
	6	0.35	0.3	0.1	C ₁		
	7	0.52	0.44	0.32	B ₁		
	8	0.35	0.3	0.25	C ₁		
	9	0.3	0.25	0.2	C ₁		
	10	0.4	0.35	0.25	C ₁		
	11	0.46	0.45	0.35	C ₁		
	12	0.5	0.45	0.15	B ₁		
	13	0.3	0.25	0.15	C ₁		
	14	0.3	0.3	0.15	C ₁		
	15	0.5	0.3	0.3	B ₂		
	16	0.6	0.35	0.3	B ₂		
	17	0.6	0.45	0.45	B ₂		
	18	0.3	0.3	0.25	C ₁		
	19	0.35	0.3	0.2	C ₁		
	20	0.42	0.35	0.11	C ₁		
	21	0.2	0.15	0.1	C ₁		
	22	0.35	0.34	0.32	C ₁		
	23	0.42	0.35	0.34	B ₁		
	24	0.35	0.3	0.15	C ₁		
	25	0.25	0.2	0.15	C ₁		
	26	0.3	0.25	0.1	C ₁		
	27	0.25	0.25	0.2	C ₁		
	28	0.15	0.15	0.1	C ₁		
	29	0.2	0.2	0.15	C ₁		
	30	0.25	0.25	0.2	C ₁		
	31	0.3	0.25	0.15	C ₁		
	32	0.3	0.3	0.2	C ₁		
	33	0.2	0.15	0.25	C ₁		
	34	0.3	0.25	0.3	C ₁		
	35	0.3	0.3	0.2	C ₁		
36	0.3	0.2	0.3	C ₁			
37	0.42	0.32	0.23	C ₁			
38	0.15	1.25	0.9	A ₂			
39	5.5	3.2	1.07	A ₂			
40	0.35	0.25	0.1	C ₁			
41	0.25	0.2	0.1	C ₁			
42	0.7	0.6	0.13	B ₁			
43	1.1	0.5	0.2	A ₂			
44	1.0	0.7	0.15	A ₂			
45	1.6	1.4	0.15	A ₂			
46	0.6	0.5	0.4	A ₁			
47	1.55	1.45	0.55	A ₁			
48	3.4	1.2	0.65	A ₁			
49	2.2	1.6	0.5	A ₂			
50	0.3	0.2	0.15	C ₁			
51	0.3	0.25	0.2	C ₁			
52	0.2	0.15	0.13	C ₁			
53	0.65	0.6	0.2	B ₁			
54	0.6	0.45	0.23	B ₁			
55	0.7	0.3	0.3	B ₁			
56	1.5	1.3	不明	A ₁			
57	2.2	1.0	0.4	A ₂			
58	1.65	0.8	0.08	A ₂			
59	1.8	1.15	0.4	A ₂			
60	2.0	1.1	0.2	A ₂			
B	1	0.75	0.4	0.17	B ₁	A類土器片③ C I類① C II類① A類土器片③ C II類⑦ 甕A類② B類① 1層、縄文土器片、チップ、2層、焼土、木炭末、3層、土器片 坏A類① C I類①	
	2	2.0	1.1	0.25	A ₂		
	3	1.3	1.15	0.3	A ₂		
	4	0.9	0.8	0.1	B ₁		
	5	0.8	0.7	0.11	B ₁		
	6	2.7	1.4	0.5	A ₂		
	7	0.8	0.75	0.24	B ₁		
	8	0.32	0.3	0.7	C ₁		

B区

土器類 (第86図)

坏、甕類を主体に出土している。

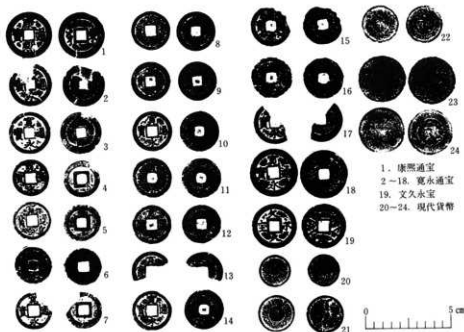
坏 1はAⅠ類に含まれる内外面ヘラミガキおよびケズリ調整を行った作りのていねいな内黒坏である。底部は手持ちヘラケズリのため不明。2～5はやゝ大形のC類土器で、2～4は軟質で調整、黒色処理のなされないもの、5は硬質である。6～9はCⅡ類に含まれる軟質の高台付坏の破片である。

甕 A類は10、11の二例にとどまる。10は口縁部が強く屈曲し「く」の字状に外反する特異な形態のものである。調整は外面はヘラケズリ、内面がナデである。11は壺形土器の口縁部破片である。口縁部が内彎気味に丸みをもって外傾し口縁部がやゝ内傾気味となる。器形は口縁部に最大径をもつ小形の壺である。12はB類の底部から肩部にいたる大形甕の破片で色調は「あづき色」に近い、胎土、焼成とも良好で硬い。外面は胴部下半にヘラケズリ調整を施こし、内面に横、斜方向のナデがみられる胴部上方には調整痕はみられない。13～15は甕の胴部破片の拓本である。

第13表 ビット類別一覧表

類別	数	%	
A類	A ₁	3	3.6
	A ₂	8	9.6
	A ₃	5	6.0
	A ₄	3	3.6
B類	B ₁	12	14.5
	B ₂	3	3.6
	B ₃	1	1.2
	B ₄	2	2.4
C類	C ₁	45	54.2
	C ₂	1	1.3
計	83	100	

小類別	数	%
1	60	72.3
2	12	14.5
3	6	7.2
4	5	6.0
計	83	100



1. 康熙通宝
2～18. 寛永通宝
19. 文久永宝
20～24. 現代貨幣

第87図 古銭拓影図

陶磁器 (第66図)

本ブロックもA区同様に陶磁器の出土が多く、特に御飯屋跡の堀埋土からの出土が多かった。8、10～12、14～16、18、21の10点が実測可能な陶磁器である。8は鉢の一種と思われる。口縁部が波状を呈し薄水色の施軸が口縁部から体部にかけて流れている。産地は宮城県岩出山上ノ目と想定され幕末から明治初期頃とみられる。10は底部付近の皿状の破片と推定され、胎土の観察から陶器の仲間と思われる。外面には軸がみられず内面に緑色の施軸がなされている。時期は16世紀中葉頃で美濃焼と云われる。11、12は小形甕の底部破片で内面に棒状工具による押圧痕がみられる。14は磁器の皿で底部付近の破片である。内外面に白色の釉をかけ内面に青緑色の菱形文様の幾何学図形がみられる。窯業地は宮城県の切込の可能性が大きい。21は小形の陶製摺鉢で底部の條痕は5本一組である。

古銭 (第67図)

1、6、8、9、10、16の6点が粗掘中及び遺構外出土のものである。1は「康熙通宝」(1662～1667年)で渡来銭である。その他は寛永通宝である。^{17,37)}

11) まとめ

中、近、現代遺構の中でA D24溝、X F堀跡遺構、御飯屋堀跡遺構、A E15掘立柱建物跡遺構、石敷遺構、鬼柳一字一石経塚については夫々の項でまとめと考察を行っているのでここではそれ以外の遺構及び出土遺物について若干のまとめを行う。

調査区北端付近に検出したX C掘込み土壌については出土遺物からほぼ近世末ないしは明治初期頃の物置小屋風の建物跡と推測された。大小様々のビット群は伴出遺物の関係などから推定すると第1は掘立柱穴、第2は廃棄物の投棄を目的としたもの、第3は貯蔵穴、第4は性格不明のものに大別される。しかし個々のビット全てについては性格を明確にすることはできなかった。溝類はいずれも浅形で規模も小さく性格、機能などは把握できなかった。

追記

以上、二次に亘る鬼柳西裏遺跡の調査成果について述べて来たが、その結果、当遺跡が縄文時代以降、現代まで連続と続いてきた典型的な複合遺跡である事が明らかになった。途中、弥生時代から平安時代に致る中間の時期に遺構が見られず、遺物も極めて少なくなる事がある。しかしながら、多少なりといえども、遺物が残されているという事実は、何らかの人間生活が付近で営まれていた一つの証拠と言えよう。

いずれ二次に亘る調査の成果は、調査範囲が比較的狭いにもかかわらず、前記複合遺跡としての性格とも相俟って、極めて豊富なものとなった。とは言え、その事によってこの遺跡の全貌が必ずしも明らかになったわけではなく、古代集落の範囲や始源の問題とか、近世鬼柳本町集落の変遷過程といった、多くの未解決の疑問が残された。これらの疑問の解決は今後の調査に期待させざるを得ないが、それだけに今後遺跡の範囲を確認保護対策を貢じてゆく必要があると言えよう。

最後に調査にご協力くださった地元の方々をはじめとする多くの方々にお礼申し上げ、報告を終わる事にしたい。

- 注1) 宮城県立多賀城跡調査研究所の教示による
- 注2) 相去遺跡現地説明会資料
- 注3) 東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 第34集 岩手県教育委員会 昭54
- 注4) 東北北部の歴史時代の土器 沼山源喜治 昭53
- 注5) 岩手県埋蔵文化財センター調査報告書 第8集 岩手県埋蔵文化財センター 昭54
- 注6) 金ヶ崎町西根遺跡 第1次調査報告書 草間俊一 金ヶ崎町教育委員会 昭34
- 注7) 「岩手県の古代土器生産について」 伊藤博幸 岩手史学研究 61号 昭51
- 注8) 図説 日本文化の歴史 ③ 奈良 小学館 昭54
- 注9) 岩手県文化財審議会委員 司東真雄氏の教示による
- 注10) 北上市史 北上市 昭45
- 注11) 北上市役所庶務課所蔵
- 注12) 同上
- 注13) 北上市諏訪町 小沢セツ所蔵
- 注14) 北上市立博物館付属民俗資料館所蔵
- 注15~16) 日本歴史年表 歴史学会編 昭41
- 注17) 雫石町史 雫石町 昭54
- 注18) 橋崎彰一氏の鑑定による
- 注19) 新版 仏教考古学講座(6巻) 石田茂作編 雄山閣 昭52
- 注20) 八宮山経塚の発掘 中村昌二 歴史手帳5巻4号 昭52
- 注21~22) 注19に同じ
- 注23) 「宮城県の経塚について」 藤沼邦彦 東北歴史資料館研究紀要1) 昭50
- 注24) 埋蔵文化財発掘調査略報 岩手県教育委員会 昭48
- 注25) 東北林業試験場 村井三郎氏の教示による
- 注26) 注9に同じ
- 注27) 岩手県雫石町虚空蔵遺跡報告書 伊東信雄、板橋源 昭38
- 注28~33) 注9に同じ
- 注34) 奥羽史談 小原無学氏の論文 「花巻古事記」参照
- 注35) 岩手百科辞典 P269 昭53 「1933年(昭和8)63棟、貯穀高5,388石、貸付高2,036石、893人、1934の凶作を契機に経済更生運動で奨励され、1935年 1128棟、利用戸数126,576戸、41,838石を貯穀した」 以上のごとく郷倉は穀物の備荒用として各市町村に建設された。現在でも各地になお多く現存している。
- 注36) 注6に同じ、同報文中の6号住居址出土の壺に類似するもので口縁部の計測値はほぼ一致する。本土器は編年的には前期土器に含まれ、奈良時代以前に位置付けられよう。
- 注37) 清国発行の貨幣で、康熙帝の時代、裏面に「東」と「寧」の滿州文字がみられる。

参考文献

岩手県史

北上市史

水沢市史

大船渡市史

東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書 I、II、III 岩手県教育委員会

東北新幹線埋蔵文化財発掘調査略報 昭49、50、51、52 岩手県教育委員会

東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書 I、II 岩手県教育委員会

「胆沢城出土の糸切轆轤土師器とその編年の考察」 沼山源喜治 北奥古代文化 2号

考古風土記 第2号 昭51

「盛岡市狐野原一字一石経塚」 吉田義昭 奥羽史談 第27号 昭35

岩手県江釣子新平塚群遺跡 江釣子村教育委員会 昭42

東和町丹内山神社経塚発掘調査報告書 東和町教育委員会、丹内山神社 昭35

「中世宮城郡内の若干の考古遺物」 東北文化研究所紀要 第10号 野崎準 東北学院大学 昭54

金沢市河原市遺跡 石川県教育委員会 昭49

堀端経塚発掘調査報告書 今市市教育委員会 昭42

「会津坂下町中目経塚」 中目経塚調査会 福島考古 第17号 昭51

山形県立博物館研究報告 第4号 羽州山寺の庶民信仰について 大友義助 昭50

東北新幹線関係遺跡発掘調査略報VI 福島県教育委員会 昭54

発掘調査の手引き 国土地理協会 昭50

北上市の原始古代の遺跡 北上市立博物館 昭49

新版仏教考古学講座 第6巻 雄山閣 昭52

修驗道 宮家 準 歴史新書 教育社 昭53

岩手県古代仏教資料調査 岩手県教育委員会 昭53

岩手の歴史論集I 「古代文化」 司東真雄 昭53

「天台寺土ふまず丘発掘記」 赤塚治持、板橋源 補注 岩手史学研究 第31号 昭34

日本考古学を学ぶ(1) 有斐閣選書 昭54

新寛永銭鑑識の手引き 万国貨幣研究会 昭44

おち 落 合 Ⅱ 遺 跡

遺 跡 記 号：O A-Ⅱ

所 在 地：江刺市愛宕字落合89他

調 査 期 間：昭和49年4月8日～8月8日

調 査 対 象 面 積：2,420㎡

平 面 測 量 基 準 点：東京起点431,800km (C A 50)

基 準 高：A 区～37.50m

B 区～38.50m

I 遺跡の位置と環境

1 位置と地形・地質

〔1〕位置（第Ⅰ図）

江刺市は岩手県の中南部に位置する田園小都市で、人口約37,000人（昭55）を数える。市域は北上川中流の左岸（東岸）の平野部とその東側に続く丘陵地一帯に広がり、その面積は360.77㎓に及ぶ。これは1955年（昭30）に現在の市の中心部をなしている岩谷堂町と周辺の9村が合併し町制施行を行い、更に1958年に市制施行となったことによるものである。

市の中心部は前述の岩谷堂地区にあり、市域西寄りに位置する。ここから隣接する国鉄水沢駅、北上駅にはそれぞれ7km、14kmの距離にある。

本遺跡は市の中心部より南・約2kmの位置にあり、地籍は江刺市愛宕字落合89他である。

〔2〕地形（第Ⅱ図）

市の西部を北上川が流れている。岩手県北部に源流をもつ北上川は、岩手県を南北に流れ、宮城県東北部の石巻湾に注いでいる。宮城、岩手の県境までの岩手県内の流路の長さは175.9km、河口までの全長は約243km、流域面積10,720㎓^(注1)に及ぶ全国第4位、東北第1位の大河である。

この北上川は古来より舟、筏などによる水上交通の重要な役割りを果たしてきた。古代における記録にも多く見られるところであり、平安中期における奥六郡を支配した安倍氏、更に藤原氏の平泉文化の確立にはこの水運が大きな役割りを果たしている。1891年の東北本線開通によってその役割りは大きく変化した。北上川の果たした役割りは極めて大きいものがあった。

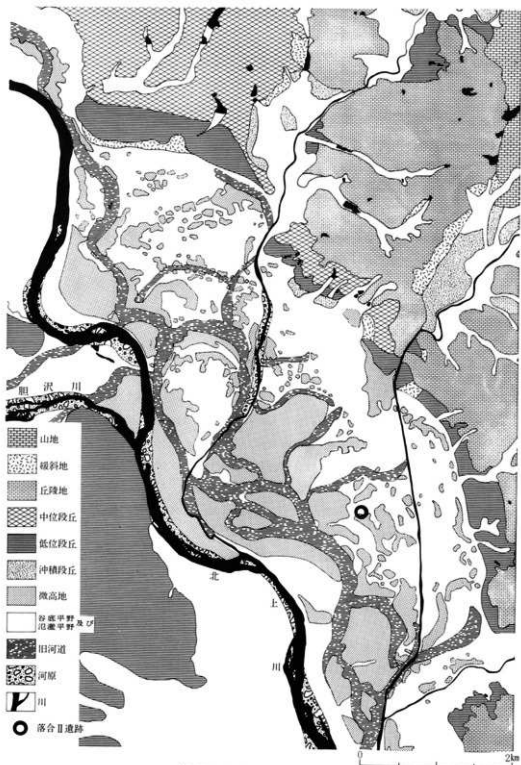
しかし、この北上川及びその支流の各河川は7、8月に集中する降水量の増大のため、洪水を招き易く、特に8、9月は台風期の大雨による大洪水が過去、幾度となく襲い、この江刺市周辺、特に本遺跡所在の愛宕地区は大きな被害を被ってきた。

こうした北上川の洪水が、当地域の地形形成及び地質の構成に大きな作用をもたらしていることは当然である。

江刺市全般の地形をみると次のようになる。

前述したように江刺市は北上川中流域（盛岡一前沢）沿岸地帯に位置する。この北上川中流域には北上山地（左岸）から流入する人首川などの河川があり、北上山地の古生層、古期深成岩地帯を洗う。一方、奥羽山脈（右岸）から流入する胆沢川などの河川は新第三紀層の砂岩、凝灰岩を基盤とする台地、扇状地性段丘の末端に侵食崖をつくっている。この東西から流入する各支流は多量の砂礫を運び、特に奥羽山脈支流から運び込まれた砂礫量は北上山地支流のそれに比べて著しく多く、この結果、北上川右岸（西岸）には大小の扇状地や扇状地性段丘群の発達が見られ、中流域での流路が東に偏する要因となっている。

以上の地形は、中流域一般についていえることであるが、本遺跡所在の江刺市、更に西岸の胆



第II図 地形分類概念図

沢地方においては特に顕著にみられることである。北上川右岸（西岸）には、胆沢扇状地、六原扇状地などの大きな扇状地が発達している。胆沢扇状地は胆沢町市野々付付近に扇状地をもち、扇頂部で約50度開く。扇端部まで16～18kmもあり、県内一大きな規模を有している。この胆沢扇状地は奥羽山脈より東流する胆沢川によって形成されたもので、段丘化した地形をなしている。ここでは古期のものほど高く、新期のものほど低いという段丘地形の一般的配置が明瞭にみられる。即ち、上位より一首坂段丘（西根段丘相当面）、胆沢段丘（村崎野段丘相当面）、水沢段丘（金ヶ崎段丘相当面）に大別され、胆沢段丘は東部で更に4段に細分される。これを高位のものから順に上野原、横道、堀切、福原段丘とそれぞれ呼ばれ、各段はかなり明瞭な段丘崖によって境されている。

一方、北上川左岸（東岸）では段丘面の発達は著しく貧弱であり、西岸とは明瞭な差異を示している。これは東岸においては西岸に見られるような起伏の大きな地形から急勾配で合流する地形にはなく、比較的緩い勾配をもつ流路になっていることによる。

しかし、江刺市北部の稲瀬付近には比較的顕著な段丘の発達が認められる。即ち、稲瀬より岩谷堂の北端にかけては、中段段丘（村崎野段丘相当面）が広く分布し、その前面に低位段丘（金ヶ崎段丘相当面）が小規模に発達している。また、丘陵西縁部にも小規模ながらも比較的広範囲に見られる。低位段丘はこのほかにも、北上山地に源をもつ広瀬川、人首川、伊手川などの支流沿いに小範囲ながら点在する。しかし、北上川中流域の東岸は北上山系の山地、丘陵地帯がその面積のほとんどを占めている。江刺市東部には、大森山（820m）、種山高原（物見山：870.6m）など北上山地の隆起準平原化された高原地帯が広がっている。

以上のように流域兩岸の地形を示すが、北上川はこの間に帯状に延びる沖積平野をゆるやかに蛇行して南下する。前述したように本遺跡周辺は北上川・支流の河川による洪水氾濫の常襲地帯となっており、沖積平野（江刺平野）上にはこれら河川にかかわる旧河道が多く認められる。また、自然造成された大小の微高地が各所に点在する。

これらの微高地はその成因の違いによって、①原始河川の洗流に残された沖積台地の微高地面（残存沖積台地の微高地面）、②微高地状自然堤防上の沖積面、③原始河川による居揚（いあげ）上の沖積層微高地面（居揚上の沖積層微高地面）などに分けられる。①は沼の上、観音堂沖、橋本、三百刈田、荒谷等の小字名に表記される地域が該当する。②は字別当などがこれに該当し、旧河川路に沿って局部的に形成されており、後背地は低地としてそのまま残されている。③は江刺平野上の微高地の大半を占め、落合Ⅱ遺跡をはじめ、東北新幹線関連遺跡の多くはこの微高地^(注2)上に位置する。

本遺跡は以上の地形的環境の中に位置するが、東北新幹線関連遺跡として調査された落合Ⅰ遺跡（東北新幹線関連遺跡調査報告書・Ⅰに収録）および落合Ⅲ遺跡（岩手県埋蔵文化財センター・文化財調査報告書第8集に収録）と同一地形面上に位置している。また、本遺跡・北低位面（A調査区）における遺物出土地点は、B調査区以南の微高地面との比高が約60cmである。調査時における現状は、A調査区は水田として利用されており、微高地面は宅地、桑地、畑地などである。

〔3〕地質

江刺市の地質は多期に亘り、変化に富む。伊手川、広瀬川、人首川のそれぞれの流域の地層を概括すると次のようになる。伊手川流域にはその上流から下流にいたる間に、まず古生層群の中を流れ、人首花崗岩体の中をつきぬけ、中流からは概ね右側に金沢、真流の夾垂炭層（玉里層）、左に稲瀬層が認められる。②人首川には、江刺東部の古生層山岳地帯、人首花崗岩体、沖積層が認められ、更に真流夾垂炭層、金沢夾垂炭層、稲瀬火山岩層等、新生界、第三系に属する地層がある。③広瀬川流域には、上流地点では古生層内に貫入した花崗岩、中流には稲瀬層、金沢夾炭層、真流夾炭層がある。これら地層のうち、稲瀬層は中新統のものであり、安山岩、凝灰岩、礫岩などの火山性岩石を主要な構成層としている。また、玉里層は鮮新統のもので、玉里夾炭層ともいわれ、稲瀬層の侵食凹凸面を不整合におおっている。上部には垂炭層があり、下部には凝灰質岩石、砂岩、礫岩が発達する。

・新幹線ルートの地質構成^(注4)

北上川に接近し、北上山地より連続した丘陵地がせまる瀬谷子遺跡付近では地質構成は他の地域に比べ多少異なり、硬岩である安山岩が基盤となり、一部では露出している。（安山岩は風化し、一部軟岩化しているところもある。）基盤の上部は位置による差異もあるが、概して砂礫、砂、粘土、シルトが堆積する沖積層でおおわれる。この沖積層は、江刺市内においては北に薄く、南に厚い傾向を示す。これは、基盤の絶対高が南より北へと漸次高くなる傾向（瀬谷子付近—安山岩の基盤—標高約45m、落合Ⅱ付近—泥岩の基盤—標高約30m、中屋敷付近—泥岩の基盤—標高約25m）から考えることもできる。江刺市南部（新幹線ルート、人首川付近）においては表層は沖積層～現河川堆積物の粘土、砂からなり、その厚さは現河川の底部付近で5～6mと厚いが、他は2～4mである。全般に沖積層は軟弱で、その下部に洪積層の砂礫がある。

この砂礫層は粘土分が少なく、最大礫径は平均30～50mm大であり、厚さは2～5mを示す。砂礫層の下部は新第三紀鮮新世の軟岩で泥岩～砂岩～礫岩の構造を示す。泥岩の上部に連続性に富む垂炭を50～200cm程度をはさむ。本遺跡付近においても人首川付近と全体としての層序関係は変わらない。ただ、東側に向かうにつれて、泥岩部が多くなる。宮地付近においては砂層の下部にシルト層の粘性土がみられるようになる。ただ、その堆積はレンズ状の部分的なものである。広瀬川右岸地域にあっては沖積層の凹凸を除けば、地質構成は他の地域とほとんど同じである。五十瀬、谷地付近にあっては、地質構成は他の地域と若干異なる。前述したように硬岩である安山岩が基盤となり、一部で露出している点である。

江刺地区、および本遺跡周辺の新幹線ルート内における地質構成は以上のものであるが、落合Ⅱ遺跡の基本的な層序は第Ⅲ章1・遺跡の基本層序で述べることにする。

2 周辺の遺跡

〔1〕歴史的環境

江刺は長い歴史をもつ。縄文、弥生期の遺跡をはじめ、最近では奈良・平安期の遺跡調査が進められ、大規模な集落跡や付随する各施設（井戸跡など）、日常用具などが多種発見されている。更に、瀬谷子窯跡群は、胆沢城への須恵器、瓦の生産地として知られている。

「江刺郡」の文献上の初見は841(承和8)年^(注5)で、胆沢城建置802(延暦21)年より約40年後である。また、胆沢郡初見年代804(延暦23)年ともほぼ40年後である。この当時の状況を知ることのできる資料として『倭名類聚抄』がある。これによると江刺郡内における郷は、「大井、信農、甲斐、橋井」の4郷が記されており、大日本地名辞書(吉田東伍著)には、4郷の推定位置が記されている。

平泉藤原氏の初代清衡は、平泉に居を構える嘉保年間までは、この江刺郡豊田館にあったという。その後、鎌倉時代に至り、秀吉の全国統一までの約450年、葛西氏およびその一族、江刺氏の勢力下となる。そして天正年間、伊達氏の所領に帰し、現在の状況に近づくのである。

〔2〕周辺の遺跡(第Ⅲ図、第Ⅱ表)

江刺市・および北上川西岸の水沢市・金ヶ崎町には数多くの遺跡が認められている。しかし、その多くは近年の発掘調査によって初めて遺跡の内容が確認されたものも少なくない。特に本遺跡のように最近の開発事業に伴う事前調査によって知られるようになった遺跡がこの江刺市平野部には多い。後述するように江刺平野における微高地は、度々の冠水によって同一性の土質となるところが多く、遺構の識別に困難さを伴うことは事実である。こうした点からも江刺平野における微高地上、および水田面下については未知のことがらが多く、今後の調査によっては、更に遺跡の存在が確認されるものと思われる。

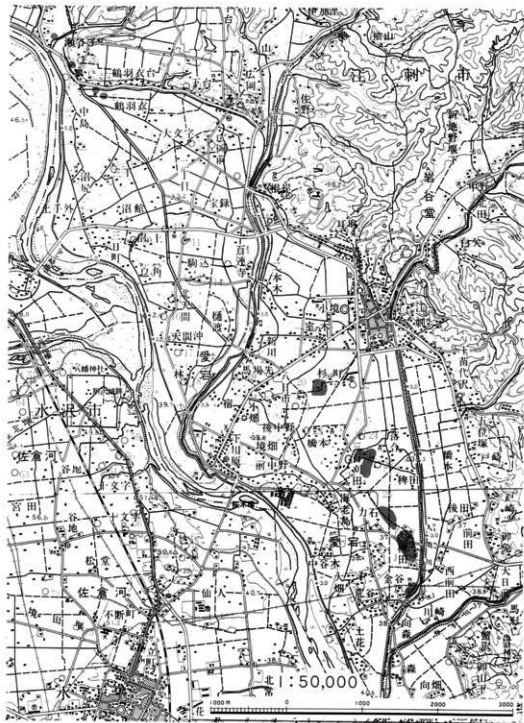
旧石器時代：未だ確認されていない。

縄文時代：新幹線ルート内に確認されたもので、五十瀬神社前遺跡、瀬谷子遺跡の2遺跡がある^(注9)。いずれも沖積平野の微高地上に位置している。五十瀬神社前遺跡は中期末葉に属し、微高地上に立地する遺跡では最も古く、住居跡1棟、炉跡3基が検出されている。瀬谷子遺跡からは中期末葉から後期初頭にかけての土器が少量出土している。このほか、広瀬川、人首川、伊手川流域に発達する小規模な低位段丘上に中期～晩期の遺跡が分布する。また、水沢段丘面を中心に晩期の遺跡が数多く認められている。

弥生時代：沖積微高地上に立地する沼の上遺跡、兎Ⅱ遺跡などがあり、特に沼の上遺跡は弥生中期・谷起鳥式併行の土器を主体に出土し、若干の遺構も検出されている。また、兎Ⅱ遺跡では弥生中期から後期・常盤式併行にかけての土器がかなり出土している。水沢地区には、常盤広町遺跡など標式となる著名な遺跡がある。

古墳時代：江刺地区には確認されていない。水沢地区では、水沢市西方に5世紀末～6世紀初頭に築造されたと考えられる角塚古墳^(注12)がある。これは本州最北の前方後円墳といわれるものであ

— 落合Ⅱ遺跡 —



- A. 谷地遺跡 B. 五十瀬神社前遺跡 C. 瀬谷子遺跡 D. 鶴羽衣台遺跡
 E. 鶴羽衣遺跡 F. 宮地遺跡 G. 落合Ⅱ遺跡 H. 落合Ⅰ遺跡
 I. 力石遺跡 J. 鴻之巣館遺跡 K. 中屋敷遺跡

第Ⅲ図 遺跡の位置と周辺の遺跡

第Ⅱ表 落合Ⅱ遺跡周辺の遺跡地名表

番号	遺跡名	時期	番号	遺跡名	時期
1	瀨谷子窟跡群	平安	40	庚申	明
2	稲瀬古墳群	不	41	根岸	縄文・平安
3	葛ノ木	縄文・平安	42	宝性寺跡	縄文中～晩
4	中島	平安	43	耳男	平安
5	沼尻	〃	44	館下	〃
6	十三	〃	45	万松寺	平安
7	大文	平安	46	金山	平安
8	大宝	平安	47	中野	縄文晩
9	沼の	縄文晩期・弥生	48	四天坊古墳	不
10	沼館	中	49	裏手丘上古墳	〃
11	別当	平安	50	重染赤古墳	〃
12	東間	〃	51	豊田館擬定地	平安
13	百連寺	縄文	52	石白	平安
14	駒込	平安・中世	53	八ツ	平安
15	北天間(1)	平安	54	胆沢城跡	縄文・奈良・平安
16	〃	〃	55	胆沢城跡	縄文・奈良・平安
17	阿弥陀堂跡	〃	56	胆沢城跡	縄文・奈良・平安
18	林	〃	57	胆沢城跡	〃
19	馬馬先	〃	58	胆沢城跡	奈良・平安
20	観音堂沖I	〃	59	胆沢城跡	〃
21	〃II	〃	60	胆沢城跡	〃
22	杉の町	縄文後期・平安	61	伯濟寺跡	不
23	田谷城跡	中	62	獅子鼻B	縄文
24	橋本(朴ノ木)	平安	63	〃A	縄文・平安
25	兔	弥生・平安	64	〃	縄文・中世
26	見分	不	65	玉東大	〃
27	御免	〃	66	八幡	不
28	松川	縄文	67	下河原	縄文晩
29	四丑	平安	68	根岸	〃
30	鶴羽衣櫛擬定地	〃	69	瓦ヶ田	〃
31	稲瀬中学校	〃	70	桐山	〃
32	稲瀬小学校	不	71	下河原釜石	不
33	大迫山	平安	72	幅里	縄文
34	佐野山古墳	不	73	里	縄文
35	寺野山	縄文・平安	74	水沢商業跡	平安
36	神明館古墳	不	75	新小	縄文
37	坂	縄文	76	鹿野	縄文・平安
38	古兵衛乱塔塚	不	77	愛宕神社塚	不
39	根岸洞窟	縄文中	78	岩谷堂城跡	中世～近世

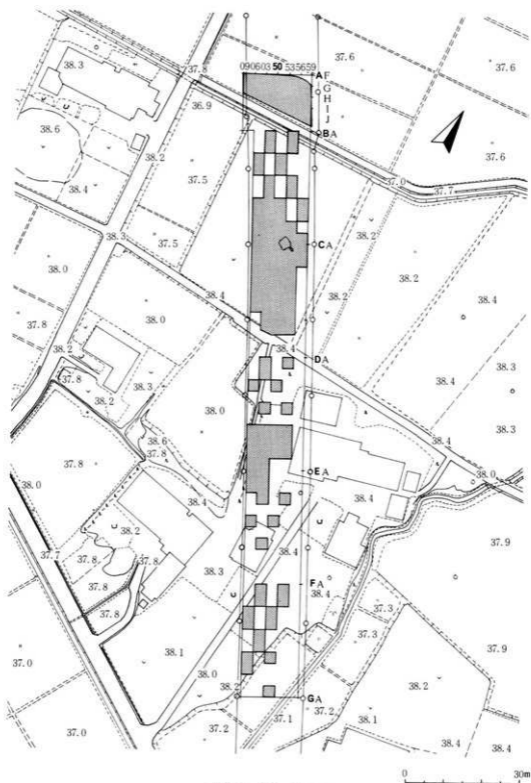
る。また、前期古式土師器を出土する高山遺跡^(注13)、西大畑遺跡がある。

奈良～平安時代：この時代に入ると遺跡の数がかなり多くなる。特に前述したように、最近の東北新幹線、各種公共事業などによる事前発掘調査によって今まで知られていなかった微高地上や水田面下などに遺跡が確認されている。東北新幹線建設に伴って江刺市内を通る新幹線ルートにおいては11遺跡を数える。そのうち奈良～平安時代に該当する遺跡として落合Ⅱ遺跡をはじめ、南より中屋敷、鴻ノ果館、力石、落合Ⅰ、宮地、鶴羽衣、鶴羽衣台、谷地の9遺跡がある。宮地遺跡は8世紀末から10世紀中葉を前後する時期の集落跡で、竪穴住居跡25棟、井戸跡2基、溝11条、方形溝状遺構2基などが検出された。鴻ノ果館遺跡は力石遺跡の南東に位置し、10棟の住居跡が検出されている。落合Ⅰ遺跡は本遺跡の南、落合Ⅲ遺跡は本遺跡の東で、2遺跡とも距離的な差はほとんどなく、これらの名称は発掘調査時における便宜的なものである。したがって、落合Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡は同一の微高地面上に位置する一つの遺跡として把えることもできる。

落合Ⅰ遺跡では竪穴住居跡5棟、竪穴遺構、ピット等の検出があり、また、鋤先などの鉄製品も出土している。落合Ⅲ遺跡からは竪穴住居跡16棟、ピット7基、井戸跡9基等が検出された。住居跡の多くは平安時代初期のもの^(注14)と推定されており、当時期の急激な住居の増加は政治的な計画性のある村落と把えられている。

また、前述した瀬谷子窟跡群はかなり消滅したとはいえ、当地方における窯業史研究の重要遺跡である。

水沢地区にあっては、まず、胆沢城跡があげられる。802(延暦21年)建置され、以降陸奥国支配の中枢的位置を担っていく。本遺跡からは北上川を狭んで西方約3.5kmの地点である。胆沢城跡周辺には今泉、膳性、西大畑、石田遺跡などがあり、水沢段丘上には奈良～平安時代にかけての遺跡が多く存在する。また、胆沢段丘には真城ヶ岡団地遺跡が存在する。このように、奈良～平安時代にかけての遺跡が数多く存在することは、とりもなおさず、本地方の政治、社会情勢の変化が伺われるのである。



第1図 グリッド配置図

Ⅱ 調査の方法と経過

本遺跡の調査の方法は、東北新幹線関連の他の遺跡に対して実施してきたものと基本的には同じであり、それは序文の2に述べているとおりである。しかし、本遺跡においては沖積面（水田面）の旧河道堆積層から後述するような多量の遺物が出土したこともあり、その調査の方法に若干の異なる点もあることから、以下その概要を述べておきたい。

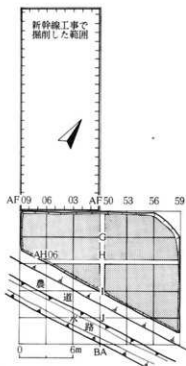
1 調査の方法

調査の方法は前述のように基本的には序文2に記したものと同じである。しかし、本遺跡は、旧水田面下の旧河道堆積層から土器、木製品、種子など多量の遺物が出土したことや、深掘りしたことなど、その調査も今までのものとは異なった方法にならざるをえなかった。具体的には遺物の取り上げ方法もさることながら、安全性を十分配慮したものにしなければならなかった。以下、項目ごとに記述してみる。

調査の範囲：調査の経過で後述するが、当初の調査予定範囲は微高地上のルート内だけであったが、急拠、微高地北側の沖積低地面も含まれることになった。ただ、沖積低地面の旧河道は新幹線ルートを東西に横断する形であったため、調査面積は当初の2,150㎡を270㎡上回っただけである。調査は東京起点から431,800kmの地点（CA50）を実測基準点として微高地上をB～Fの5ブロックに区切り、431,700km地点と431,800km地点を結ぶ中心軸から東西3m、南北3mずつに区切り、グリッドを設定した。また、一部、必要に応じて中心軸より9m地点まで東西にグリッドを拡張したところもあるが、全体としては東西2グリッドずつで12m幅を調査範囲とした。

Aブロックについては東西のグリッドを更に1グリッドずつ増し、東西18m幅とした。

（第1図・第2図参照）



第2図 A調査区（旧河道跡）グリッド配置図

また、BブロックとAブロックの間には、農道と、用水路が設けられており、農作業上これを取り除くことは不可能であったため、最小限の幅のみを残し、調査対象の範囲に含めた。更に、調査地周囲の掘下げを垂直にするために国鉄、業者との協議がもたれ、矢板、シートパイルの打込み等話し合われたが、結局、Aブロックの東西は水田であることと、また安全上からも垂直な壁とすることはできず、ある程度の傾斜面を残さざるを得なかった。

調査の方法：調査の方法はAブロックを除き他の遺跡調査の場合と同様、遺構検出面までを掘り下げ、全体的な状況の中で遺構の有無を確認した。しかし、遺跡の基本土層がシルトで構成され、遺構の堆積土も同色のシルトであることが多かったため、遺構の検出確認に多くの困難さが伴い、時間的にも長くかけざるをえない面もあった。たとえば、遺物出土面がかならずしも遺構検出面になっておらず、更に掘り下げで確認しなければならないこともあった。また地山土と堆積土との区別も困難なことが多く、調査の進行にかなりの影響があったことは事実である。したがって調査の無駄をはぶくためにも基本土層の確認に力を入れた。

Aブロックの旧河道調査にあたっては、当初全て人力だけの作業であったが、遺構の性格上深掘りが進む中で手作業にも限界があり、ベルトコンベア数台を使用し、能率化をはかった。

＜実測図の作成＞

基本的には序文で記述したとおりであるが、特にAブロックにおいては遺物の重なりが著しいため、一層の中でも調査経過の中で数段に分けて遺物出土状況を記録した。したがって本書ではAブロックの遺物出土状況図については合成した平面実測図を作成し、使用した。

①土器の番号記入について

土器取上げ時におけるNoは、大量の土器出土のため、グリッド毎に記録・記名した。したがってNo 1はAG 06にもAF 06にも存在する。この場合の記名はAG 06・No 1、AF 06・No 1とそれぞれ記入した。調査時における出土状況の平面図には、赤ペンのNoで表示してある。

②木製品・材等の番号記入について

木製品（皿、碗、槽、樋、下駄など）や木簡、板材などの番号については、グリッド毎のNoではなく、Aブロック全体の中のNoで記録した。調査時における出土状況の平面図には、青ペンのNoで表示してある。

また、その他の遺物については特に色別したNo表示で記録はせず、種別毎にNoを記入するにとどめた。

なお、本報告書中にある各種の実測図、表、写真などの番号は、整理した上でのNoであり、取上げ時における実測図中のNo・遺物記名Noとは異なるものである。したがって、両者の番号の関係については報告書文中の表などの中で示してある。

＜木製品の保存処理＞

木製品・加工材の出土時における保存では記録完了までの間、乾燥、変形させないことが重要である。したがって記録完了は時期を失ないように手早く行うように努め、また調査中においてもビニル等で被い保存した。記録後は、各遺跡ごとにビニール袋に記名し、水浸しにしておいたが、途中でホルマリン溶液に侵し、保存した。調査終了後、昭和50年9月に奈良市元興寺文化

財研究所に依頼し、ポリエチレングリコール含侵（PEG含侵処理）およびアルコールエーテル法（A.E法）による保存処理を行った。なお、その後の遺物の変化などについても点検しているが異常は認められない。

< 試料の採取 >

試料として、①花粉分析試料、②加工痕の認められる材と同種の試料、③礫を採取した。花粉分析試料はAブロック旧河道内の土層観察用のベルト中から採取したもので、各層毎に採取した。調査終了後、昭和53年4月に東京都・バリノ・サーヴェイ株式会社に依頼し花粉分析を実施した。また、加工痕の認められる材は、Aブロック第IV層中の出土材の中から選定し、昭和54年7月に東京都・日本アイソトープ協会に¹⁴C年代測定を依頼した。更に、礫については旧河道第Ⅷ層中の礫を採取し、別記、佐嶋與四右衛門氏の参考に供した。

2 調査の経過

落合Ⅱ遺跡は当初、微高地上約2,150㎡が調査対象面積とされていたが、調査前の昭和49年3月に、地元、江刺市教育委員会より調査対象地の微高地北側・水田面を新幹線工事のための掘削作業中、土器の出土があった旨の連絡があった。このため、急ぎ現地確認の結果、微高地北端（東京起点431,830km）より北約15m、南約9m地点に土器出土がみられ、これは新幹線工事の掘削（南北約24m、東西約9m）の南端部分に当たっていることが確認された。幸いにも新幹線工事の掘削による破壊はほとんどなく、現状保存がよくなされたままであったことから、4月からの本調査にスムーズに入ることができた。

以上の経過の中で、本調査までの間は、特にAブロック旧河道の調査方法について盛岡工務局、業者（大木建設）県教委の間で協議がなされ、最終的には、法面をもたせた中での掘下げをすることになった。なお、土捨てについても、新幹線工事のために既に掘り下げていた北部分を利用することにした。

期間中、特に雨期においては調査にかなりの悪影響を及ぼした。前述したように、周囲が水田地帯ということもあったため、法面の崩れを招き易く、グリッド内は水浸状態となり、その回復のため多くの時間を費やさねばならなかった（写真図版22-3）。

3 調査時における安全の確保

本遺跡の中でもAブロックは旧河道における調査のため、現地表より約3mも掘り下げたグリッドになる。このため、調査時の安全については特に留意する必要があった。低位置からの土運搬のために大型発電機によるベルトコンベアーの使用、狭い範囲での器材、器具の使用、高くなった土層観察用ベルト、矢板を渡しての通路など各面での危険性が多くあり、互いに注意し合う

中での調査になった。特に降雨時には、グリッド内が満水となり、地盤が柔らかくなっているなど、安全管理の面で苦心が多かった。

調査は昭和49年4月8日から同年8月8日までの4ヶ月間にわたった。

落合Ⅱ遺跡の発掘調査および整理、報告書作成にあたって次の方々、および関係機関から多くのご指導とご助言をたまわった。記して感謝の意を表したい。(順不同・敬称略)

灰軸陶器鑑定・橋崎彰一(名古屋大学文学部教授)

墨書(筆跡鑑定)・黒田正典(岩手大学人文社会科学部教授)

墨書(書風指導)・中島廣治(國學院大学文学部教授)

木製品(全般指導)・木下 忠(文化庁文化財調査官)

骨片鑑定・兼松重任(岩手大学農学部獣医学科家畜解剖学助教授)

動物遺体(貝)鑑定・千葉蘭児(日本貝類学会会員)

植物遺体(種子)鑑定・村井三郎(農林水産省林業試験場東北支場)

地形・地質・佐嶋與四右衛門(元建設省岩手工事事務所)

漆の鑑定・(岩手県工業試験場)

樹種の鑑定・(元興寺文化財研究所)

” ・吉田栄一(岩手大学農学部木材化学教室教授)

¹⁴C年代測定(バリノ・サーヴェイ社)

木簡赤外線写真撮影・岩手県警・鑑識課

” ・宮城県多賀城跡調査研究所

なお、木簡に関する積文および考察は、宮城県多賀城跡調査研究所技師・平川 南氏にお願いしたものである。謝意を申し述べたい。

Ⅲ 調査の結果

以上の方法、経過によって調査した結果、落合Ⅱ遺跡についてつぎのようなことが判明した。

1 本遺跡の基本層序

本遺跡では、旧河道内における堆積土の状況と、微高地面の基本層序を明らかにするために、調査区内の3地点(A D 50-A I 50グリッド、B C 50グリッド、F I 50グリッド)において断面観察を行った。その結果は第3-②図、第3-③図に示したとおりである。なお、A A 50グリッド(東京起点 431.860 km)内においては、国鉄・盛岡工事局による土質ボーリング調査(昭和47・川崎地質株式会社作成)があるので、その結果も合わせて第3-①図に示した。

(1) Aブロック・旧河道内の堆積層(第4図・写真図版3)

—A D 50~A I 50グリッド土層断面(西面)—

I 層：灰黄褐色(10 Y R 5/6)土。シルト。水田耕作土。層厚10~15cm。

II a 層：褐色(7.5 Y R 5/6)土。シルト。粘性がある。酸化土で、マンガン斑がみられる。層厚50cm±10cm。

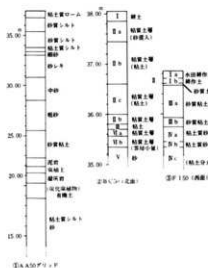
II b 層：灰色(10 Y 5/6)土。シルト。粘性が強く、一部グライ化している。植物痕が多く含まれる。層厚約15cm。

III a 層：オリーブ黒色(5 Y 5/6)土。砂質シルト。植物痕など多量に堆積して、やや黒味がかかった層になっている。炭化粒が混入する。層厚約10cm。

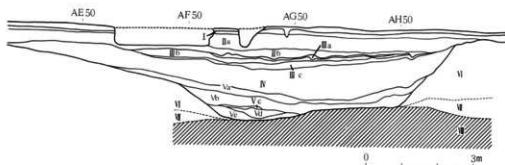
III b 層：黒褐色(2.5 Y R 5/6)土。泥炭質土。植物遺体が原形のまま部分的に遺存する。層厚約10cm。

III c 層：黒色(5 Y R 5/6)土。泥炭質土。腐植、又はそれ以前の植物遺体を多く含む。アシ、ヨシ、その他の樹皮、幹片、種実等も出土する。泥地等特有の臭気があり、層全体が柔らかく、弾力性がある。層厚約15cm。

IV 層：灰色(5 Y R 5/6)土。粘土質シルト層。粘性があり、層全体が柔らかい。III c 層の泥炭質土も混じり、樹皮は、幹片、種実などのほか、土器、木器、加工木など、本遺跡出土遺物の大半がこのIV層からのものである。層厚は土層観察面南側で約1m、中央部で約60cmになる。



第3図 基本土層柱状図



第4図 旧河道跡堆積層断面図

Va 層：にぶい赤褐色（5 Y R 4/5）土。泥炭質土。木質部だけの堆積で、弾力性がある。表面は変色しやすく、すぐ黒褐色（5 Y R 4/5）土を呈する。木質部が細片となって、モサモサした感じである。砂を少量含む。木片等は水分を多く含む。層厚約20cm。

Vb 層：褐色（7.5 Y R 4/5）土。泥炭質土。木質部がシルト質粘土、細砂と混じり合った層。木幹、木枝などを多く含むが、かなりもろくなっている。層厚約40cm。

Vc 層：黄灰色（2.5 Y 4/5）土。シルト質粘土層。わずかに木枝等を含む。木葉の堆積も認められる。層厚約10cm。

Vd 層：灰黄褐色（10 Y R 4/5）土。木質部とシルト質の粘土層と混じり合った層。木根、木片が折れたりしながらも、ほぼ原形で含まれる。層厚約20cm。

Ve 層：黄灰色（2.5 Y 4/5）土。Vc と同じシルト質粘土で構成される。木皮の細片も多くみられる。灰色（5 Y 4/5）土に変化しやすい。層厚約15～20cm。

VI 層：暗緑灰色（10 G Y 4/5）土。粘土質シルト。木片、土器などは含まれない。

VII 層：暗青灰色（10 B G 4/5）土。細砂層。

VIII 層：礫層。こぶし大の礫が入る。

(2) Bブロック以南（微高地）

— B C 50 グリッド — (第3図②)

I 層：暗オリーブ褐色（2.5 Y 4/5）土。砂まじりで草根を混じる。

II a 層：オリーブ褐色（2.5 Y 4/5）土。I より砂の混入多い。

II b 層：褐色（10 Y R 4/5）土。粘性土。砂の混入はほとんどない。

II c 層：オリーブ褐色（2.5 Y 4/5）土。粘性土。粘土の脈が不規則に入る。

II d 層：にぶい黄褐色（10 Y R 4/5）土。粘土。シルト少量を含む。

III 層：褐色（10 Y R 4/5）土。雲母少量を混入する。

IV a 層：暗オリーブ褐色（2.5 Y 4/5）土。粘土。雲母、シルトを少量含む。

IV b 層：黄褐色（2.5 Y 4/5）土。粘土。

— 落合Ⅱ遺跡 —

V 層：オリーブ黒色（7.5 Y $\frac{5}{2}$ ）土。砂。雲母少片。

— F I 50 グリッド —（第3図③）

I a 層：暗褐色土。水田耕作土。

I b 層：I a 層と同質。酸化層

II 層：にぶい赤褐色（5 Y R $\frac{4}{6}$ ）土。砂質土。

III a 層：オリーブ黒（10 Y $\frac{3}{4}$ ）土。植生痕あり。粘土を若干含む砂質粘土層。

III b 層：灰オリーブ色（5 Y $\frac{5}{6}$ ）土。III a 層より粘土多く含む。

IV a 層：にぶい黄褐色（10 Y R $\frac{6}{6}$ ）土。粘土を含む砂層。水分多く、植生痕ある。

IV b 層：にぶい黄褐色（10 Y R $\frac{6}{6}$ ）土。粘土をかなり多く含む砂層。

IV c 層：にぶい黄褐色（10 Y R $\frac{6}{6}$ ）土。

2 発見された遺構と遺物

〔1〕平安時代の遺構と出土遺物

調査の結果、Aブロックの旧河道堆積層から平安時代の土師器、須恵器、灰釉陶器、土製品、木製品（一部加工の木片も含む）、鉄製品、動・植物遺体、木簡など多量の遺物のほか、自然木なども出土した。またBブロックからは竪穴住居跡1棟が検出された。Bブロック以南からは土師器、須恵器の遺物も出土した。

（1）Aブロック（旧河道内）の遺物堆積層と出土遺物

・遺物出土状況（第5・6・7・8図、写真図版4～19）

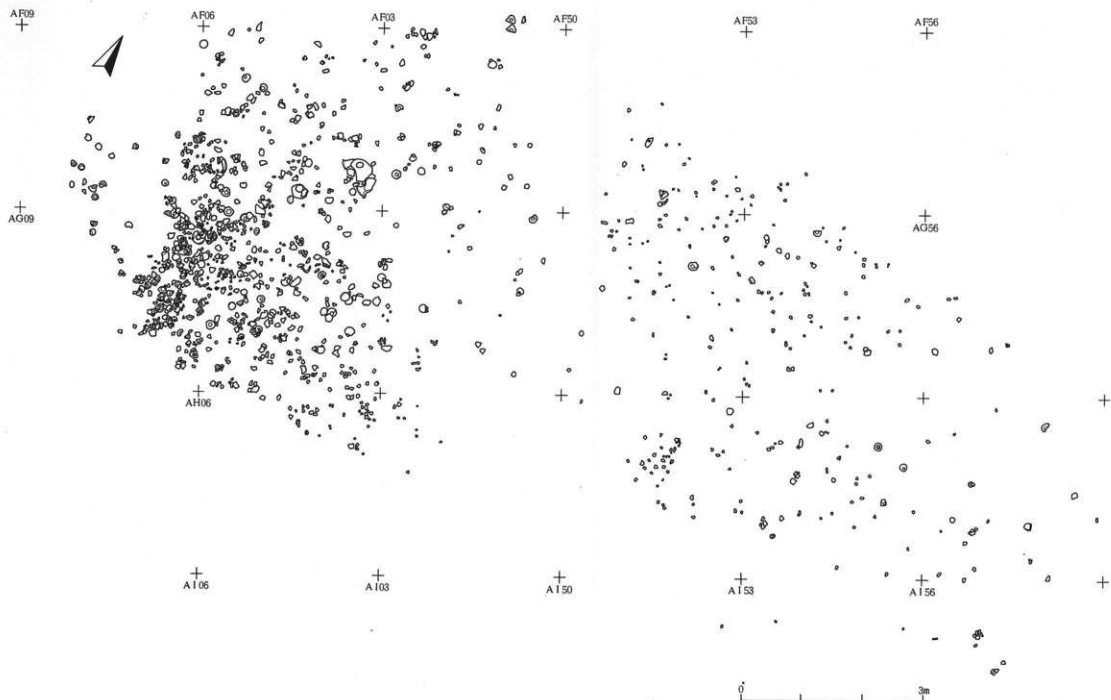
Bブロック以南の微高地は、ほぼ標高38mの平坦地であるが、この微高地の北縁部は約60cm低い水田に利用されている。遺物はこの水田面下の旧河道堆積層中から出土したものである。

旧河道は現水田面から約20cm掘り下げた第II a層に幅約12.5mで東西に検出された。前述したように遺物は当初、新幹線工事の掘削の際に一部発見され、その後、本遺跡の範囲を微高地北の水田面まで広げ本調査を実施したものである。したがって、旧河道内の堆積層の一部は既に消滅していたのであるが、幸いにもその範囲は旧河道の一部だけであったため、遺物包含層は極めて良好な状態で保存されていた。このように既に遺物包含層の位置が判明していたことから、調査はある程度見通しをもって進めることができた。

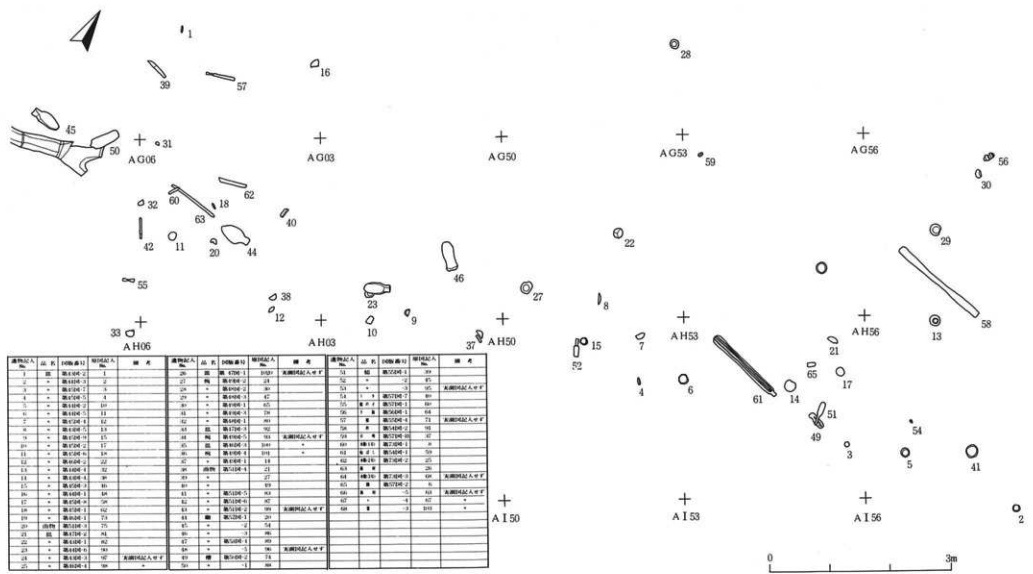
この堆積層における遺物全般の出土状況は第5・6・7図のようである。

遺物は自然木と共に流路一面に分布しているが、遺物による分布状況には若干の違いがある。

まず、平面的な位置での出土状況を見るとAG 06グリッド付近が特に密な出土状況であり、その周辺に多くの遺物が分布していることがわかる。特に土器（第5図）のようにAG 06、AG 09付近に多く分布し、木製品（第6・7図）は流路に一律に出土している。しかし土器の器種による分布の違いは見られない。遺物の大半は破損しており、同一地点に接合可能の、いわゆる同一個体の土器片がまとまって出土しているものもあるが、多くは小片に分かれて出土する。中には



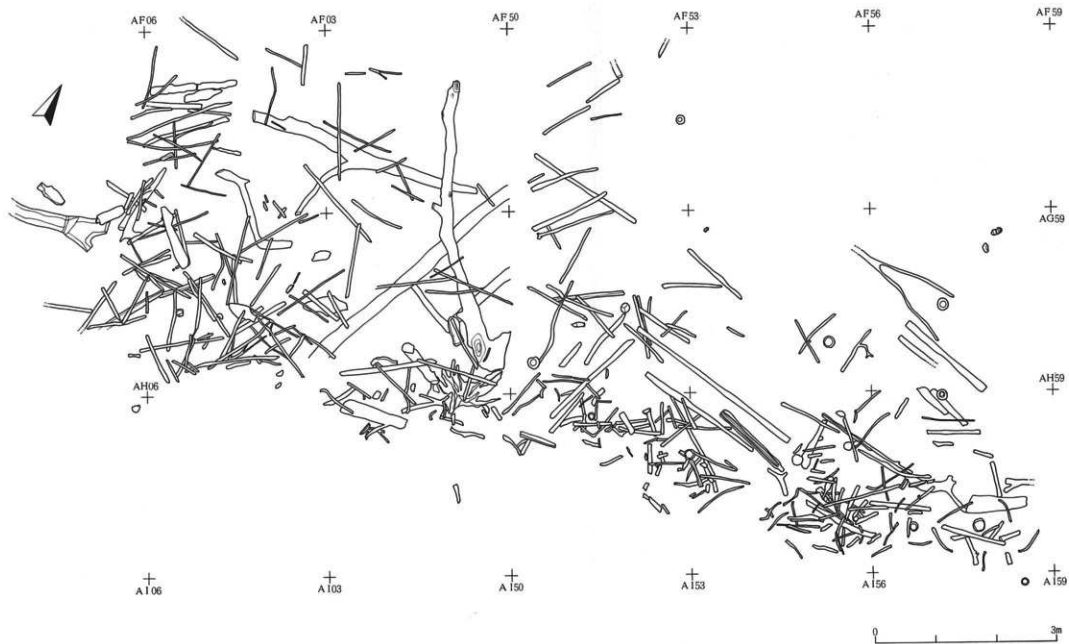
第5図 Aブロック遺物（土器）出土状況図



発掘品 No.	品名	発掘品 No.	品名	発掘品 No.	品名	発掘品 No.	品名	発掘品 No.	品名	発掘品 No.	品名	発掘品 No.	品名
1	木製土器	1	木製土器	21	木製土器	21	木製土器	31	木製土器	41	木製土器	51	木製土器
2	木製土器	2	木製土器	22	木製土器	22	木製土器	32	木製土器	42	木製土器	52	木製土器
3	木製土器	3	木製土器	23	木製土器	23	木製土器	33	木製土器	43	木製土器	53	木製土器
4	木製土器	4	木製土器	24	木製土器	24	木製土器	34	木製土器	44	木製土器	54	木製土器
5	木製土器	5	木製土器	25	木製土器	25	木製土器	35	木製土器	45	木製土器	55	木製土器
6	木製土器	6	木製土器	26	木製土器	26	木製土器	36	木製土器	46	木製土器	56	木製土器
7	木製土器	7	木製土器	27	木製土器	27	木製土器	37	木製土器	47	木製土器	57	木製土器
8	木製土器	8	木製土器	28	木製土器	28	木製土器	38	木製土器	48	木製土器	58	木製土器
9	木製土器	9	木製土器	29	木製土器	29	木製土器	39	木製土器	49	木製土器	59	木製土器
10	木製土器	10	木製土器	30	木製土器	30	木製土器	40	木製土器	50	木製土器		
11	木製土器	11	木製土器	31	木製土器	31	木製土器	41	木製土器				
12	木製土器	12	木製土器	32	木製土器	32	木製土器	42	木製土器				
13	木製土器	13	木製土器	33	木製土器	33	木製土器	43	木製土器				
14	木製土器	14	木製土器	34	木製土器	34	木製土器	44	木製土器				
15	木製土器	15	木製土器	35	木製土器	35	木製土器	45	木製土器				
16	木製土器	16	木製土器	36	木製土器	36	木製土器	46	木製土器				
17	木製土器	17	木製土器	37	木製土器	37	木製土器	47	木製土器				
18	木製土器	18	木製土器	38	木製土器	38	木製土器	48	木製土器				
19	木製土器	19	木製土器	39	木製土器	39	木製土器	49	木製土器				
20	木製土器	20	木製土器	40	木製土器	40	木製土器	50	木製土器				
21	木製土器	21	木製土器	41	木製土器	41	木製土器						
22	木製土器	22	木製土器	42	木製土器	42	木製土器						
23	木製土器	23	木製土器	43	木製土器	43	木製土器						
24	木製土器	24	木製土器	44	木製土器	44	木製土器						
25	木製土器	25	木製土器	45	木製土器	45	木製土器						
26	木製土器	26	木製土器	46	木製土器	46	木製土器						
27	木製土器	27	木製土器	47	木製土器	47	木製土器						
28	木製土器	28	木製土器	48	木製土器	48	木製土器						
29	木製土器	29	木製土器	49	木製土器	49	木製土器						
30	木製土器	30	木製土器	50	木製土器	50	木製土器						
31	木製土器	31	木製土器										
32	木製土器	32	木製土器										
33	木製土器	33	木製土器										
34	木製土器	34	木製土器										
35	木製土器	35	木製土器										
36	木製土器	36	木製土器										
37	木製土器	37	木製土器										
38	木製土器	38	木製土器										
39	木製土器	39	木製土器										
40	木製土器	40	木製土器										
41	木製土器	41	木製土器										
42	木製土器	42	木製土器										
43	木製土器	43	木製土器										
44	木製土器	44	木製土器										
45	木製土器	45	木製土器										
46	木製土器	46	木製土器										
47	木製土器	47	木製土器										
48	木製土器	48	木製土器										
49	木製土器	49	木製土器										
50	木製土器	50	木製土器										
51	木製土器	51	木製土器										
52	木製土器	52	木製土器										
53	木製土器	53	木製土器										
54	木製土器	54	木製土器										
55	木製土器	55	木製土器										
56	木製土器	56	木製土器										
57	木製土器	57	木製土器										
58	木製土器	58	木製土器										
59	木製土器	59	木製土器										
60	木製土器	60	木製土器										
61	木製土器	61	木製土器										
62	木製土器	62	木製土器										

出土木製品

第6図 Aブロック遺物(木製品)出土状況図



第7図 Aブロック遺物（木製品、流木）出土状況図

3グリッドに分かれているものもある（出土土器観察表参照）。土器の中には、器内にアシなどの湿地性の植物遺体が入りこんでいるものもあり、旧地形をうかがうことができる。木製品は前述したようにある地点から特に多く出土したりすることはない。しかし、同時に出土した枝木の間に引っかかる状態になっているものもある。出土遺物全般で見ると、倒立したものの、重なり合ったものなどあり、意図的な分布状況は示していない。

次に出土状況を断面的に見てみると第8図のようである。遺物は観察面に対して傾きをもって出土する。この出土層は第Ⅳ層（粘土質シルト層で泥炭質土層も多く含まれる）で、遺物はⅣ層の中間に最も多く包含している。特にAHグリッドにあっては南地点から北地点（流路の左岸—右岸）に向かって厚い包含層があり、流路底部に向けて傾きをもつ状態になっている。土器等は反転した状態のもの、倒立した状態になっているもの等あり、様様ではない。また、器種別による層位的な出土の違いも見られない。なお、Ⅲ層からも若干の土器片（坏BⅠ、BⅡ）が出土した。

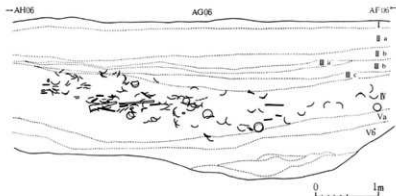
・出土遺物

旧河道堆積層から出土した遺物は次のとおりである。なお、各遺物の器種、出土数は遺物説明の項で取上げる。

出土遺物は土器、灰軸陶器、瓦片、木製品、曲物、木筒、鉄製品、土製品、動、植物遺体、端部加工木等である。以下、各遺物について記述する。

<土器>

旧河道堆積土中から出土した土器は、一般に土師器、須恵器と呼ばれているもののほか弥生土器（高坏の脚部で、谷起鳥式のものである。写真図版43—16）などがある。しかし、土器の大半は土師器、須恵器であり、その器種はロクロ使用による坏類である。以下、出土土器を分類し、その特徴を記してみる。なお、灰軸陶器については後述することとする。



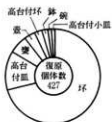
第8図 Aブロック遺物出土状況断面図

第1表 土器分類基準表

分類項目 器種	ロクロ使用の有無	焼成・外面調整	底部 切り離し痕	台部の 接合方法	台部の 器形 類部	外面の再調整		記号化の例
						手法	位置	
環	A ロクロ使用 B ロクロ使用	I 酸化炎焼成（ヘラミガキ黒色処理） II 還元炎焼成 III 酸化炎焼成（非黒色処理）	a 回転糸切り、無調整 b 回転糸切り、再調整 c 不明、再調整			W、回転ヘラミガキ H、手持ちヘラミガキ P、ヘラミガキ	1 体部下端のみ 2 体部下端と底部周辺 3 体部下端と底部全面 4 底部周辺のみ 5 底部全面のみ	・B I b-W ロクロ使用の環で、器面をヘラミガキ・黒色処理、底部切離しは回転糸切りの後、体部下端と底部周辺を回転ヘラミガキした再調整が施されているもの。 ・W、H 体部下端を回転ヘラミガキ、底部周辺を手持ちヘラミガキした再調整が施されているもの。 ・P（全） 内外全面ヘラミガキが施されているもの。
高台付皿（高台付環高台付鉢高台付小皿も同じ）	環に同じ	環に同じ	a 回転糸切り、底部周辺の一部に接合痕 b 回転糸切り、底部はほぼ全面に接合痕 C 不明、底部全面に接合痕	ア ナデ付け（平滑、渦巻様） イ ヘラでの押し付け（菊花状文様）	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩			
盤（鉢も同じ）	A ロクロ未使用 B ロクロ使用	環に同じ	a 木炭痕 b ヘラケズリ c その他		イ 頸部に段、沈線 ロ 頸部に段、沈線無し	H 手持ちヘラケズリ	1 体部上半部 2 体部下半部 3 底部	・B III b-H ロクロを使用し、酸化炎焼成によるもの。 非内黒であり、底部ヘラケズリが施されているもの。
壺	A ロクロ未使用 B ロクロ使用	II 還元炎焼成 a 調整なし b 調整あり			① 短頸、広口 ② 長頸 ③ 大形、広口			

出土した土器の器種は、坏・高台付坏・碗・高台付皿・高台付小皿・甕・壺・鉢型土器である。いずれの器種名も通常使用されている概念を基準としているが、高台付坏と高台付皿との区別は、体部の器形によって行った。

分類は器種を優先させ、成形・焼成・底部切離し・再調整のそれぞれの技法で分類し、それを記号化して表現するようにした。分類についての基準は第1表に示したとおりである。



第9図
器種別個体数の割合

第2表・器種別個体数

器種	個体数	器種別個体数
		総個体数
坏	300 (個)	71 (%)
高台付坏	14	3
碗	3	1
高台付皿	58	13
高台付小皿	2	1
甕	28	6
壺	16	3
鉢	6	2
計	427	100

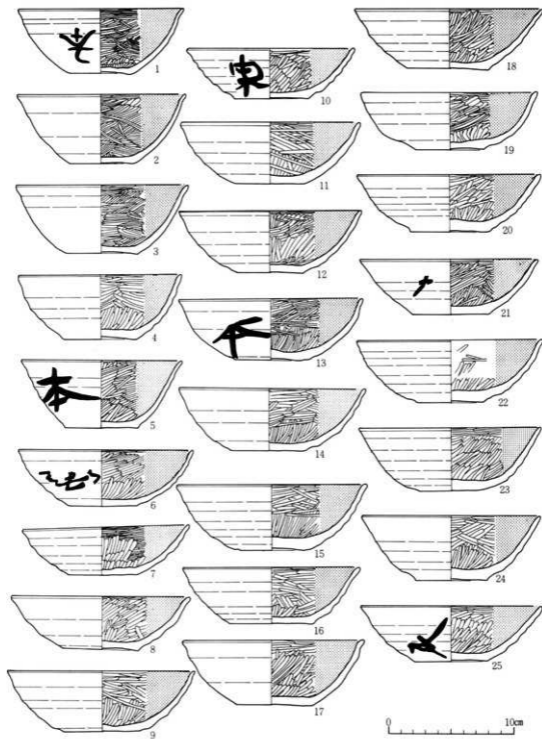
出土土器数(図示したもの)

を器種別にまとめると第2表・第9図のようになる。なお、以下の表・文中の個体数は、完形出土したものと、復元図化できたものだけに限りその個体数として表わした。したがって復元図化できずにいるものについては、これを破片数として第3表にまとめた。出土した土器総個体数は427であ

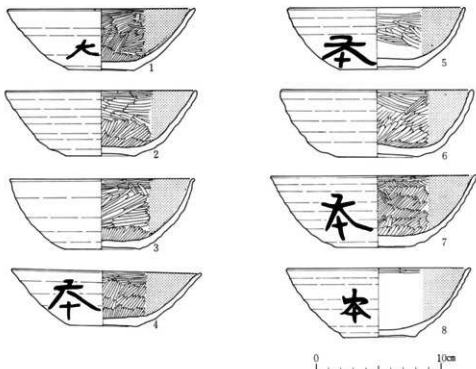
る。このうち、坏は300個体で総個体数の約7割を占める。以下、高台付皿、甕、高台付坏、壺、鉢、碗、高台付小皿の順になる。

第3表 土器破片数

器種	分類	個体数	破片数	器種			
				分類	個体数	破片数	
坏 (底部切離しが判明するもの)	B I a	40	3,630	高台付坏	B I	92	
	B I b	347					
	B I c	77					
	B II a	6	178	甕	ロクロ未使用	6	51
	B II b				ロクロ使用	B I a	1
	B II c		B I b	12			
	B III a	96	309	B III a		24	16
	B III b			B III b	21	173	
	B III c			計	64	255	
	計	566	4,117	壺	B II b		28
					合 計	630	4,492



第10図 土器実測図(坏B1a (1))



第11図 土器実測図 (杯B Ia₍₂₎)

A 杯 (第10～28図、写真図版23～38)

総個体数は300である。以下、焼成別・再調整別の個体数、再調整の手法・位置、形態等について述べ、更に器面付着物についてもふれてみる。

・焼成別の個体数をみると、第4表、第18図のようである。B I・ロクロを使用し、ヘラミガキ後に黒色処理、酸化炎焼成したものが約3/4近くを占め、還元炎焼成のものが1/4である。

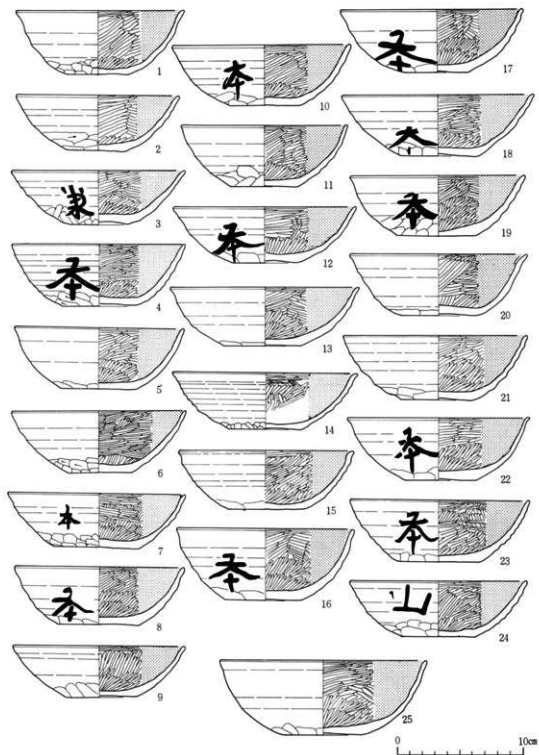
・再調整の個体数を分類別にみると、第5表、第19図のようにB Iの中、約半数が底部全面に手持ちヘラケズリや回転ヘラケズリを施しているものである。また、底部を回転糸切りのあと、一部を手持ちヘラケズリや回転ヘラケズリを施しているものが約1/5を占める。したがって底部を回転糸切り後、全面ないしは一部を手持ちや回転ヘラケズリを施しているものはB Iの中では1/2を占める。

これに対してB IIの還元炎焼成のものは回転糸切り後、再調整を施さないものがほとんどであり、若干のものにケズリ痕がみられるだけである。

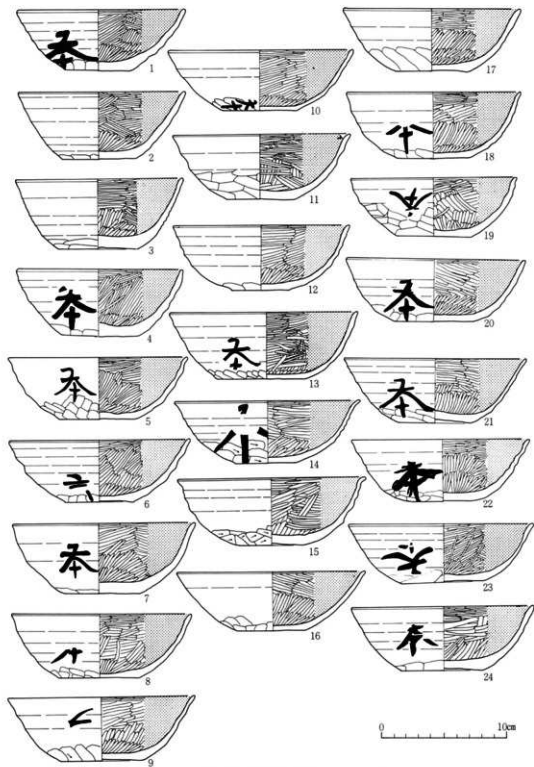
B IIIの内非内黒の酸化炎焼成のものには回転糸切りのみで、調整のないものが多くを占める。

しかし、これらの焼成の違いによる調整は底部のみに限るものではなく、底部の調整と共に体部の調整も施している例が多い。

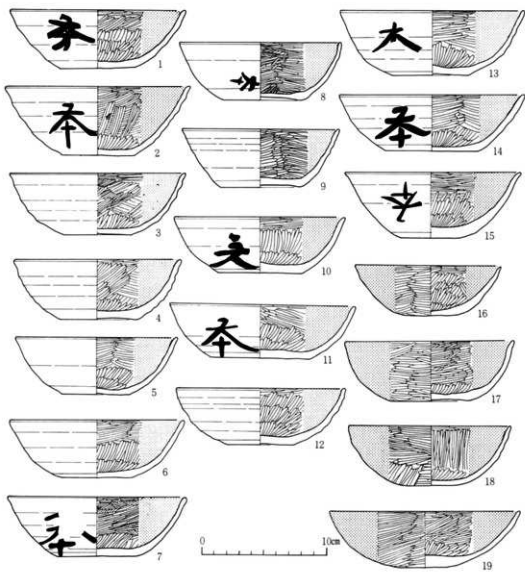
体部の調整は主に下端のみに限られる。B Iにあっては底部の調整がなく、体部下端だけに施すものはB I bのうち約3/4を数える。これは手持ちや回転ヘラケズリによるものである。



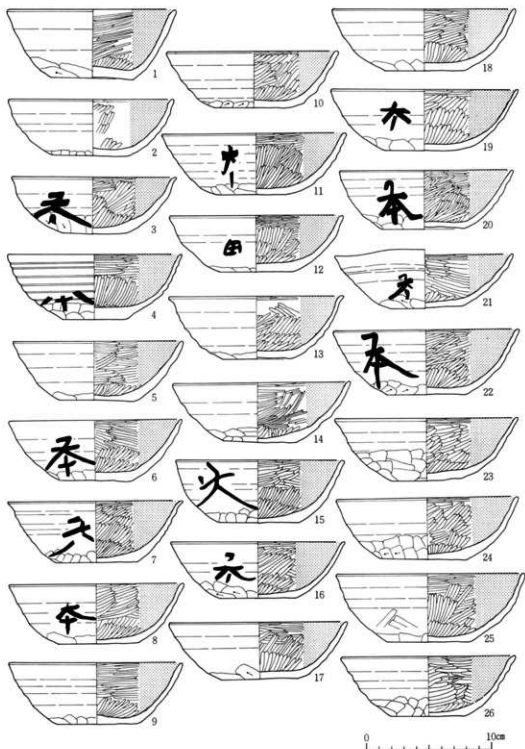
第12図 土器実測図 (坏B I b-H₁)



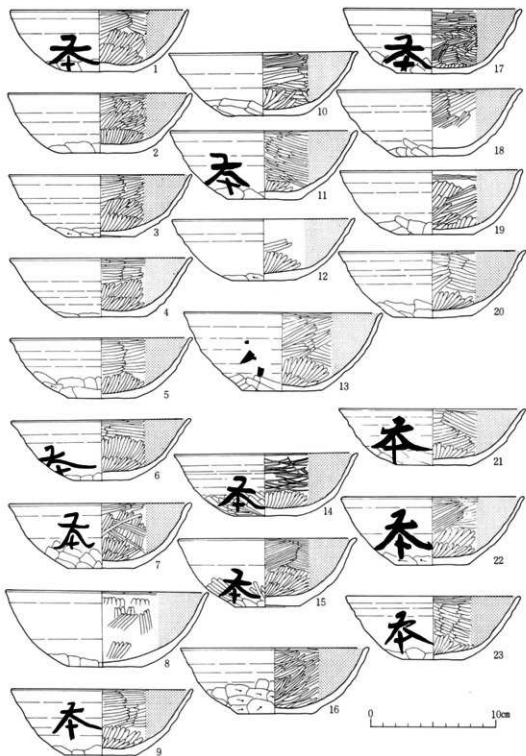
第13図 土器実測図 (坏B1b-H₂)



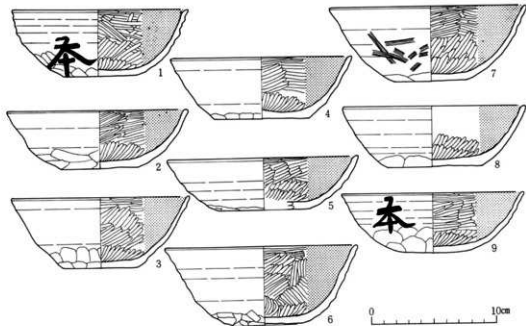
第14图 土器实测图(坏BIb-H₄他)



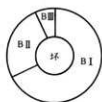
第15図 土器実測図(坏BIc-H₃₍₁₎)



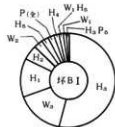
第16図 土器実測図 (坏B1c-H₃₍₂₎)



第17図 土器実測図 (坏BIc-H_{3(a)})



第18図
坏・焼成別の割合



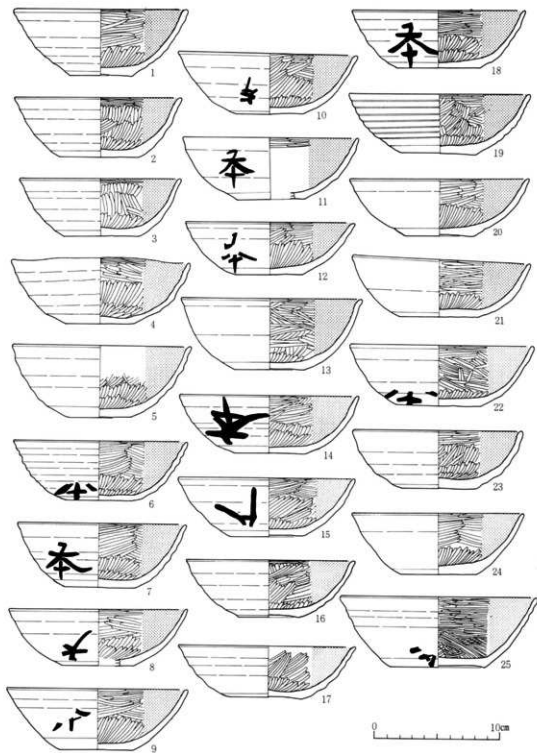
第19図
坏(BⅠ)調整技法の割合

第4表・坏焼成別の個体数

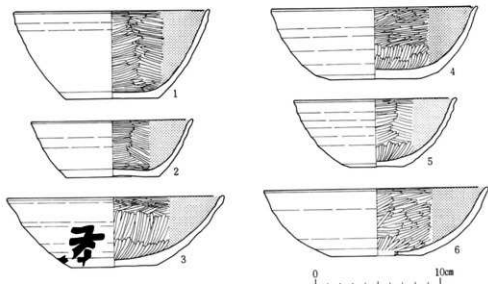
焼成	個体数	焼成別個体数
		坏個体数
BⅠ	203 (個)	68 (%)
BⅡ	75	25
BⅢ	22	7
計	300	100

第5表・坏(BⅠ)調整別個体数

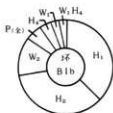
再調整	個体数	再調整別個体数
		坏(再調整)個体数
H ₁	25 (個)	16 (%)
H ₂	24	13
H ₃	59	35
H ₄	4	2
H ₅	6	3
W ₁	2	1
W ₂	9	5
W ₃	31	19
W ₄ H ₄	2	1
W ₅ H ₅	4	2
H ₅ P ₀	2	1
P(全)	5	2
計	174	100



第20図 土器実測図(环B1c-Wa。)



第21図 土器実測図 (坏BIc-W_{3(p)})



第22図
環分類調整技法の割合(2)

第6表・環分類(調整技法)個体数(1)

再調整	個体数	再調整別個体数 杯(B1b)個体総数
H ₁	25 (個)	37 (%)
H ₂	24	35
H ₃	3	4
W ₁	2	3
W ₂	8	12
W ₁ H ₂	2	3
P (全)	4	6
計	68	100

再調整の手法についてみる。

第6表、第22図に示したように、体部下端、底部等に調整がある坏174個体についてみると、その%は手持ちヘラケズリによっていることである。回転ヘラケズリは%に過ぎない。しかも、手持ちヘラケズリによるものは体部下端と底部全面に施される

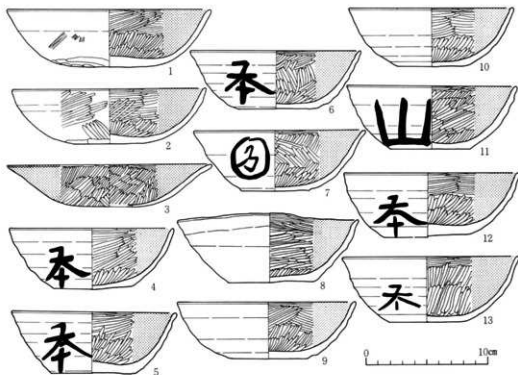
ことが多い。

分類別の再調整手法と位置

B1aの33個体を除くもの、すなわち環のうち、再調整が施されたものを分類別にみでみる。

・B1b (第24図・第7表)

B1bにあっては、調整の位置は体部下端のみのものと、体部下端と底部全面(周辺)に手持ちヘラケズリしているものがそれぞれ%ずつを占め、全体の%になる。これに対してB1cにおいては、調整の位置は体部下端・底部全面のもの、底部全面のみのものがあり、前者のものが後者の約2倍占める。しかも再調整を持つ環の%近くなる。手法的には手持ちヘラケズリが回

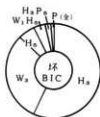


第23図 土器実測図 (坏B1c-H₃・P₃他)

転ヘラケズリの約2倍である。以上のことから、手持ちヘラケズリを施すものはB1cに多く、しかも体部下端と底部全面に施す例が多いことがわかる。

焼成別における出土数でも述べたように、B1のクロ使用によるヘラミガキ・黒色処理を施したものが坏のうちの3%を占める。

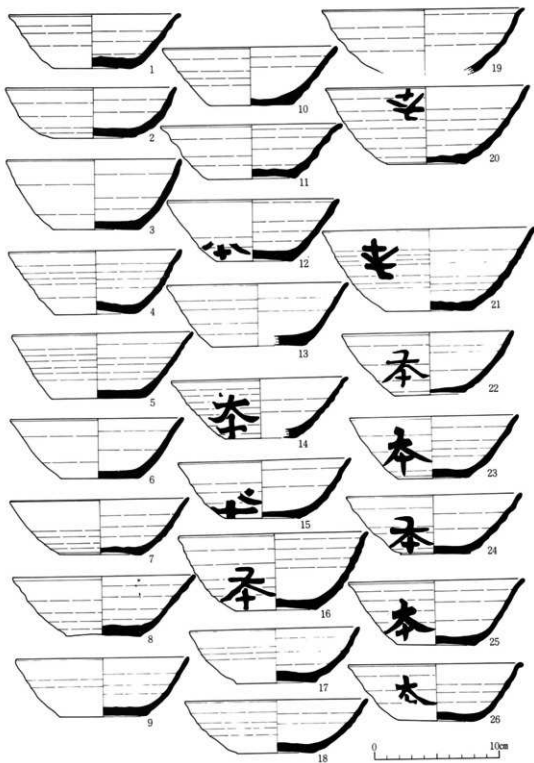
ヘラミガキはかなり密に施され、その方向は口縁部で横、体部で斜行、底部で放射状を呈するものがほとんどである。ヘラミガキを施す順序は種々あるが、全般的な傾向としては口縁→体部→底部のようである。また、ミガキに使用したものの先端は幅1.5～2.0mmのものが多く、第10図1 (B1a・Na1) や第14図8 (B1b-W₂・Na1) のようになんかなり細かい先端で密なヘラミガキをしている例もある。



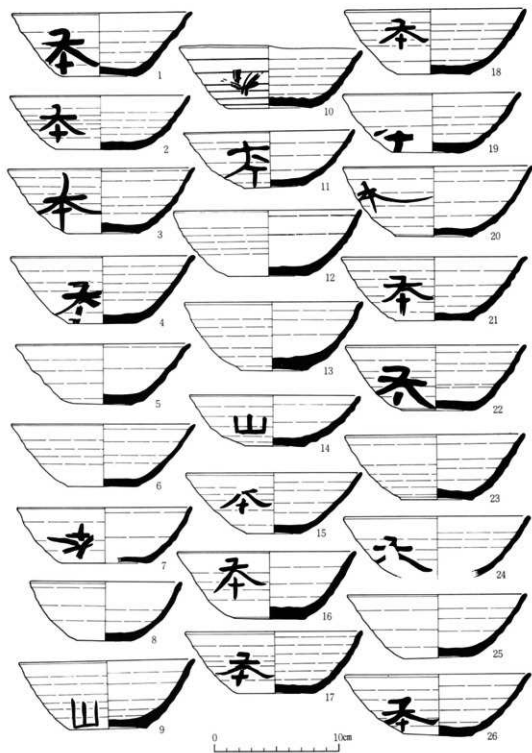
第24図 坏分類別(調整技法)の割合(2)

第7表・坏分類別(調整技法)個体数(2)

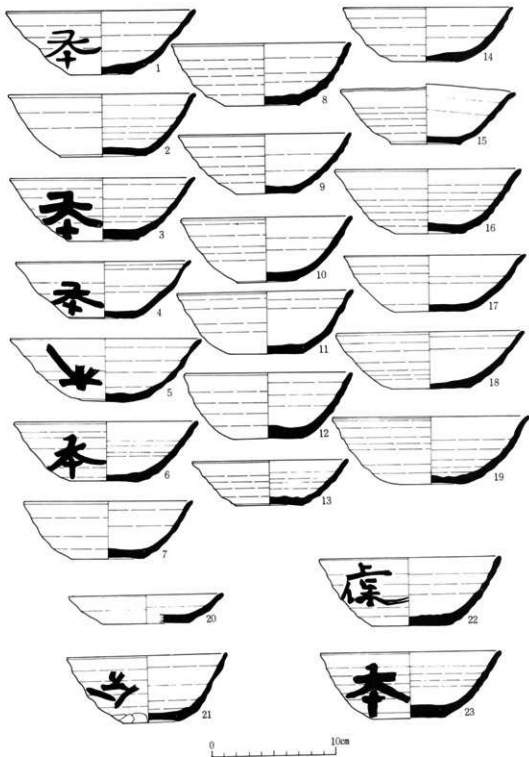
再調整	個体数	再調整別個体数 坏(B1c) 個体数
H ₃	58 (個)	57 (%)
H ₃	6	6
W ₃	31	30
W ₃ H ₃	4	4
H ₃ P ₃	2	2
P (全)	1	1
計	102	100



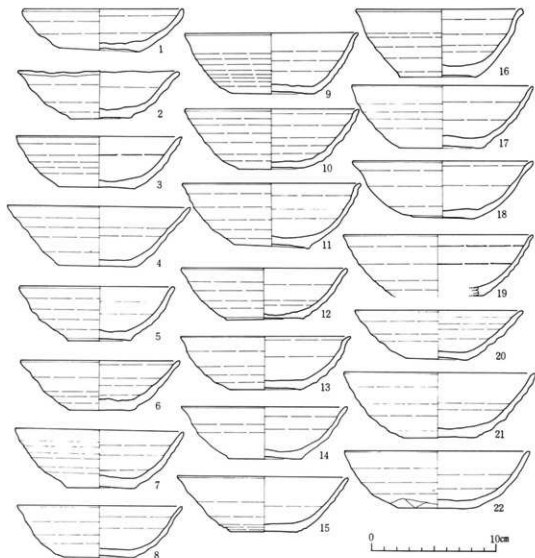
第25圖 土器実測図(坏BⅡa (1))



第26图 土器实测图 (坏B II a (2))



第27图 土器实测图 (坏BⅡa(3)·BⅡb-H₁他)



第28図 土器実測図 (坏BⅢ a、BⅢ c-H_a)

第8表 出土土器(坏)観察表(1)

(外面調整は分類記号で表示した)

発掘 層位	調査 年度	位置	計測値 (cm)			土質 分類	出土層位 の深さ (cm)	観察対象	外面調整			土質 調整	土質 調整	土質 調整	土質 調整	土質 調整	土質 調整	土質 調整	
			口 径	底 径	高 さ				口 縁	底 縁	側 縁								
1	1951	10-1	13.3	5.3	4.8	30.8	AF2.9	4.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	赤 土	127A
2	5	3	13.5	5.1	5.5	37.6	AG2.4	4.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	赤 土	128
3	3	3	13.6	5.5	5.6	39.3	AF2.8	3.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	赤 土	127B
4	4	4	13.5	5.2	5.6	40.1	AF2.9	2.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	赤 土	127C
5	3	5	12.6	5.4	5.6	42.2	AG2.9	3.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	赤 土	127D
6	4	4	14.0	4.9	5.4	32.9	AG2.5	3.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	赤 土	127E
7	7	4	13.4	4.9	5.2	39.9	AG2.4	4.0調整	-	-	-	-	-	-	-	-	-	赤 土	127F
8	4	4	14.3	4.3	4.9	36.1	AG2.5	4.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	赤 土	127G
9	4	7	13.2	4.6	4.1	35.6	AG2.6	4.7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	赤 土	127H
10	10	4	13.4	4.1	4.9	36.4	AF2.3	4.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	赤 土	127I
11	10	4	14.4	4.9	5.4	34.9	AG2.3	3.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	赤 土	127J
12	10	10	14.2	4.9	5.2	34.4	AG2.3	4.0調整	-	-	-	-	-	-	-	-	-	赤 土	127K
13	10	11	14.7	4.9	5.4	33.3	AG2.4	2.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	赤 土	127L
14	10	11	14.0	5.1	5.6	34.2	AG2.4	3.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	赤 土	127M
15	10	12	13.0	5.3	5.6	33.9	AG2.4	3.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	赤 土	127N
16	10	12	14.2	5.5	5.5	40.4	AG2.3	3.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	赤 土	127O
17	12	14	14.9	5.3	4.6	36.3	AG2.4	4.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	赤 土	127P
18	10	11	15.1	4.9	4.5	33.3	AG2.4	3.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	赤 土	127Q
19	10	2	14.1	5.4	4.4	36.3	AG2.4	4.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	赤 土	127R
20	10	3	14.4	4.9	4.4	34.4	AG2.4	3.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	赤 土	127S
21	10	4	14.4	4.5	4.6	33.9	AG2.4	4.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	赤 土	127T
22	10	5	14.2	5.2	4.2	34.4	AG2.4	3.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	赤 土	127U
23	10	4	14.4	5.1	4.9	34.4	AG2.4	4.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	赤 土	127V
24	10	4	14.0	5.2	4.6	35.1	AG2.4	3.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	赤 土	127W
25	10	7	14.5	4.4	5.4	32.6	AG2.3	3.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	赤 土	127X
26	11	1	14.5	4.9	5.4	32.7	AG2.4	3.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	赤 土	127Y
27	2	3	14.2	5.2	5.4	34.3	AG2.4	3.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	赤 土	127Z
28	2	10	14.9	5.4	4.1	37.6	AG2.4	4.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	赤 土	127AA
29	4	11	14.3	4.6	5.5	36.1	AG2.4	3.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	赤 土	127AB
30	3	12	14.3	4.9	4.3	34.2	AG2.4	3.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	赤 土	127AC
31	4	11	14.2	5.4	4.9	36.5	AG2.4	3.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	赤 土	127AD
32	7	12	14.9	5.4	5.4	36.6	AG2.4	3.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	赤 土	127AE
33	4	14	14.9	5.4	4.1	35.9	AG2.4	3.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	赤 土	127AF
34	12	12	15-1	15.1	4.9	4.9	35.6	AG2.4	4.5	-	-	-	-	-	-	-	-	赤 土	127AG
35	2	2	13.1	4.5	4.4	34.4	AG2.4	3.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	赤 土	127AH
36	2	3	14.0	4.4	4.5	32.1	AG2.4	4.4調整	-	-	-	-	-	-	-	-	-	赤 土	127AI
37	4	4	14.0	5.0	5.4	35.7	AG2.4	4.0調整	-	-	-	-	-	-	-	-	-	赤 土	127AJ
38	4	5	14.0	4.9	5.4	36.0	AG2.4	3.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	赤 土	127AK
39	4	4	14.0	5.0	5.1	36.3	AG2.4	2.9	-	-	-	-	-	-	-	-	-	赤 土	127AL
40	7	7	14.0	4.3	4.1	34.7	AF2.4	3.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	赤 土	127AM
41	4	4	13.8	4.4	4.4	36.3	AG2.4	3.9	-	-	-	-	-	-	-	-	-	赤 土	127AN
42	4	4	13.8	4.1	5.4	34.7	AG2.4	4.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	赤 土	127AO
43	10	4	14.4	4.9	5.4	34.9	AG2.4	4.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	赤 土	127AP
44	10	11	14.4	4.9	5.2	36.0	AF2.4	3.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	赤 土	127AQ

第9表 出土土器(坏)観察表(2)

(外面調整は分類記号で表示した)

発掘年度 調査区画	土器 番号	形状	口径(φ)		底径(φ)	高さ	容量 (リットル)	出土位置 (層位)	土質	内面調整		外面調整	土器 分類	数量	保存 状況	図録 掲載		
			口縁	口内						口縁	口内							
42	12-12-10	群15-1	14.8	4.0	5.5	38.4	AGD9	法政院	群15-1	群15-1	群15-1	群15-1	法政院	1	本	①	38	
43	12	-	13.2	4.7	5.1	32.9	AFD7	7.00	-	群15-1	-	-	法政院	1	本		40	
47	14	-	14.0	4.8	5.7	38.4	AFD6	法政院	-	-	-	-	法政院	1	本		39	
48	15	-	14.8	4.7	6.2	33.5	AGD6	1.2	-	群15-1	法政院	法政院	法政院	1	本		41	
49	16	-	14.7	5.0	5.8	40.3	AGD5	3.00	-	群15-1	-	-	法政院	1	本	⑫	108	
50	17	14	-	14.8	5.0	5.1	38.3	AFD9	法政院	-	-	-	法政院	1	本	⑬	39	
51	18	1-1	-	13.4	4.9	6.7	32.8	AGD3	4.0	-	群15-1	-	-	法政院	1	本	⑭	112
52	14	-	14.1	4.8	6.0	34.5	AGD8	法政院	-	-	-	-	法政院	1	本	⑮	107	
53	20	3	-	14.2	4.9	6.0	34.3	AGD6	4.5	-	群15-1	-	-	法政院	1	本	⑯	109
54	21	3	-	14.7	5.2	5.4	34.4	AGD6	3.0	-	群15-1	-	-	法政院	1	本		106
55	22	4	-	14.6	5.0	5.6	38.3	AGD9	法政院	-	群15-1	-	-	法政院	1	本	⑰	108
56	23	3	-	14.4	5.0	6.1	36.7	AGD9	3.0	-	群15-1	-	-	法政院	1	本	⑱	108
57	24	4	-	14.7	4.8	5.8	37.7	AGD6	法政院	-	-	法政院	法政院	1	本	⑲	97	
58	25	3	-	14.5	4.9	6.0	38.1	AGD9	3.0	-	-	-	法政院	1	本		107	
59	31	1	群15-1	14.5	4.8	5.4	36.1	AGD9	4.5	-	-	-	法政院	1	本	⑳	108	
60	3	3	-	13.8	5.4	6.0	40.7	AGD9	7.00	-	群15-1	-	-	法政院	1	本	㉑	108
61	3	10	-	13.3	5.4	5.4	41.5	AGD6	5.5	-	群15-1	-	-	法政院	1	本		106
62	4	11	-	13.4	5.4	5.7	40.3	AFD7	7.00	-	群15-1	-	-	法政院	1	本	㉒	108
63	5	11	-	14.3	5.0	6.0	39.3	AGD2	法政院	-	-	-	法政院	1	本	㉓	108	
64	6	11	-	14.7	5.0	5.4	38.0	AGD9	7.00	-	群15-1	-	-	法政院	1	本	㉔	108
65	5	11	-	14.7	5.4	6.0	38.1	AFD3	法政院	-	群15-1	-	-	法政院	1	本	㉕	108
66	8	-	14.3	5.1	6.7	33.8	AFD4	4.5	-	群15-1	-	-	法政院	1	本	㉖	77	
67	9	27-1	群15-1	14.3	5.1	6.4	38.0	AGD9	1.2	-	群15-1	-	-	法政院	1	本	㉗	108
68	10	3	-	14.0	4.8	5.8	37.7	AGD6	4.5	-	群15-1	-	-	法政院	1	本	㉘	107
69	11	3	-	14.3	5.1	5.7	37.1	AGD9	1.0	-	群15-1	-	-	法政院	1	本	㉙	108
70	12	4	-	14.2	5.2	4.8	38.4	AGD9	3.4	-	群15-1	-	-	法政院	1	本		108
71	13	5	-	14.3	5.4	6.1	38.3	AGD9	3.4	-	群15-1	-	-	法政院	1	本	㉚	107
72	14	5	-	14.0	5.3	6.0	38.3	AGD9	1.2	-	群15-1	-	-	法政院	1	本	㉛	108
73	15	7	-	14.3	5.4	5.2	38.3	AGD9	1.5	-	群15-1	-	-	法政院	1	本		108
74	16	8	-	13.7	4.7	5.5	38.3	AFD5	法政院	-	-	-	法政院	1	本		11	
75	17	9	-	14.3	5.1	5.4	38.7	AGD6	法政院	-	群15-1	-	-	法政院	1	本		108
76	18	10	-	14.0	5.4	5.8	38.0	AGD9	3.5	-	群15-1	-	-	法政院	1	本	㉜	108
77	19	11	-	13.4	4.8	6.0	38.3	AGD9	法政院	-	群15-1	-	-	法政院	1	本	㉝	108
78	20	12	-	14.5	5.0	5.3	38.3	AGD9	7.4	-	群15-1	-	-	法政院	1	本	㉞	108
79	21	13	-	14.7	5.2	5.4	38.4	AGD6	3.5	-	群15-1	-	-	法政院	1	本	㉟	108
80	22	-	14.8	4.7	6.0	37.8	AGD9	3.5	-	群15-1	-	-	法政院	1	本	㊱	108	
81	23	14	-	14.8	4.9	6.4	38.4	AGD6	4.5	-	群15-1	-	-	法政院	1	本	㊲	107
82	24	-	14.6	5.2	5.8	38.0	AGD3	4.5	-	群15-1	-	-	法政院	1	本	㊳	108	
83	1-1	群15-1	14.1	4.8	6.2	34.9	AFD5	3.5	-	群15-1	法政院	法政院	法政院	1	本	㊴	108	
84	2	2	-	14.8	5.5	5.8	38.3	AFD5	3.0	-	群15-1	-	-	法政院	1	本	㊵	108
85	3	3	-	14.1	4.9	5.4	38.3	AGD9	4.5	-	群15-1	-	-	法政院	1	本	㊶	108
86	4	4	群15-1	13.4	4.8	5.8	38.9	AGD9	4.00	-	群15-1	-	-	法政院	1	本	㊷	108
87	5	-	群15-1	14.6	4.6	5.4	38.4	AFD5	1.2	-	群15-1	法政院	法政院	法政院	1	本	㊸	108
88	6	6	群15-1	14.1	4.7	6.4	38.9	AGD9	3.0	-	群15-1	群15-1	群15-1	法政院	1	本	㊹	108

第10表 出土土器(坏)観察表(3)

(外面調整は分類記号で表示した)

発見層別 層位	調査区別	出 土 品 名	計 測 値 (mm)			重量(単位) g	出土年次 (推定)	調査方法	外 面 調 整			整 形 名 称	出 産 地	備 考	図 録 頁 数	
			口 径	底 径	高 度				口 縁	底 縁	底 面					
第11-3	第13-3	石13-3a	12.6	8.7	6.8	17.3	AD210	3/4	赤褐色土	刻文	刻文(高)	刻文	刻文(高)	刻文	刻文(高)	刻文(高)
第11-3	第13-3	石13-3b	12.7	8.8	6.8	17.8	AD210	3/4	赤褐色土	刻文	刻文(高)	刻文	刻文(高)	刻文	刻文(高)	刻文(高)
第11-3	第13-3	石13-3c	13.0	8.3	6.9	16.7	AD210	3/4	赤褐色土	刻文	刻文(高)	刻文	刻文(高)	刻文	刻文(高)	刻文(高)
第11-3	第13-3	石13-3d	13.5	8.9	6.9	18.1	AD210	3/4	赤褐色土	刻文	刻文(高)	刻文	刻文(高)	刻文	刻文(高)	刻文(高)
第11-3	第13-3	石13-3e	14.6	9.2	6.4	16.1	AD210	3/4	赤褐色土	刻文	刻文(高)	刻文	刻文(高)	刻文	刻文(高)	刻文(高)
第11-3	第13-3	石13-3f	15.5	8.9	7.3	16.9	AD210	3/4	赤褐色土	刻文	刻文(高)	刻文	刻文(高)	刻文	刻文(高)	刻文(高)
第11-3	第13-3	石13-3g	16.2	9.9	6.6	17.2	AD210	6/5	赤褐色土	刻文	刻文(高)	刻文	刻文(高)	刻文	刻文(高)	刻文(高)
第11-3	第13-3	石13-3h	16.8	8.8	5.8	16.9	AD210	3/5	赤褐色土	刻文	刻文(高)	刻文	刻文(高)	刻文	刻文(高)	刻文(高)
第11-7	第13-7	石13-7a	16.4	9.9	6.9	16.0	AD210	3/4	赤褐色土	刻文	刻文(高)	刻文	刻文(高)	刻文	刻文(高)	刻文(高)
第11-10	第13-10	石13-10a	11.7	8.1	3.4	14.2	AD210	6/5	赤褐色土	刻文	刻文(高)	刻文	刻文(高)	刻文	刻文(高)	刻文(高)
第11-10	第13-10	石13-10b	13.8	8.8	6.0	16.3	AD210	6/5	赤褐色土	刻文	刻文(高)	刻文	刻文(高)	刻文	刻文(高)	刻文(高)
第11-10	第13-10	石13-10c	14.1	8.8	3.9	16.8	AD210	6/5	赤褐色土	刻文	刻文(高)	刻文	刻文(高)	刻文	刻文(高)	刻文(高)
第11-10	第13-10	石13-10d	15.2	8.3	3.8	16.6	AD210	6/5	赤褐色土	刻文	刻文(高)	刻文	刻文(高)	刻文	刻文(高)	刻文(高)
第11-10	第13-10	石13-10e	15.6	9.5	6.5	16.4	AD210	6/5	赤褐色土	刻文	刻文(高)	刻文	刻文(高)	刻文	刻文(高)	刻文(高)
第11-10	第13-10	石13-10f	16.5	8.8	3.9	16.8	AD210	6/5	赤褐色土	刻文	刻文(高)	刻文	刻文(高)	刻文	刻文(高)	刻文(高)
第11-10	第13-10	石13-10g	16.8	8.8	3.9	16.8	AD210	6/5	赤褐色土	刻文	刻文(高)	刻文	刻文(高)	刻文	刻文(高)	刻文(高)
第11-10	第13-10	石13-10h	17.2	8.3	6.0	16.5	AD210	6/5	赤褐色土	刻文	刻文(高)	刻文	刻文(高)	刻文	刻文(高)	刻文(高)
第11-10	第13-10	石13-10i	17.5	8.8	6.9	17.1	AD210	6/5	赤褐色土	刻文	刻文(高)	刻文	刻文(高)	刻文	刻文(高)	刻文(高)
第11-10	第13-10	石13-10j	17.7	8.3	6.2	16.1	AD210	6/5	赤褐色土	刻文	刻文(高)	刻文	刻文(高)	刻文	刻文(高)	刻文(高)
第11-10	第13-10	石13-10k	18.4	8.8	6.7	16.8	AD210	6/5	赤褐色土	刻文	刻文(高)	刻文	刻文(高)	刻文	刻文(高)	刻文(高)
第11-10	第13-10	石13-10l	18.8	8.8	6.7	16.8	AD210	6/5	赤褐色土	刻文	刻文(高)	刻文	刻文(高)	刻文	刻文(高)	刻文(高)
第11-10	第13-10	石13-10m	19.1	8.8	6.7	16.8	AD210	6/5	赤褐色土	刻文	刻文(高)	刻文	刻文(高)	刻文	刻文(高)	刻文(高)
第11-10	第13-10	石13-10n	19.4	8.8	6.7	16.7	AD210	6/5	赤褐色土	刻文	刻文(高)	刻文	刻文(高)	刻文	刻文(高)	刻文(高)
第11-10	第13-10	石13-10o	19.4	8.8	6.7	16.7	AD210	6/5	赤褐色土	刻文	刻文(高)	刻文	刻文(高)	刻文	刻文(高)	刻文(高)
第11-10	第13-10	石13-10p	19.4	8.8	6.7	16.7	AD210	6/5	赤褐色土	刻文	刻文(高)	刻文	刻文(高)	刻文	刻文(高)	刻文(高)
第11-10	第13-10	石13-10q	19.4	8.8	6.7	16.7	AD210	6/5	赤褐色土	刻文	刻文(高)	刻文	刻文(高)	刻文	刻文(高)	刻文(高)
第11-10	第13-10	石13-10r	19.4	8.8	6.7	16.7	AD210	6/5	赤褐色土	刻文	刻文(高)	刻文	刻文(高)	刻文	刻文(高)	刻文(高)
第11-10	第13-10	石13-10s	19.4	8.8	6.7	16.7	AD210	6/5	赤褐色土	刻文	刻文(高)	刻文	刻文(高)	刻文	刻文(高)	刻文(高)
第11-10	第13-10	石13-10t	19.4	8.8	6.7	16.7	AD210	6/5	赤褐色土	刻文	刻文(高)	刻文	刻文(高)	刻文	刻文(高)	刻文(高)
第11-10	第13-10	石13-10u	19.4	8.8	6.7	16.7	AD210	6/5	赤褐色土	刻文	刻文(高)	刻文	刻文(高)	刻文	刻文(高)	刻文(高)
第11-10	第13-10	石13-10v	19.4	8.8	6.7	16.7	AD210	6/5	赤褐色土	刻文	刻文(高)	刻文	刻文(高)	刻文	刻文(高)	刻文(高)
第11-10	第13-10	石13-10w	19.4	8.8	6.7	16.7	AD210	6/5	赤褐色土	刻文	刻文(高)	刻文	刻文(高)	刻文	刻文(高)	刻文(高)
第11-10	第13-10	石13-10x	19.4	8.8	6.7	16.7	AD210	6/5	赤褐色土	刻文	刻文(高)	刻文	刻文(高)	刻文	刻文(高)	刻文(高)
第11-10	第13-10	石13-10y	19.4	8.8	6.7	16.7	AD210	6/5	赤褐色土	刻文	刻文(高)	刻文	刻文(高)	刻文	刻文(高)	刻文(高)
第11-10	第13-10	石13-10z	19.4	8.8	6.7	16.7	AD210	6/5	赤褐色土	刻文	刻文(高)	刻文	刻文(高)	刻文	刻文(高)	刻文(高)
第11-10	第13-10	石13-10aa	19.4	8.8	6.7	16.7	AD210	6/5	赤褐色土	刻文	刻文(高)	刻文	刻文(高)	刻文	刻文(高)	刻文(高)

第11表 出土土器(坏)観察表(4)

(外面調整は分類記号で表示した)

発掘 層	調査 年度	出 土 順 号	分 類	寸法(mm)		重量(g)	土質 (土質 分類)	器種 (用途)	内 容			製 法	装 束	備 考	図 録 No.		
				口 径	高				口 縁	底 径	口 縁					底 径	
122	1970	10	1970-10	19.7	4.9	14.0	34.0	A0374	1/2	口へり10mm	口へり10mm	口縁部へり10mm	口縁部へり10mm	口縁部へり10mm	手 拵	⑤	17
126	7	12	-	19.7	5.2	5.2	35.0	A0375	2/3	-	-	-	-	口 縁部へり10mm	手 拵	⑤	17
127	8	13	-	19.7	5.3	5.3	36.0	A0376	1/2	-	口へり10mm	-	-	口 縁部へり10mm	手 拵	⑤	17
128	9	14	-	19.8	5.3	5.3	36.0	A0377	4/5	-	口へり10mm	-	-	口 縁部へり10mm	手 拵	⑤	17
129	10	15	-	19.1	5.1	5.8	35.0	A0378	5/5	-	-	-	-	口 縁部へり10mm	手 拵	⑤	17
130	11	16	-	19.7	5.3	5.3	36.7	A0379	2/3	-	口へり10mm	-	-	口 縁部へり10mm	手 拵	⑤	17
131	12	-	-	19.6	4.9	5.2	35.0	A0379	2/2	口 縁部へり10mm	-	-	-	口 縁部へり10mm	手 拵	⑤	17
132	13	-	1970-13	19.7	5.3	5.4	36.0	A0374	1/2	口へり10mm	-	-	-	口 縁部へり10mm	手 拵	⑤	17
133	14	17	-	19.8	5.3	5.3	35.0	A0374	5/5	-	-	-	-	口 縁部へり10mm	手 拵	⑤	17
134	15	18	-	19.4	5.0	5.2	36.0	A0374	4/5	-	口へり10mm	-	-	口 縁部へり10mm	手 拵	⑤	17
135	16	19	-	19.7	5.3	5.0	35.0	A0374	1/2	-	口へり10mm	-	-	口 縁部へり10mm	手 拵	⑤	17
136	17	20	-	19.4	4.2	5.5	36.2	A0374	2/2	-	口へり10mm	-	-	口 縁部へり10mm	手 拵	⑤	17
137	18	-	-	19.7	5.3	5.7	36.5	A0374	5/5	-	口へり10mm	-	-	口 縁部へり10mm	手 拵	⑤	17
138	19	-	-	19.7	5.2	5.2	35.0	A0374	5/5	-	-	-	-	口 縁部へり10mm	手 拵	⑤	17
139	20	7	-	19.7	5.3	5.2	35.0	A0374	5/4	-	口へり10mm	-	-	口 縁部へり10mm	手 拵	⑤	17
140	21	8	-	19.7	4.9	5.7	36.0	A0374	口縁部へり10mm	-	-	-	口 縁部へり10mm	手 拵	⑤	17	
141	22	9	-	19.6	4.5	5.6	36.0	A0374	口縁部へり10mm	-	-	-	口 縁部へり10mm	手 拵	⑤	17	
142	23	10	-	19.7	5.1	5.3	36.0	A0374	5/5	-	口へり10mm	-	-	口 縁部へり10mm	手 拵	⑤	17
143	24	11	11	19.1	5.3	5.9	35.0	A0374	5/5	-	口へり10mm	-	-	口 縁部へり10mm	手 拵	⑤	17
144	25	12	-	19.4	4.7	5.2	35.0	A0374	5/4	-	-	-	-	口 縁部へり10mm	手 拵	⑤	17
145	26	13	1970-26	19.7	5.3	5.9	36.0	A0374	1/2	-	口へり10mm	-	-	口 縁部へり10mm	手 拵	⑤	17
146	27	14	-	19.7	4.9	5.1	35.0	A0374	5/5	-	-	-	-	口 縁部へり10mm	手 拵	⑤	17
147	28	15	-	19.7	4.9	5.1	35.0	A0374	5/5	-	-	-	-	口 縁部へり10mm	手 拵	⑤	17
148	29	16	-	19.3	4.4	5.4	35.0	A0374	2/3	-	口へり10mm	-	-	口 縁部へり10mm	手 拵	⑤	17
149	30	17	-	19.6	4.9	5.4	36.0	A0374	5/10	-	-	-	-	口 縁部へり10mm	手 拵	⑤	17
150	31	18	-	19.7	5.3	5.9	36.0	A0374	5/5	-	-	-	-	口 縁部へり10mm	手 拵	⑤	17
151	32	19	-	19.7	5.3	5.9	36.0	A0374	5/5	-	-	-	-	口 縁部へり10mm	手 拵	⑤	17
152	33	20	-	19.4	4.7	5.2	35.0	A0374	5/4	-	-	-	-	口 縁部へり10mm	手 拵	⑤	17
153	34	21	1970-34	19.7	5.3	5.9	36.0	A0374	1/2	-	口へり10mm	-	-	口 縁部へり10mm	手 拵	⑤	17
154	35	22	-	19.7	4.9	5.1	35.0	A0374	5/5	-	-	-	-	口 縁部へり10mm	手 拵	⑤	17
155	36	23	-	19.7	4.9	5.1	35.0	A0374	5/5	-	-	-	-	口 縁部へり10mm	手 拵	⑤	17
156	37	24	-	19.7	4.9	5.1	35.0	A0374	5/5	-	-	-	-	口 縁部へり10mm	手 拵	⑤	17
157	38	25	-	19.6	4.9	5.4	36.0	A0374	5/10	-	-	-	-	口 縁部へり10mm	手 拵	⑤	17
158	39	26	-	19.4	5.0	5.6	36.0	A0374	5/10	-	-	-	-	口 縁部へり10mm	手 拵	⑤	17
159	40	27	-	19.8	4.8	5.6	35.0	A0374	1/2	口へり10mm	口へり10mm	-	-	口 縁部へり10mm	手 拵	⑤	17
160	41	28	1970-41	19.7	5.3	5.6	35.2	A0374	口縁部へり10mm	-	-	-	-	口 縁部へり10mm	手 拵	⑤	17
161	42	29	-	19.6	5.1	5.6	35.0	A0374	4/5	-	-	-	-	口 縁部へり10mm	手 拵	⑤	17
162	43	30	-	19.1	4.8	5.4	36.0	A0374	4/5	-	-	-	口 縁部へり10mm	手 拵	⑤	17	
163	44	31	-	19.2	5.1	5.3	35.0	A0374	5/10	-	-	-	口 縁部へり10mm	手 拵	⑤	17	
164	45	32	-	19.5	5.7	5.9	36.0	A0374	4/5	-	口へり10mm	-	-	口 縁部へり10mm	手 拵	⑤	17
165	46	33	-	19.7	4.7	5.1	36.0	A0374	5/4	-	口へり10mm	-	-	口 縁部へり10mm	手 拵	⑤	17
166	47	34	1970-47	19.9	5.3	5.6	36.1	A0374	口縁部へり10mm	-	-	-	-	口 縁部へり10mm	手 拵	⑤	17
167	48	35	-	19.4	4.8	5.2	36.0	A0374	5/5	-	口へり10mm	-	-	口 縁部へり10mm	手 拵	⑤	17
168	49	36	-	19.4	4.8	5.3	36.0	A0374	5/5	-	口へり10mm	-	-	口 縁部へり10mm	手 拵	⑤	17
169	50	37	-	19.4	5.0	5.2	36.7	A0374	5/5	-	口へり10mm	-	-	口 縁部へり10mm	手 拵	⑤	17
170	51	38	-	19.3	5.0	5.2	36.0	A0374	5/5	口 縁部へり10mm	-	-	-	口 縁部へり10mm	手 拵	⑤	17
171	52	39	-	19.5	4.8	5.2	36.2	A0374	5/5	口へり10mm	口へり10mm	-	-	口 縁部へり10mm	手 拵	⑤	17
172	53	40	-	19.5	5.2	5.6	36.0	A0374	5/5	-	口へり10mm	-	-	口 縁部へり10mm	手 拵	⑤	17
173	54	41	-	19.3	4.5	5.6	35.5	A0374	5/4	-	口へり10mm	-	-	口 縁部へり10mm	手 拵	⑤	17
174	55	42	-	19.3	4.8	5.7	35.0	A0374	5/10	-	-	-	-	口 縁部へり10mm	手 拵	⑤	17
175	56	43	-	19.3	5.0	5.4	36.0	A0374	2/3	-	口へり10mm	-	-	口 縁部へり10mm	手 拵	⑤	17
176	57	44	-	19.2	5.0	5.4	36.2	A0374	5/5	-	-	-	-	口 縁部へり10mm	手 拵	⑤	17

第12表 出土土器(坏)観察表(5)
(外面調整は分類記号で表示した)

発掘 層 番号	発掘 位置	目録 番号	計測 寸法	重量	土質 分類	土器 分類	外面調整			出土 状況	備考	図 番	注	出 土 人		
							口 縁	底 縁	側 縁							
17	10-12	17	18.9	4.2	3.4	38.9	AG28	0.5	口縁調整	底縁調整	側縁調整	中層	堀内(17Y82)	①	①	フ
17	12	18	18.9	3.7	3.8	38.5	AG28	0.5	口縁調整	底縁調整	側縁調整	中層	堀内(17Y82)	①	①	フ
17	14	19	18.4	4.7	3.0	38.8	AF28	0.5調整	口縁調整	底縁調整	側縁調整	中層	堀内(17Y82)	①	①	フ
18	10-11	20	18.2	4.4	3.0	38.9	AG28	0.5	口縁調整	底縁調整	側縁調整	中層	堀内(17Y82)	①	①	フ
18	14	21	18.0	4.7	3.0	38.8	AG28	0.5	口縁調整	底縁調整	側縁調整	中層	堀内(17Y82)	①	①	フ
18	17	22	18.3	4.2	3.8	38.4	AG28	0.5	口縁調整	底縁調整	側縁調整	中層	堀内(17Y82)	①	①	フ
18	18	4	18.3	4.6	3.7	38.5	AG28	0.4	口縁調整	底縁調整	側縁調整	中層	堀内(17Y82)	①	①	フ
18	18	5	18.3	4.9	3.0	38.9	AF28	0.4	口縁調整	底縁調整	側縁調整	中層	堀内(17Y82)	①	①	フ
18	20	8	18.2	4.9	3.4	38.9	AG28	0.5	口縁調整	底縁調整	側縁調整	中層	堀内(17Y82)	①	①	フ
18	21	7	18.4	4.8	3.3	38.3	AG28	0.4	口縁調整	底縁調整	側縁調整	中層	堀内(17Y82)	①	①	フ
18	22	8	18.7	4.9	3.7	38.3	AF28	0.5	口縁調整	底縁調整	側縁調整	中層	堀内(17Y82)	①	①	フ
18	22	9	18.8	4.7	3.8	38.8	AG28	0.5	口縁調整	底縁調整	側縁調整	中層	堀内(17Y82)	①	①	フ
18	24	10	18.5	4.8	3.0	38.5	AG28	0.5	口縁調整	底縁調整	側縁調整	中層	堀内(17Y82)	①	①	フ
18	26	11	18.7	5.2	3.8	38.3	AG27	0.5	口縁調整	底縁調整	側縁調整	中層	堀内(17Y82)	①	①	フ
18	1	12	18.5	5.0	3.4	38.9	AG28	0.4	口縁調整	底縁調整	側縁調整	中層	堀内(17Y82)	①	①	フ
18	3	13	18.5	4.5	3.4	38.8	AG28	0.5	口縁調整	底縁調整	側縁調整	中層	堀内(17Y82)	①	①	フ
18	3	14	17.4	5.0	4.8	38.2	AG28	0.5	口縁調整	底縁調整	側縁調整	中層	堀内(17Y82)	①	①	フ
18	4	15	18.4	5.7	3.0	38.3	AG28	0.5	口縁調整	底縁調整	側縁調整	中層	堀内(17Y82)	①	①	フ
18	5	16	18.0	5.4	4.2	38.5	AG28	0.5	口縁調整	底縁調整	側縁調整	中層	堀内(17Y82)	①	①	フ
18	4	17	18.3	5.4	3.2	38.0	AG28	0.5	口縁調整	底縁調整	側縁調整	中層	堀内(17Y82)	①	①	フ
18	10-12	7	18.2	4.9	3.8	38.8	AG28	0.5	口縁調整	底縁調整	側縁調整	中層	堀内(17Y82)	①	①	フ
18	12	8	18.1	5.2	4.0	38.9	AF28	0.5調整	口縁調整	底縁調整	側縁調整	中層	堀内(17Y82)	①	①	フ
18	12	9	18.4	5.4	3.0	37.8	AF28	0.5	口縁調整	底縁調整	側縁調整	中層	堀内(17Y82)	①	①	フ
18	18	10	18.3	5.3	3.9	38.6	AF28	0.4	口縁調整	底縁調整	側縁調整	中層	堀内(17Y82)	①	①	フ
18	10-11	11	18.1	4.7	4.0	37.6	AG28	0.6	口縁調整	底縁調整	側縁調整	中層	堀内(17Y82)	①	①	フ
18	2	12	18.4	4.7	3.8	38.4	AF28	0.5	口縁調整	底縁調整	側縁調整	中層	堀内(17Y82)	①	①	フ
18	3	13	17.8	5.3	3.9	38.6	AG28	0.5	口縁調整	底縁調整	側縁調整	中層	堀内(17Y82)	①	①	フ

第13表 出土土器(坏)観察表(6)

(外面調整は分類記号で表示した)

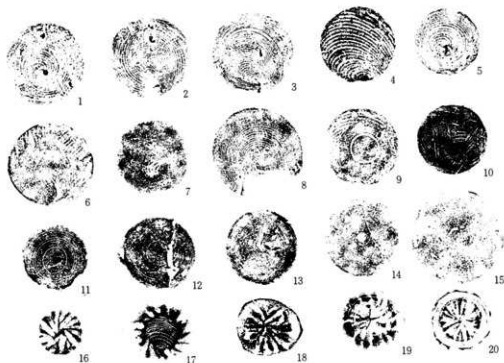
発掘層 No.	発掘 位置	時期	計測値(mm)			出土地点 (1/20)	土器の 種類	外面調整			土 器 名 称	出 土 年 代	注 意 点	出 土 人 員	
			口 径	高	底 径			口 縁	底 縁	口 縁					底 縁
204	20-1	20-1	14.0	4.3	8.5	30.7	AF24	9.00	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ
205	2	2	13.7	4.1	8.5	29.9	AF24	9.00	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	
206	3	3	14.1	3.7	7.8	40.4	AG23	4.5	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	
207	4	4	13.8	3.1	8.4	37.0	AG23	4.5	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	
208	5	5	14.3	3.2	7.8	39.9	AG23	5.00	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	
209	6	6	14.0	4.8	8.3	30.2	AF24	4.5	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	
210	7	7	14.3	4.5	8.5	31.8	AG24	7.50	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	
211	8	8	14.0	4.8	8.0	30.4	D13	9.00	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	
212	9	9	14.0	4.7	7.8	34.1	AG24	3.00	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	
213	10	10	14.0	4.7	8.6	33.8	AG24	3.5	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	
214	11	11	14.3	4.3	7.8	30.2	AG24	3.2	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	
215	12	12	13.9	4.8	8.0	26.5	AF23	7.00	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	
216	13	13	14.8	3.9	7.2	34.7	AF24	2.5	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	
217	14	14	14.8	4.7	5.8	32.4	AF24	3.2	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	
218	15	15	14.8	4.7	5.8	34.1	AF24	3.5	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	
219	16	16	15.3	4.1	8.5	30.2	AF24	2.5	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	
220	17	17	14.0	4.8	8.2	30.0	AF24	2.5	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	
221	18	18	14.0	4.3	8.0	28.1	AF24	3.2	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	
222	19	19	14.2	3.1	7.8	31.3	AG24	3.2	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	
223	20	20	14.4	4.2	4.3	37.8	AF24	7.00	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	
224	21	21	17.0	4.8	8.8	30.4	AG24	4.5	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	
225	22	22	13.8	3.8	5.7	30.2	AG23	7.00	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	
226	23	23	13.5	3.8	3.8	37.0	AF24	4.5	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	
227	24	24	14.0	4.7	5.8	33.4	AG24	9.00	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	
228	25	25	14.2	3.1	8.0	30.4	AF24	4.5	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	
229	26	26	14.2	4.3	8.5	31.7	AG24	4.5	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	
230	27	27	14.3	3.1	3.9	30.2	AG24	9.00	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	
231	28	28	14.4	4.8	8.8	29.9	AG24	4.5	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	
232	29	29	13.9	3.2	5.8	34.7	AF24	3.00	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	
233	3	3	14.8	3.8	5.5	38.1	AF24	2.5	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	
234	4	4	14.1	4.8	4.5	34.8	AF24	3.2	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	
235	5	5	14.8	3.8	3.8	33.8	AG24	3.2	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	
236	6	6	14.0	3.8	7.8	32.1	AF24	3.5	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	
237	7	7	13.2	4.8	3.4	38.4	AF24	3.2	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	
238	8	8	14.2	3.5	4.1	36.7	AF24	9.00	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	
239	9	9	14.8	3.1	8.5	38.5	AF24	9.00	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	
240	10	10	13.8	4.8	4.7	33.0	AF24	3.5	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	
241	11	11	13.8	3.0	8.4	31.3	AF24	3.5	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	
242	12	12	14.0	3.9	3.4	36.7	AF24	2.5	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	
243	13	13	13.1	4.1	3.0	28.9	AF24	7.50	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	
244	14	14	14.0	4.8	4.1	31.0	AG24	3.4	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	
245	15	15	14.3	3.8	3.8	33.9	AF23	9.00	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	
246	16	16	14.3	3.8	8.1	28.0	AG24	4.5	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	
247	17	17	14.8	3.2	3.8	30.4	AF24	9.00	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	ナナコノテ	

次に坯の形態について述べる。

形態を示すものとして、口径と器高の割合を径高指数として算出すると第16表のような結果を得る。これによると全体としては指数 34.5前後に集中する傾向にあるが、B I b-H₂ (第13図1~24、写真図版26-8~27-14)、B I b-H₄ (第14図1~3、写真図版28-1~3)、B I c-H₅ (第23図4~9、写真図版32-1~6)、B I c-W₁・W₅ (第23図10~13、写真図版32-7

第15表 出土土器(坯)観察表(8) (外面調整は分類記号で表示した)

No.	分類記号	口径	口径高比 (%)			口径高比 (1/10)	口径高比 (1/10)	口径高比 (1/10)			口径高比 (1/10)	口径高比 (1/10)	口径高比 (1/10)	口径高比 (1/10)	口径高比 (1/10)	口径高比 (1/10)	口径高比 (1/10)	口径高比 (1/10)	口径高比 (1/10)	口径高比 (1/10)
			口径	口径	口径			口径	口径	口径										
20	B I b-H ₂	15.0	4.2	5.8	35.3	AG10	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5
21	B I b-H ₂	15.0	4.2	5.8	35.3	AG10	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5
22	B I b-H ₂	15.0	4.2	5.8	35.3	AG10	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5
23	B I b-H ₂	15.0	4.2	5.8	35.3	AG10	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5
24	B I b-H ₂	15.0	4.2	5.8	35.3	AG10	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5
25	B I b-H ₂	15.0	4.2	5.8	35.3	AG10	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5
26	B I b-H ₂	15.0	4.2	5.8	35.3	AG10	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5
27	B I b-H ₂	15.0	4.2	5.8	35.3	AG10	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5
28	B I b-H ₂	15.0	4.2	5.8	35.3	AG10	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5
29	B I b-H ₂	15.0	4.2	5.8	35.3	AG10	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5
30	B I b-H ₂	15.0	4.2	5.8	35.3	AG10	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5
31	B I b-H ₂	15.0	4.2	5.8	35.3	AG10	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5
32	B I b-H ₂	15.0	4.2	5.8	35.3	AG10	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5
33	B I b-H ₂	15.0	4.2	5.8	35.3	AG10	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5
34	B I b-H ₂	15.0	4.2	5.8	35.3	AG10	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5
35	B I b-H ₂	15.0	4.2	5.8	35.3	AG10	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5
36	B I b-H ₂	15.0	4.2	5.8	35.3	AG10	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5
37	B I b-H ₂	15.0	4.2	5.8	35.3	AG10	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5
38	B I b-H ₂	15.0	4.2	5.8	35.3	AG10	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5
39	B I b-H ₂	15.0	4.2	5.8	35.3	AG10	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5
40	B I b-H ₂	15.0	4.2	5.8	35.3	AG10	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5
41	B I b-H ₂	15.0	4.2	5.8	35.3	AG10	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5
42	B I b-H ₂	15.0	4.2	5.8	35.3	AG10	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5
43	B I b-H ₂	15.0	4.2	5.8	35.3	AG10	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5
44	B I b-H ₂	15.0	4.2	5.8	35.3	AG10	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5
45	B I b-H ₂	15.0	4.2	5.8	35.3	AG10	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5
46	B I b-H ₂	15.0	4.2	5.8	35.3	AG10	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5
47	B I b-H ₂	15.0	4.2	5.8	35.3	AG10	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5
48	B I b-H ₂	15.0	4.2	5.8	35.3	AG10	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5
49	B I b-H ₂	15.0	4.2	5.8	35.3	AG10	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5
50	B I b-H ₂	15.0	4.2	5.8	35.3	AG10	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5



出土土器の底部調整痕

～10)が高い数値を示す。すなわち、黒色処理を施し、体部下端、底部周辺に手持ちヘラケズリを施しているものは器高が高い傾向を持つことを示している。特に底部全面を手持ちヘラケズリ、体部下端を回転ヘラケズリしているものが高い(第23図10・11・12・13)。これら土器は、いずれも底部から内彎を持ちながら立ち上がる体部になっている。

これに対してB I b-W₁・H₄(第14図6・7、写真図版28-9・10)、B I b-P(全)(第14図16～19、写真図版28-11～14)、B I c-H₃・P₅(第23図1・2、写真図版32-11・12)、B III a(第28図1～21、写真図版38-1～13)が小さい値を示す。すなわち、黒色処理を施し、体部下端を回転ヘラケズリ、底部周辺のみを手持ちヘラケズリしているもの、内外面を黒色処理しているもの、黒色処理をせず無調整の酸化炎焼成によるものなどである。特に個体数が少ないが、底部全面にヘラミガキを施したものは、丸底風の底部をもち、口径16～17cmのかなり大形の坏である。

丸底風の底部を有するものとして第14図18・19(写真図版28-13～14)を指摘することができる。この2個体は共にB I b(全)の内外面ヘラミガキ、黒色処理を施したものである。18の体部は内彎が強いに対し、19はやや緩い内彎を示す。

器面付着物(写真図版45-5～8)

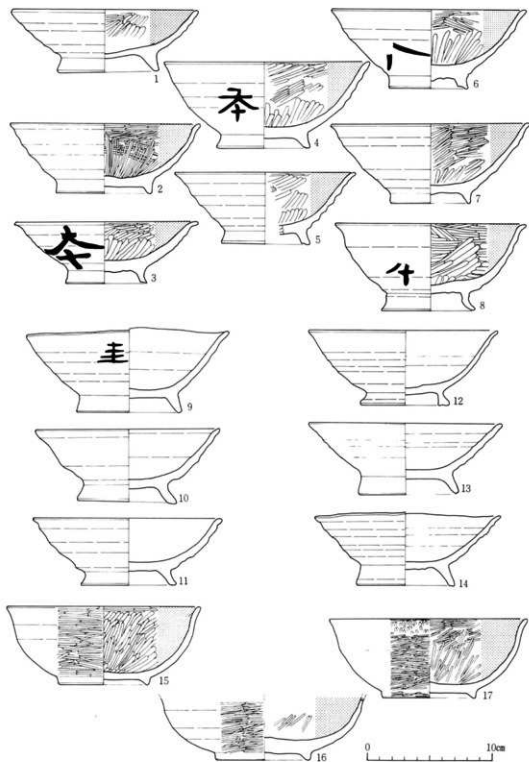
出土した土器のうち、内面の一部に極暗赤褐(5 Y R 3/5)色、光沢のある付着物が認められるものがある。第10図17、第12図14などであるが、特に10-17は内部底・体部に厚く付着している。

この付着物を岩手県・工業試験場で分析した結果、「漆」であることが判明した。このことからそれらの土器は、「漆」を入れる容器に転用し、使用していたものであると考える。

また、坏の一部(第16図8、写真図版31-14)の内外面に油煙状の付着物があり、特に外面はX状に油煙付着が薄い線で認められる。灯明皿の転用であろうか。^(註15)

第16表 坏・径高指数別の個体数一覧表
(・印は平均値に位置する個体数)

分類(平均値)	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	計
B I a (34.8)											3	3	2	4	6	3	2	1	4		4		1				33	
B I b-H ₁ (34.0)											5	3		5	4	4	1	1										25
B I b-H ₂ (35.6)											1	4	3	6	3	2	1	1	1	1	1	1	1	1				24
B I b-H ₄ (35.9)														1		1				1								3
B I b-W ₁ (35.6)																1	1											2
B I b-W ₂ (33.9)											1	1		1		1	1	1	2									8
B I b-W ₁ ・H ₄ (33.5)														1	1													2
B I b-P(全) (33.9)																1	1	1	1									4
B I c-H ₂ (34.5)										1	1	1	1	3	11	10	5	2	3	3	1	1						58
B I c-H ₃ (35.8)													1	1	1	1	1	2										6
B I c-W ₁ (34.9)											1	1	1	3	4	5	3	1	2	1	1	1	1				1	31
B I c-W ₁ ・H ₃ (36.8)																	1	1	1									4
B I c-H ₂ ・P ₅ (28.5)											1	1																2
B I c-P ₅																												1
B III a (34.4)											1	5	4	6	6	15	12	8	3	5	3	2			1			72
B III a (小皿)		1																										1
B III b-H ₁																									1			1
B III b-H ₄																					1							1
B III b-W ₂																					1							1
B III a (22.7)						1					1	2	4	4	1	1	3	2	1			1						21
B III c-H ₁													1															1



第29圖 土器実測圖 (高台付坏、碗)

第17表 出土土器（高台付坏）観察表

（外面調整は分類記号で表示した）

No.	発掘層別	計	計 数				出土層別	焼成別	内 容				加 工	特 徴	備 考				
			口縁部	胴部	底面	台縁部			口縁部	胴部	底面	台縁部			文字	図章	%		
1	29-1	41-1	1	0	1	0	AGⅡ	7/5	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
2	-2	-1	1	0	1	0	AGⅡ	7/5	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
3	-3	-1	1	0	1	0	AGⅡ	4/5	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
4	-4	-1	1	0	1	0	AGⅡ	8/5	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
5	-3	-1	1	0	1	0	AGⅡ	2/5	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
6	-6	-1	1	0	1	0	AGⅡ	3/5	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
7	-7	-1	1	0	1	0	AGⅡ	3/5	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
8	-8	-1	1	0	1	0	AGⅡ	3/5	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
9	-8	-1	1	0	1	0	AGⅡ	完	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
10	-10	-1	1	0	1	0	AGⅡ	4/5	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
11	-11	-1	1	0	1	0	AGⅡ	体調整	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
12	-12	-1	1	0	1	0	AGⅡ	7/5	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
13	-13	-1	1	0	1	0	AGⅡ	体調整	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
14	-14	-1	1	0	1	0	AGⅡ	8/5	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■

第18表 出土土器（高台付碗）観察表

No.	発掘層別	計	計 数				出土層別	焼成別	内 容				加 工	特 徴	備 考				
			口縁部	胴部	底面	台縁部			口縁部	胴部	底面	台縁部			文字	図章	%		
1	29-1	41-1	1	0	1	0	AGⅡ	3/5	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
2	-14	-1	1	0	1	0	AGⅡ	1/5	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
3	-11	-1	1	0	1	0	AGⅡ	4/5	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■

B 高台付坏（第29図、写真図版41-1～14、45-9～11）

・焼成別の個体数

14個体のみであるがBⅠ8個体、BⅢ6個体と、酸化炎焼成のものだけであり、その個体数もほぼ同数である。

・再調整の個体数を分類別にみると、第2表に示したように高台部接合時における技法の違いでとらえることができる。台部接合は坏底部に台部上端をナデ付け接合するものと、へう状の先端を用い、押し付け接合するものとある。この場合、前者はその痕跡が平滑で、渦巻線になるのに対し、後者は菊花状の文様になる。高台付坏における台部接合を上記の2分類でみると、14個体のうち、へう状での押し付けは2個体のみで、他の12個体はナデ付けによるものである。

第19表・高台付坏・焼成別個体数

焼成	個体数	焼成別個体数
		高台付坏個体数
BⅠ	8 (個)	57 (%)
BⅡ	0	0 (%)
BⅢ	6	43
計	14	100

・形態では体部が内彎をもって立ち上がるもの（第29図4、8）があるが、概して直線的に外傾するものが多い。また、台部の形態では厚目で直立するもの（第29図6）と開くもの（第29図5）がある。しかし全体的には、薄い器壁をも



第30図 高台付坏・焼成別の割合

ち、端部を丸くおさめながらやや開く台部が多く、この傾向はBⅢaに特に見られる。

付着物として、第29図11（BⅢa-ア(3)、No 3）の内面口縁部と底部に炭化物が多く付着している。

C 碗（第29図15・16・17、写真図版39-2・3）

3個体のみである。いずれも内外面へラミガキが施され、内面に黒色処理がなされている。台部は低く、断面は三角形になる。体部は丸みをもって内彎し、口縁部でわずかに外反して丸くおさまる。16は底部と体部の一部のみであるが、他の2個体は完形（復元）のものである。

D 高台付皿（第31～33図、写真図版39-4～40-14）

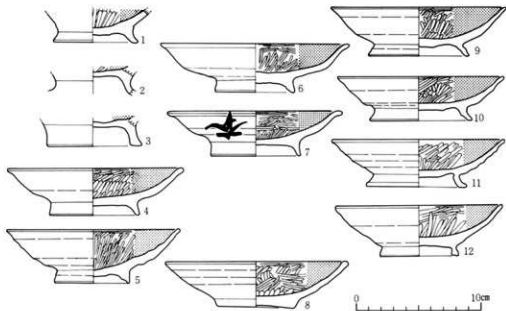
58個体であり、土器総数の13%にあたる。これは、坏300個体につぐ個体数である。

・焼成別の個体数は、ロクロ使用で内面へラミガキ、黒色処理をした酸化炎焼成のもの、BⅠが $\frac{4}{5}$ で大部分を占める。酸化炎焼成で非黒色処理のもの・BⅢは $\frac{1}{5}$ のみである。還元炎焼成のもの・BⅡは1個体（第33図6）のみである。BⅠは51個体であるが、 $\frac{3}{4}$ は台部接合のため、皿底部の切離し痕が不明のものである。

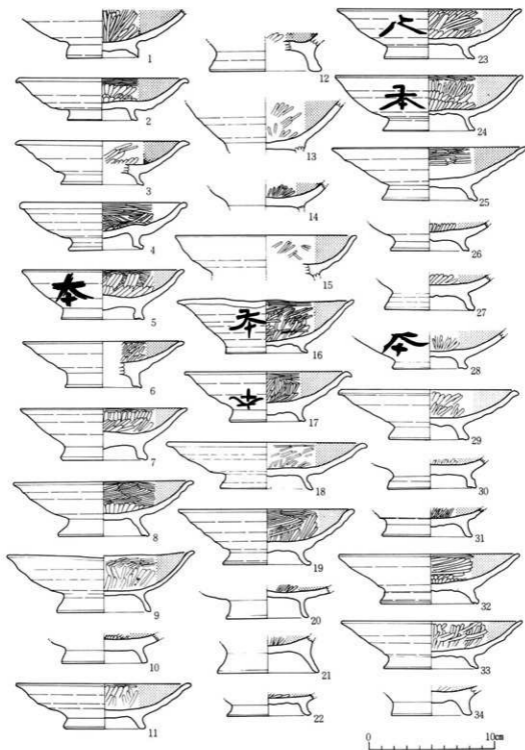
・再調整の個体数をBⅠcの台部接合のようすとみると、へらでの押し付けのため、菊花状になっているものが $\frac{3}{5}$ を占め、ナデ付けよりも多い。しかし、BⅢの非黒色処理のものではナデ付けによるもののみである。

・へラミガキは坏同様、かなり密に施されており、その痕跡も明瞭に観察できる。

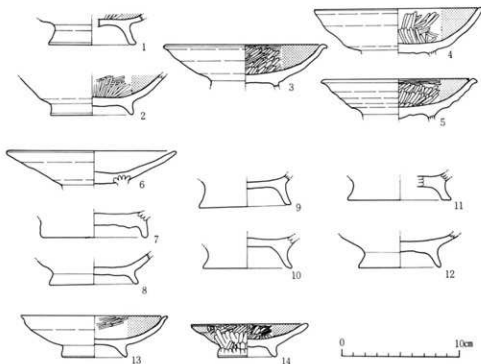
・台部および皿の形態は次のようである。



第31図 土器実測図（高台付皿(1)）



第32図 土器実測図 (高台付皿 (2))

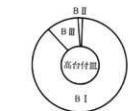


第33図 土器実測図（高台付皿（3））

台部の形態による個体数は(3)11、(4)8、(8)8、(9)7、(7)6となり、概して台部が開く形のようなものが多い。しかし第32図16のように皿底部の周辺をつまみとり、そのまま台部にしたようなものもある。皿部の形態は体部器壁がやや厚く、若干内彎気味に立上がるものと、直線的に外傾するものがあり、口縁部に至ると水平状になり、口縁部はやや厚目で丸くおさまるもの（第32図4・6・15・19）と、薄くやや下向きになるもの（2・3・17など）がある。なお、第33図6（BⅡc-イ・№1）は内面底部に墨痕が広く付着していることから、特殊な用い方をしたものと考えられる。

E 高台付小皿（第33図13・14、写真図版39-1）

2個体共、黒色処理を施しているが、14は内外を黒色処理している。13の体部は底部からやや内彎気味に外傾し、口縁部で段をもって立ち上がるのに対し、14の体部は直線的に広がり、口縁部もそのまま丸くおさまる。



第34図
高台付皿焼成別の割合

第20表・高台付皿・焼成別個体数

焼成	個体数	焼成別個体数
		高台付皿個体数
B I	51 (個)	88 (%)
B II	1	1
B III	6	11
計	58	100

第21表 出土土器(高台付皿)観察表(1)

(外面調整は分類記号で表示した)

調査年度	調査区画	調査位置	計測値(mm)		出土層位(地層)	土器の形状	土器の観察			出土状況	調査者	出土場所	出土層位	出土人	
			口径	高さ			口径	高さ	口径						高さ
2011	第1a-17a		4.0	0.9	AGP9	1.2 (口径)	高台付皿	白	無	無	無	無	無	無	無
2	2	16	6.9		AGP9	1.2 (口径)	高台付皿	白	無	無	無	無	無	無	無
3	3	16	7.1	1.1	AGP14	1.2 (口径)	高台付皿	白	無	無	無	無	無	無	無
4	4	16	6.6	1.1	AGP9	1.2 (口径)	高台付皿	白	無	無	無	無	無	無	無
5	5	16	4.3	0.9	AGP9	1.2 (口径)	高台付皿	白	無	無	無	無	無	無	無
6	6	16	5.1	1.0	AGP9	1.2 (口径)	高台付皿	白	無	無	無	無	無	無	無
7	7	16	4.1	1.1	AGP9	1.2 (口径)	高台付皿	白	無	無	無	無	無	無	無
8	8	16	6.7	0.9	AGP9	1.2 (口径)	高台付皿	白	無	無	無	無	無	無	無
9	9	16	4.9	1.1	AGP9	1.2 (口径)	高台付皿	白	無	無	無	無	無	無	無
10	10	16	5.7	1.2	AGP9	1.2 (口径)	高台付皿	白	無	無	無	無	無	無	無
11	11	16	3.9	0.9	AGP9	1.2 (口径)	高台付皿	白	無	無	無	無	無	無	無
12	12	16	4.1	0.9	AGP9	1.2 (口径)	高台付皿	白	無	無	無	無	無	無	無
13	13	17a	6.3	1.0	AGP9	1.2 (口径)	高台付皿	白	無	無	無	無	無	無	無
14	14	17a	3.4	0.8	AGP9	1.2 (口径)	高台付皿	白	無	無	無	無	無	無	無
15	15	17a	6.2	0.9	AGP9	1.2 (口径)	高台付皿	白	無	無	無	無	無	無	無
16	16	17a	4.9	1.0	AGP9	1.2 (口径)	高台付皿	白	無	無	無	無	無	無	無
17	17	17a	5.1	1.1	AGP9	1.2 (口径)	高台付皿	白	無	無	無	無	無	無	無
18	18	17a	3.7	0.9	AGP9	1.2 (口径)	高台付皿	白	無	無	無	無	無	無	無
19	19	17a	4.2	0.9	AGP9	1.2 (口径)	高台付皿	白	無	無	無	無	無	無	無
20	20	17a	4.4	1.0	AGP9	1.2 (口径)	高台付皿	白	無	無	無	無	無	無	無
21	21	17a	4.9	1.0	AGP9	1.2 (口径)	高台付皿	白	無	無	無	無	無	無	無
22	22	17a	6.6	0.8	AGP9	1.2 (口径)	高台付皿	白	無	無	無	無	無	無	無
23	23	17a	3.3	0.9	AGP9	1.2 (口径)	高台付皿	白	無	無	無	無	無	無	無
24	24	17a	7.8	0.8	AGP13	1.2 (口径)	高台付皿	白	無	無	無	無	無	無	無
25	25	17a			AGP9	1.2 (口径)	高台付皿	白	無	無	無	無	無	無	無
26	26	17a			AGP9	1.2 (口径)	高台付皿	白	無	無	無	無	無	無	無
27	27	17a			AGP9	1.2 (口径)	高台付皿	白	無	無	無	無	無	無	無
28	28	17a	4.7	0.9	AGP9	1.2 (口径)	高台付皿	白	無	無	無	無	無	無	無
29	29	17a	4.9	0.9	AGP9	1.2 (口径)	高台付皿	白	無	無	無	無	無	無	無
30	30	17a	6.8	1.1	AGP9	1.2 (口径)	高台付皿	白	無	無	無	無	無	無	無
31	31	17a	5.9	1.0	AGP9	1.2 (口径)	高台付皿	白	無	無	無	無	無	無	無
32	32	17a	6.5	1.0	AGP9	1.2 (口径)	高台付皿	白	無	無	無	無	無	無	無
33	33	17a	6.7	1.0	AGP9	1.2 (口径)	高台付皿	白	無	無	無	無	無	無	無
34	34	17a	6.7	0.9	AGP9	1.2 (口径)	高台付皿	白	無	無	無	無	無	無	無
35	35	17a	6.7	0.9	AGP9	1.2 (口径)	高台付皿	白	無	無	無	無	無	無	無
36	36	17a	4.4	1.0	AGP9	1.2 (口径)	高台付皿	白	無	無	無	無	無	無	無
37	37	17a	4.4	1.0	AGP9	1.2 (口径)	高台付皿	白	無	無	無	無	無	無	無
38	38	17a	6.4	0.9	AGP9	1.2 (口径)	高台付皿	白	無	無	無	無	無	無	無
39	39	17a	6.1	1.0	AGP9	1.2 (口径)	高台付皿	白	無	無	無	無	無	無	無
40	40	17a	5.5	0.9	AGP9	1.2 (口径)	高台付皿	白	無	無	無	無	無	無	無
41	41	17a	6.4	1.0	AGP9	1.2 (口径)	高台付皿	白	無	無	無	無	無	無	無
42	42	17a	6.2	1.0	AGP9	1.2 (口径)	高台付皿	白	無	無	無	無	無	無	無
43	43	17a	7.8	1.0	AGP9	1.2 (口径)	高台付皿	白	無	無	無	無	無	無	無
44	44	17a	6.2	1.0	AGP9	1.2 (口径)	高台付皿	白	無	無	無	無	無	無	無
45	45	17a	7.2	1.0	AGP9	1.2 (口径)	高台付皿	白	無	無	無	無	無	無	無
46	46	17a	6.4	0.9	AGP9	1.2 (口径)	高台付皿	白	無	無	無	無	無	無	無

第22表 出土土器(高台付皿)観察表(2)

(外面調整は分類記号で表示した)

発掘調査 №	調査 年	分類	計測値 (cm)					出土場所 (1) 遺跡 (2) 埋蔵 (3) 盗掘	出土状況 (1) 埋蔵 (2) 盗掘	内面調整			胎土	焼成	色澤	磨		出土時 の 記入
			口径	底径	口径高	口径厚	口径内径			口縁体	体部	底部				文字	位置	
42	10-11	B1c-105	14.5	3.9	4.9	1.0	7.5	AGD9	9/10	オクヘラ ニガサ	刷ヘリ ニガサ	刷野ヘリ ニガサ	赤	中硬	灰白色 (15YR 7/2)			60
43	14	-			8.1	1.1	8.4	AB9.3	自然成形	木	刷	-	赤	中硬	灰白色 (10YR 7/2)			6
47	10-11	- 埋			8.4	1.7	7.5	A7D9	自然1/2	-	-	-	赤中硬	灰白色 (10YR 7/2)			60104	
48	2	-			8.9	1.0	7.0	A7D9 AGD9	1/3	-	オクヘラ ニガサ	-	赤	中硬	灰白色 (15YR 7/2)			60102
49	3	14	-	14.0		5.7		A7D9 AGD9 AGD9	1/3	刷	オクヘラ ニガサ	-	赤	中硬	灰白色 (10YR 7/2)			ナン
50	4	-	埋 (14)		8.8			AGD9	1/3 (埋蔵)	刷	刷ヘリ ニガサ	-	赤	中硬	灰白色 (15YR 6/2)			60107
51	4	14	-	13.2		6.1		A7D9 AGD9	1/3 (埋蔵)	オクヘラ ニガサ	-	赤	中硬	灰白色 (10YR 6/2)			6044	
52	4	埋蔵-1	14.5	2.9				AGD9	自然成形	オクヘラ ニガサ	オクヘラ ニガサ	オクヘラ ニガサ	赤	中硬	灰白色 (5Y 5/1)			6031
53	7	埋蔵-170					6.2	AB9.3	自然9/10	木	刷	-	赤中硬	灰白色 (15YR 5/1)			42	
54	8	埋蔵-170			7.0	0.9	7.6	AGD9	1/5	-	-	-	赤中硬	灰白色 (15YR 6/1)			38	
55	9	- 埋			8.9	1.5	7.9	AGD9	自然成形	-	-	-	赤中硬	灰白色 (10YR 7/1)			60103	
56	10	-					7.4	AGD9	自然4/5	-	-	-	赤中硬	灰白色 (10YR 5/1)			1	
57	10	- 埋			1.4	馬 毛 土		A7D9	自然1/5	-	-	-	赤	中硬	灰白色 (10YR 7/2)			ナン
58	12	- 埋			馬 毛 土	1.5	7.0	AB9.3	1/5	-	-	-	赤中硬	灰白色 (5Y 5/2)			38	

第23表 出土土器(高台付小皿)観察表

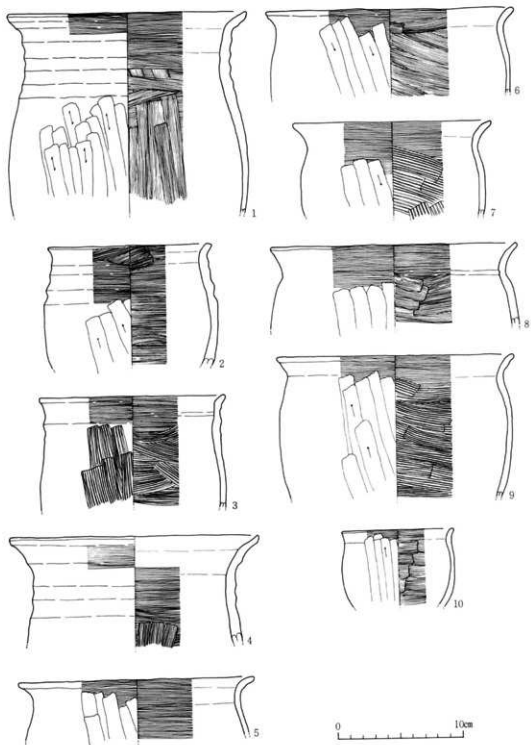
発掘調査 №	調査 年	分類	計測値 (cm)					出土場所 (1) 遺跡 (2) 埋蔵 (3) 盗掘	出土状況 (1) 埋蔵 (2) 盗掘	内面調整			胎土	焼成	色澤	磨		出土時 の 記入
			口径	底径	口径高	口径厚	口径内径			口縁体	体部	底部				文字	位置	
1	10-12	B1c-170	12.5	3.6	5.4	1.0	5.5	A7D9	1/3	オクヘラ ニガサ			赤中硬	灰白色 (12.5Y 7/2)			ナン	
2	14		10.0	2.9	4.8	0.8	5.0	AGD9	1/3	刷ヘリ ニガサ	刷ヘリ ニガサ	自然ヘリ ニガサ	赤	硬	青 (5PB 2/1)			6079

F 甕 (第35図1~10、第36図1~11、写真図版43-1~15)

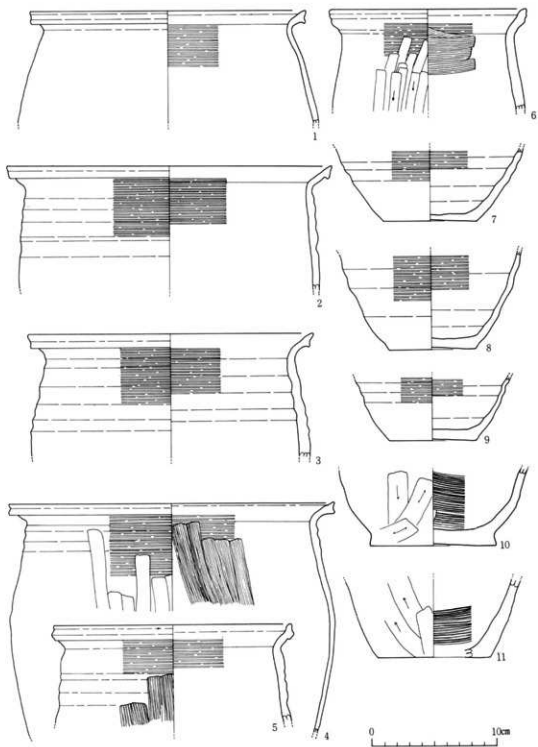
甕にはロクロ未使用のもの(A)と、ロクロ使用のもの(B)とがあり、前者は12個体、後者は16個体である。

AⅢ(イ)は頸部に段・沈線を有するもの(1~4、写真図版43-1~4)で、口縁部は大きく外反するもの(1・4)と短かく外反するもの(2・3)がある。AⅢ(ロ)は頸部に段・沈線を有しないもの(5~10)で、口縁部は大きく外反するものが多い。外面はナデのあと、ヘラケズリが施されるものがほとんどである。また、内面はヘラナデが施される。10(第36図)の底部は木炭痕である。

BⅢは長胴甕で、大形のものが多い。最大径が口縁部にあるものがほとんどであるが、胴部に持つもの(第36図1、写真図版43-9)もある。口縁部は「くの字」状に強く外反し、口唇部を上方向あるいは上下に挽き出している。



第35圖 土器実測圖 (變 (1))



第36図 土器実測図(變(2))

第24表 出土土器(壺)観察表

発掘 層位	発掘 区画	目録 番号	口 径	計 測 値 (cm)			出土地点 (1層分)	発掘状況	口 縁 部			土 質	焼 成 色	出土層 の 記入順	備 考	
				口 径	高	底 径			口 縁 部	割 部	底 部					
1	35-1	43-1	A壺①	1	(19.0)		AG03 A壺①	上半1/4	ナ	ナ	ナ	ナ	赤	中	正山(壺) 4513 No.13	
2	2	2	2	(19.0)			AH53	1/3	-	-	-	-	赤	中	正山(壺) 4513 No.13	
3	3	3	3	(19.0)			AF09	1/4	-	ナ	ナ	-	赤	中	正山(壺) 4513 No.13	
4	4	4	4	(20.0)			AH03	1/5	-	ナ	ナ	-	赤	中	正山(壺) 4513 No.13	
5	36-10	6	5	(19.0)	(19.0)		AG09	上半2/3	赤	ナ	ナ	ナ	赤	中	正山(壺) 4513 No.13	
6	35-4	5	A壺①	1	(20.0)		A 区	上半1/6	ナ	ナ	ナ	ナ	赤	中	正山(壺) 4513 No.13	
7	7	-	7	(19.0)			AG08	1/8	-	ナ	ナ	-	赤	中	正山(壺) 4513 No.13	
8	8	-	8	(19.0)			AG04	1/5	-	ナ	ナ	-	赤	中	正山(壺) 4513 No.13	
9	9	9	9	(19.0)			AG04	1/4	-	ナ	ナ	-	赤	中	正山(壺) 4513 No.13	
10	10	-	10	(19.0)			AF06	1/3	-	ナ	ナ	-	赤	中	正山(壺) 4513 No.13	
11	5	-	7	(19.0)			プロット	1/8	-	ナ	ナ	-	赤	中	正山(壺) 4513 No.13	
12	36-1	6	壺④	2	(22.0)		CG03	1/4	-	ナ	ナ	-	赤	中	正山(壺) 4513 No.13	
13	2	10	4	(20.0)			CG03	1/4	ナ	ナ	ナ	-	赤	中	正山(壺) 4513 No.13	
14	3	11	5	(22.4)			A壺① AG03 A壺①	1/3	-	-	-	-	赤	中	正山(壺) 4513 No.13	
15	7	12	6	(17.0)			AF09	壺①・壺②・ 壺③	赤	赤	-	ナ	赤	中	正山(壺) 4513 No.13	
16	9	12	7	(19.0)			AG09	壺①・壺②・ 壺③	-	-	-	-	赤	中	正山(壺) 4513 No.13	
17	9	14	6	(19.0)			AG09	壺①・壺②・ 壺③	-	-	-	-	赤	中	正山(壺) 4513 No.13	
18	5	7	壺①・壺②	1	(19.0)		AG03	上半1/4	ナ	ナ	ナ	ナ	赤	中	正山(壺) 4513 No.13	
19	6	-	3	(19.0)			AG00	1/8	-	ナ	ナ	-	赤	中	正山(壺) 4513 No.13	
20	4	15	5	(20.0)			AF04	壺①・壺②・ 壺③	-	-	-	-	赤	中	正山(壺) 4513 No.13	
21	12	壺①・壺②		(19.0)			AG09	壺①・ 壺②	赤	ナ	ナ	ナ	赤	中	正山(壺) 4513 No.13	

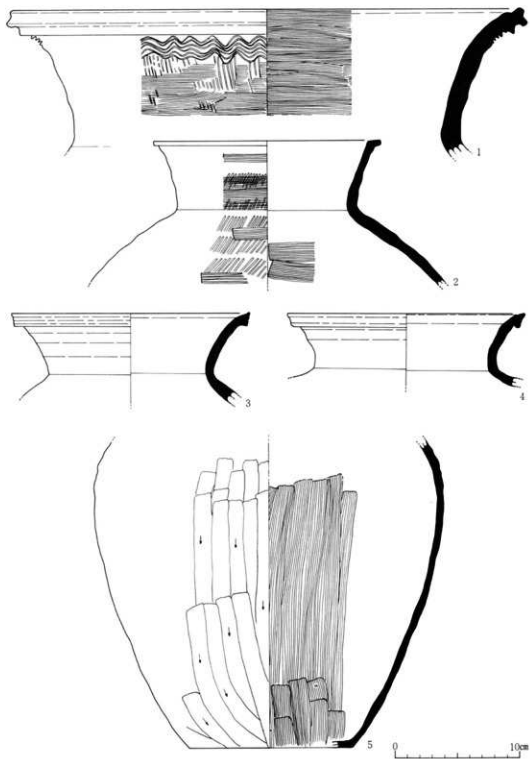
G 壺 (第37図1～5、第38図1～7、第39図1・2、写真図版44-1～10)

16個体のいずれも還元炎焼成によるものである。(1)短頸で広口のもの、(2)長頸、(3)広口で大形のものに分類でき、(1)が9個体で最も多く、(2)、(3)はほぼ同数である。

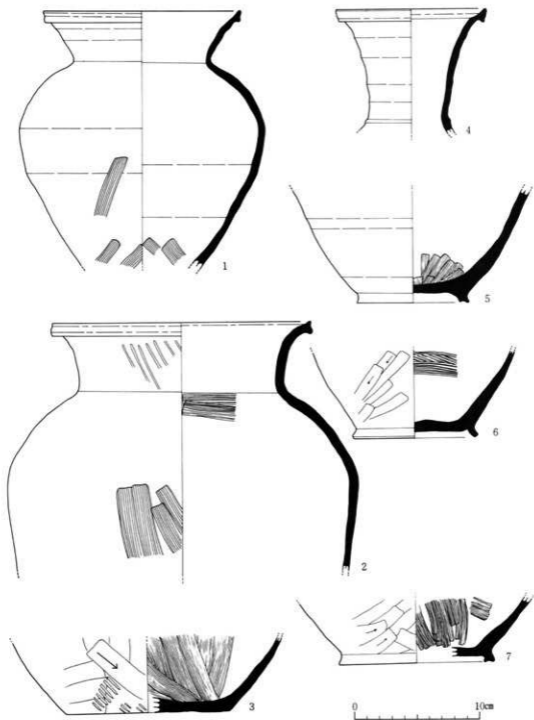
短頸壺(第37図2～5、第38図1～3、写真図版44-1・8・9)は口縁部が大きく外反し、口唇部が上下に挽き出され、断面三角形を呈するものが多い。器面はナデ、ヘラナデが施され、部分的にミガキがみられる。第37図5、第38図3は体部下半にヘラケズリが施される。

長頸壺は4個体あるが、上半部のもの1、下半部のもの3である。第38図4は口縁・頸部である。頸部は肩部からやや広がりをもちながら立ち上がり、口唇部は上下に挽き出される。5・6・7は体・底部である。6・7の体部下半にヘラケズリが施される。

大形壺(第37図1、第39図1、2)は器高が50cmを越えるものである。全形をとらえられるのは第39図2だけであるが、3個体とも丸底になるものと考えられる。第37図1は口径41cmになるものである。口唇部は上下に丸く挽きだされ、口唇部に沈線がまわる。頸部は5条の波状沈線で表現される。また、縦方向に平行叩き痕をもち、そのあとナデで消される。第39図1は肩部内・外面に平行叩き痕をもつ。2は3分の2の残存状態で、ほぼ全形が把握される。外面は平行叩きを縦方向に施し、内面は主にヘラナデを加えている。体部上半に最大径をもち、口縁部は緩やかに外反する。口縁部径24.2cm、最大径38.6cm、器高48.5cm。



第37圖 土器実測圖(壺(1))



第38図 土器実測図 (壺、₍₂₎)